〔表紙〕

# 大久保利通文書　三十八

## ○　二五四　税所篤宛書翰　⑤—750

拝呈、其後御安康被成御座奉敬賀候、次ニ小子碌々相勉候間乍余事御降慮可被下候、此内は御投翰辱拝誦仕候、折角御出京御待申上候処、豈図御因循流石お年が寄り申候、此度之劇場疾ニ御直聞も有之候半、委曲ハ何も不申上候、実に不得止時宜になり立、当夏一生之楽反して一生之災難と相成是又天賦とやいはん、只々世上之口に任せ候外無御座候、決而陳述之賦もなし、此上は盤上一盃張之敗を取候欤又勝ヲ取候欤、投ケサセルカ投ルカノ二ツニ御座候、畢竟此災難は期したる事にて、それ故千思万慮実に肝胆を砕キ容易に進退不致候得共、終に不得止機会と相成舞台懸りに出懸候処、果して一幕終らすに舞台か崩レ勧進元之大損に相成候、しかし未勧進元之金元続キ候故、是より跡幕を開キ格別之はづシも無之候得共、幸に天気もよろしく候間、今三四十日之間にハ凡模様も相分り可申候、兎角懸ケては種々之評判御承知にて御案可有之候得共、幕を仕舞候までにハかならす雑説を御信用被成ましく候、分而申上置候也、

一次郎殿にも別而勉励休暇ことにハ入来至而元気にて候少しも御懸念有之ましく候、随分材器も有之候、評判もよろしく候、

一近来寸暇無之、甚御不沙汰申上候、乍去休日にハ大かた松陰ト内証にて相争ヒ候、同人も来月にハ一応帰坂之由何も御直聞可被成候、藤井は今度相運候付御安心之筈ニ奉察候、

右任幸便御回答旁如此、頓首々々、

十一月廿四日　　利通

税所篤兄

閣下

## ○ 二五五 税所篤宛書翰 ⑥—985

拝啓追日暖和之候、愈以御壮栄被成御座欣然ニ候、去ル十四日御出之貴翰慥ニ落手忝拝読、扨三千円之義早速吉田便より御遣被下是又落掌仕候、種々御面倒懸上候事何共恐縮無申訳候、殊ニ一歎一笑終ニ絶倒云々なと散々之御悪口、畢竟前後誇言と齟齬いたし候辺より、さも御考も御尤ニ候得共、即今維新之際ニ当りてハ昨日之一言ニ拘泥して、今日も明日も来年も固執いたし候ハ所謂頑ノ字を免れす、それ世中ヲ経過するニハ、活用といえるものかなくてハ一歩も被行ものニ無之、かくいえハ益御嘲笑可有之欤も難図候得共、是小子多年経験上より了得したる妙処にして、恐くハ傍観之窺ひ知る所ニあらさるへし、君子見機動と之古言も有之候ニ付、今一応御熟慮被成下度奉希候、

一建物(貞カ)は去ル十二日方相とゝき誠ニ立派ニ出来、則建付候処家屋ハ全ク之成就、十六日ニハ心祝ことくニ親族同志集会小宴を開き、煉瓦々々といえる人達も、結構之壮大造作之美なるに、流石ニ閉口と見得各賞讃して仮令外人に見さし而も誇ルニ足るとの公論に決し大ニ安心仕候、前栽は速成を求めすして逐次着手之筈に候得共、既ニ其形容ハ相調ひ西ニ富岳之半面を顕わし、南は房總之海ニ際し、東は墨水之流に鄰り、北を顧れハ即今石井土木権頭か梅園銀世界をなし、其香郁々加之追々人工を以テセハ人目を奪ふに足ルへし、県令様位之御別荘なれは見る人か人にて宜ク候へ共、中外之雅賓目属する処に候得ハ、めつた之事は出来不申、是余カ徐々タル所以ニ候、御翫味可被成候、

一近来遊猟別而盛ニ而吉井大憤発、則十一日も大山・河村なと同道にて出張候処大に獲有之、小子鳩十四羽、小鳥五羽位打捕申候、尤矢筈ニ而候 此節自ら其妙味を覚へ一六之休日実ニ千秋之思ニ候、それ故一身之健康益堅固、此節ふと愉快なる事無御座吉井にも大ニ其益を得、別而壮健候間御安心可被成候、是は松陰子(五代友厚)之恩賜ニ候間

前条形行御出会之折御伝致可被成下候、

一宇治茶制(製)人某之事御申遣被下、兎角一見之上ならてハ何共難申上候得共、貴兄可然と御見込被成候得ハ信用仕候間、伊知地雇人と一緒ニ御遣可被下候、兎角茶ハ難捨置事故一人は懸置不申候而ハ不相済、人柄正道にて茶之事ニ経験あるものニ候得ハ余ニ望は無之候間、御申越之通ニ候得ハ随分可宜と存候ニ付可然御頼申上候、

一矢太郎一条は先便ニ申上候通ニ御座候間、猶追而取究可申上候、近々半鐘も邸番為致候ニ付会計之事差向致様無之候付、矢太郎江帳留等為致候筈ニ致置候、龍吉も全ク相弁シ不申何欤之事を命し候ハ、矢太郎一人ニ候得ハ随分取揚られ候而ハ込入申候、乍去折角探索中ニ候間外ニ見出候得ハ、固より暫時之事故無論差下し可申候間、不悪御汲取可被下候、高輪も成就相成候処番人相置不申候而ハ、難相済時宜にて無余義差遣申候、左様御安心可被成下候、

一楠公墓銘染筆之事、又々吉田江御含之趣承知仕候、廿五六日方発足之由故、其間ニ逢候様相認可差上候、其他にてハ興ニ乗ししたゝめ候得共、今更ニ考甚汗顔致候位、乍去折角之厳命を背候も非本意、是非相認可差上候、近来休日ニハ遊猟ニ而其他は御承知之通来人等にて、今日社と申寸暇無御座甚込入申候、決而等閑ニ致候心底ニ無之候得共、前条次第御らん置可被下候、重野安繹添削は別紙為写差上候、

一此地別ニ相変候義無御座候、追々之地組も格別六ケ舗事も無御座仕合之至ニ候、従是何も相任セ候心得に御座候、色々之事少々見込相変候とて青筋を立テ異論なと致候ハ、誠ニ白面書生之所為にして既往を追考候得ハ後悔万々ニ候、只今之日本にてナホレヲン・ビスマロク百出候而も外ニ致様あるものニ無之、又即今之人傑とか何とか申候而も、何れも五十歩百歩之差ある而已ニ而、誰の彼のと申程之事ハ決而無之、此節始而悟道致申候、未日本之前途悠遠ニ而成人之上善悪は相分可申、小児之戯れ候内は決而定論之出来候ものニ無之と愚考仕候、ずるいとか何とか名も付可申候得共、今十

年致候得ハ明瞭可致候也、
右御礼旁早々如此、早速呈書之筈候処、今日明日と
打過不埒御高恕所仰候、拝白、
三月廿三日　利通
篤老台下

○　二五六　税所篤宛書翰　⑥—986

「　東京　大久保利通
堺県令税所篤殿
封　」

尚々建具其外相払ものハ吉田江御下知可被下候、
別封差上候積にて相認候処、吉田参事明日出立之由承其
まゝ相托候、
一小楠公墓銘今晩染筆仕候処誠ニ大書ニ而筆も十分ニ無
之、殊ニ拙毫之上如此大書は始而相認中々腕力不相及
候付、此節吉田参事江相托候義は調不申候付、少々試
毫之上追而差上候様可仕候間、左様御承知可被下候、
折角御待可有之と奉存候得共、墨も大丼ニ而もすりた
め不申候而ハ、足り合不申旁間に逢不申候付、何卒御
海容被下度奉願候、終ニ後世ニ残候事故、可成(非)非笑ヲ
受不申様ニと存候事ニ御座候、小楠公之威霊を汚候様
之事有之候而ハ、甚恐縮之至万々相済不申候、
一金百円差上候間、五代方建具代船運賃等、凡而御首尾
被成下候様偏ニ御頼申上候、
右以書添御断旁如此御座候、早々頓首、
三月廿三日夜　利通
篤老台下

○　二五七　税所篤宛書翰　⑦—1096

「堺県令
税所篤殿　大久保利通
親斥要詞
封　一月六日発　」

新春之御祝詞申上候、先以御万福被成御超歳奉敬賀候、
次小子悠然致加年候間、御放慮可被下候、旧冬ハ段々御

面働成上御礼申上候、御返詞申上候其後、松陰子(五代友厚)よりも一封参候付、差当之処岩瀬方江相談相済申候、家作之方ハ凡相済候得共、敷物其余之飾り付等或ハ門廻り前栽着手候へハ、此内申上候通之員数ハ無之而ハ相済不申候、色々目ニ見えぬ入費相生候ニ付甚困却ニ候、何れ不日ニ松陰子出京ニ可有之候間、何も其上ニ致可申と存候、左様御承知可被下候、扨矢太郎事頓ニ暇申出建築も未成功にいたらす、会計向彼是之事ニ付甚差支候得共、右通申出候故、当人いやの(な脱カ)を強而引留候而も無詮事と存其意ニ任セ候、石原よりも細々申諭たる由ニ候得共承知不致趣ニ候、初発より御厚意ヲ以て御遣被下候事故、一両年ハはまり呉候事欤と存居候得共、何か気ニ喰ない事ニ而も有之か甚意外ニ存申候、併当人ニ限り候事ニ無之、跡ハ如何ニも済ぬ事も無之候、先任序右形行申上度旁草々拝首、

一月五日　　利通

篤老台下

尚々可成速ニ御出京有之度屈指いたし候、

〔表紙〕

# 大久保利通文書　三十九

○　二五八　重野安繹宛書翰　④—554

尚々きと（木戸）へもよろしく御断置可被下候、

弥御安祥奉敬賀候、然ハ今日於御宅御企有之候由、早々より参昇いたし度候処段々用向有之不得止遅刻仕候、可成早目罷出可申候付、左様御承知可被下候、碁打ハ差出候、此者本来は海老原謙蔵と申当時五段にても抜群之業有之評判之者ニ而候、先夜は御欺申上御立腹も難図とは存候へ共、仮令御敗走にても御恥辱ニ相成候義は無之候、且は当人之分量も試度戯候間、何卒不悪思食可被下候、殊に当人も余人は兎も角も御国之御方江対し相済ぬ事に候間、先生を欺候事ハ止呉候様再三承候得共、それは跡にて相理候付、決而念遺不致様申置候付、迷惑不致様御挨拶可被下候、昨日来とも御同様にて当人黒を掘申候、勝は固より之事に候へ共、中々能打テ候と感伏之様子ニ御座候、吉原をも本体を顕わさすして打セ度候へ共、素人にて互と申事ハ不出来、又置キ候而は高段に対し難相済と之事候付、成程尤之事ニ存候付無拠本症を顕し申候、御一笑可被下候、先御断旁早々如此御座候、何も面上ニ譲候、頓首、

十二月十日

「重野老台　侍史　　利通」

○　二五九　重野安繹宛書翰　④—653

「重野厚之丞様　至急　　大久保利通」

封

弥御安康奉賀候、然ハ今日ハ芝濱町丁小林と申候野村壮七旅館へ参候付、御閑暇ニ候ハヽ、只今より御出懸被成ましくや、寛々御一戦御願申上度候、此旨早々、頓首、

十一月朔日　　大久保

「重野様」

○　二六〇　重野安繹宛書翰　⑥—995

「重野安繹様　親斥　　大久保利通

封　」

愈御壮栄奉賀候、扨明廿六日御差支無御座候ハヽ、高輪別寓江御来臨被下度、遠方御迷惑と相察候得共、野外之閑趣随分面白、且入高覧候品も有之候付、三字比より御差繰御憤発可被下候、此旨態と得御意候、早々拝首、

四月廿五日　　利通

安繹老台下

猶々芝二本榎西丁一番地ニ而候、伊地知子も申入置候付、同氏江御立寄御同行被下候得ハ能相分り可申候、

○　二六一　重野安繹宛書翰　⑨—1624

愈御安固奉賀候、陳先日申上候末松一条、昨日まてハ上申書上り居不申候、既ニ無余日候間今日は御持参有之候様いたし度、若昨日御差出有之候而も一寸皇居江御出頭有之度、此旨草々申遣候也、

二月九日　　利通

重野殿

○　二六二　重野安繹宛書翰　⑨—1814

「修史局　重野安繹殿　至急　　大久保利通

封　」

朶雲拝見、昨日ハ参昇面白事ニ御座候、然ハ何より之珍品御送被下難有御礼申上候、明日ハ吉原打続為致度候間、

早目より参候様御伝被下度、外ニ大と中村江吹聴可被下候、小子にハ昼迄は御用有之候へ共、何も差構不申候間、先生にも御閑暇ニ候ハヽ、御来杖可被下候、此段早々奉得御意候、頓首、

十二月十二日

「重野厚之丞様　　大久保利通」

○　二六三　重野安繹宛書翰　⑨—1813

「重野厚之丞様　　大久保利通

急キ

封　　」

其後御安康奉敬賀候、然ハ今日町田江参候間、御閑暇ニ候ハヽ、三字比より　御出懸被成ましく也、寛々一戦相願度、尤鷹女召列申候、此旨早々頓首、

十月廿一日

猶御承知ニ可有之候得共、町田氏居所は、西久保松平右近将監元邸ニ而候也、

「重野老台下　　利通」

○　二六四　重野安繹宛書翰　⑨—1815

丸山過刻より御待申上居候、御用も可被為在候へ共、休日にも候間、早速御来賁奉待候也、

十六日

「重野様　　大久保

至急　　」

〔表紙〕

# 大久保利通文書　四十

○　二六五　㊤「御巡行沿道の各県江内示之大意」　⑨—1669

明治九年奥羽江、
御巡行ヲ初メ一視同仁之御旨趣ヲ以引続全国江被為及候
筈之処、昨年ハ国事多端にして不被為調候付、当年北陸
道御巡行被仰出候、抑
聖意之所在各地之風土人情民間之疾苦等を被為知食、天
職を尽サセラルヽニ外ならす候、
一昨年早春減租之
聖詔も被為在候、分而民費節略之御趣意ニ就而ハ御巡行
ニ付、民費を懸、諸事之設不致様県官ニおひて注意第一
ニ候、就中供奉之面々江饗応かましき事一切無之様前以
厚可及内諭候事、
一道路ハ難差置危嶮之場所ヲ除クノ外一切着手ニ不及事
一御巡行御日限定期被為在候付、各地江数日御滞輦ハ不
被為出来、先中一日と御定め之事、
一天覧之場所第一ニ勧業上、第二教育上其他名所旧跡又
ハ御遊覧ニ属候場所ハ可成被為省候事、
一行在所之ため新築等可為無用事、

〔表紙〕

# 大久保利通文書　四十一

## ○　二六六　㊨「行政改革建言書」　㋐—1353

凡時弊ヲ矯テ改革ヲ行ハント欲スルニハ、先以其病源ヲ察シ、由テ来ル所ノ本ニ反シ是カ治療ヲ下サヽル可カラス、何ヲカ病源ト言フカ、熟維新后ノ形勢ヲ察スルニ、数百年因習スル将門ノ権ヲ殺キテ王政ニ帰一シ、封建ヲ変シテ郡県トナシ、公卿諸侯ヲ廃シテ華族トナシ、士ノ常職ヲ解キ四民同等ノ権ニ復セントスルノ大変革ニシテ、恰モ火中ニ水ヲ注キ墨上ニ朱ヲ投スルカ如シ、其事業ノ難キ言ヲ待サルナリ、

其目的タル其模範タル、凡テ海外開明ノ治ニ擬シ、我ノ短ヲ捨テ、彼ノ長ヲ取ルニ外ナラス、故ニ陋習ヲ破古格ヲ変スルノ一途ニ注意セサル可カラス、

於是　明治天皇鋭意図治、左右輔弼是ヲ翼賛シ、誓テ此業ヲ創成シ、人民ヲ開明ノ域ニ進メ国権ヲ振興セシメンコトヲ勤メタリキ、

然ルニ数百年ノ因習ニ浴シ来ル無気無力ノ人民ヲ誘導スルニハ、政府是カ嚆矢ト成ラサルヲ得ス、故ニ先ツ新ニ政府ヲ組立テ、有司百官ヲ置キ、至当ノ人物ヲ撰擢シテ各其職ニ就キ其責ニ任シタリキ、

明治元年ヨリ殆ント十年、其経歴スル処ニ就テ、其弊ヲ生スルヲ見テハ是ヲ改、其害アルヲ見テハ是ヲ除キ、数回ノ変革ヲ行フテ今日ノ体裁ヲ成セリ、

凡ソ経歴ヲ以テ跡ヲ考フルハ必ラス其数ナカル可カラス三年ニシテ三分ノ弊ヲ見ル可ク、五年ニシテ五分ノ弊ヲ見ル可ク、八年ニシテ八分ノ弊ヲ見ル可ク、十年ニシテ十分ノ弊ヲ見可シ、今ヤ其十分ノ弊ヲ見テ十分ノ変革ヲ行フノ時ト言サル可カラス、十分ノ弊トハ何ソヤ、会計

ノ不足是ナリ、是病源なり、前条所説ノ形勢と事実とニ由リ進ンテ成サント欲スルノ点ヨリシテ、目下ノ急ニ着眼シ外人ヲ雇役シ、法律・教育、陸軍・海軍、工業・農業・開拓其他新ニ起ス所ノ事、一トシテ外人ノ説ニ由ラサルハナシ、彼外人タルヤ固ヨリ会計ノ有余不足ヲ顧ルノ理ナキノミナラス、皆彼ノ研窮シタル技倆ヲ試ミント欲シ、開明ノ強国ニ行フ所ノモノヲ以テ模範トシ、是カ建築ヲ起シ是カ事業ヲ成シ、恣ニ意ヲ達シタルモノニシテ、取モ直サス欧亜ノ皮相ヲ移シタルモノト言サル可カラス、

退テ顧ルニ今日本国ノ適度ヲ以テ論センニ、外飾ノ実力ニ超過スル幾層ナルヲ知ラス、所謂出店ヲ張リ過キタリト言フ可シ、

雖然今日迄ノ形勢ニ於テハ、如此ノ弊ヲ受ル止ヲ得サルモノニシテ、全国ノ進歩ヲ速ナラシメシ利益ハ功過相償ト言フ可シ、

由之既往ヲ鑒ミ将来ヲ慮リ、軽重ヲ図リ利害ヲ考ヘ、宜ク此ニ改革スル所アラハ、則禍ヲ転シテ福ト成シ、千載ノ好機会ト言ハサル可カラス、

大綱

政体ノ組立ヲ簡ニスルコト、

外国人ヲ払フコト、

輔丞ヲ書記官トナスコト、

奏任官ヲ減、

判任官ヲ減、

内務省・工部省ヲ合併スルコト、

教部省ヲ廃シ局トナスコト、

各寮ヲ廃シ局トナシ、或ハ合併スルコト、

府ヲ県トナスコト、

警視庁ヲ廃シ内務省中ノ一寮トナスコト、

警保局ヲ廃スルコト、

上等裁判所ヲ廃スルコト、

諸省奏判賞誉ノ法ヲ設クルコト、

新聞条例ノコト、

〔表紙〕

# 大久保利通文書　四十二

※　二六七　前島密・佐々木高行・石井邦猷・品川弥二郎宛書翰

拝啓陳ハ昨日就近火為御見舞御使被下辱存候、右御礼申上度、以寸楮如此候也、

前島　密

――――

前島少輔殿　密

佐々木高行殿

石井　邦猷殿

品川弥二郎殿

書役

※　二六八　留守宅宛書翰

今日は高輪屋舗江愈五六人之御客有之事、

「封

留主宅　　大久保」

※　二六九　留守宅宛書翰

博物局より昨日参り候活版モノ五冊之内二冊早々為持可遣事、

「〆

大久保

留主中へ」

※　二七〇　留守宅宛書翰

今日午後第四時比外国人壱人入来候筈、茶菓相設ヶ置可申候事、

留主中

※　二七一　イタリア公使コントフエ閣下宛書翰

拝啓陳は今廿二日午後第八時音楽被催候付、参上候様御吹聴之趣辱致拝承候処、此内より所労ニ有之、乍残念参堂難仕候付、此段及御断候、拝具、

伊多里公使

コントフエ閣下

※　二七二　（不明）

下官腫物も追々快方ニ有之、此節は根切レ可仕と相考候、今両日ハ保養仕度候付、左様御許可奉願候、何も御案被仰付ましく奉祈候也、

※　二七三　伊東方成宛書翰

七　記

肴料　二十五円

置時辰儀　一

葡萄酒　一箱

右は軽少之品ニ候得共、主人御治療被下候為御謝礼被致進上候間、宜御披露被下度御頼申上候也、

――　――

伊東方成様

執事御中

※　二七四　メモ

熊本　嘉悦市之進

越前薬学生　瓜生　三圓

※　二七五　メモ

備前家老

伊木長門

壹岐か

〔表紙〕

大久保
43

## ※　二七六　建白書案

凡欲為天下成大事、先宜審其形勢備図其天時、伏察人事、利害斯監、成敗斯慮、洞視始終而始得克矣、否、則正名明義之体、察機旋謀之用、或乖戻反側、而　可得忠義之至当、愚謂我国
皇祚之危急、不必待弁説、愚夫愚婦所嚬蹙也、苟抱恢復之大志者姦人、有捨其大而取其小、去其重而就其軽之理邪、仮令雖有一時潔名投命之事疎遠為至也動体当潜黙焦思苦心忍不可忍、待時機到、而当断然大挙、

## ※　二七七　伊地知貞馨宛書翰

「伊地知壮之丞（貞馨）様　　大久保一藏
要詞　　」

尚々中子（中根雪江）参候、

今日は御苦労奉存候、罷帰候処眞木（真木和泉）より書面参居披見之処、是非面会いたし度と之趣意ニ而候、仍而明朝中助より返答いたし候賦ニ而、談合之趣有之候付、御草臥共不被為在候ハヽ、御光来被下候ヘハ仕合奉存候、此旨乍自由早々奉得候意候、推而ハ不申上候、以上、

三月十八日

## ※　二七八　伊地知貞馨宛書翰

「堀小太郎様　　大久保一藏
用事　　」

昨日は御苦労奉存候、今日も御安康奉寿候、扨中根一列面会之義、今日も

御催促被為　在候間、貴兄より御懸合被下、是非明日・明後日之間都合出来候様分而御申越可被下候、先ンかゝり詰候間、御油断被下ましく、此旨早々得御意候、以上、

七月廿六日

## ※　二七九　伊地知貞馨宛書翰

「堀小太郎様　　大久保一蔵
用事　　」

先日差上置候京都より之問合、明日御出殿之序御持参被下度奉頼候、以上、

七月廿七日

追而過刻御問合申上候間、是非今日中中根方へ御懸合可被下候、

## ○　二八〇　奈良原繁・松方正義宛書翰

①—56

圖書殿被成御旅粧、蒸気船前濱廻着次第御発輿被成、御上京候様此節御懸合相成候、就而は長州一件等有之候折柄ニ而、人心動揺いたし候而は不可然義ニ候間、其辺克々御含御周旋可被下候、全体

圖書殿ニハ此内より上京之

命を被蒙、既ニ

御発駕前ニも異賊折合等付候上は、片時も早目被成御上京、事情形勢をも御通達有之度御内意も承知仕居候事ニ候、尤近々御上洛ニも相成候得は、天下之大策も御決定万端御治定可有之候処、以往之形勢は愈多事多難如何之変態も難図訳故、其辺も只今より御見据も相付居不申候而は不相済、何れ

御名代を被　命候御人体御出京相成居不申而は不叶御事ニ候ニ付、旁之

御遠慮ヲ以此節御問越相成候ニ付、左様御含可被下候、

御供人数之義御小納戸以下ハ此前被　仰付置候間其通ニ而可然、併尚又各御存慮も候ハ、達

御聞候上、御差抜有之候而も可然候、

一守衛人数ハ被召附候ニ不及、御手入迄ニ而御手軽之方

宜敷と之
御沙汰ニ御座候、御道中ハ御船中之事候故、大坂御着
船之処より人数被召附可然候、
一蒸汽船御差廻之義は大樹公愈旧冬廿七日御乗船、廿八
日御出帆相成候由、就而は中旬中ニハ御着船可相成候
ニ付、其上ハ御用済可相成候間早々御差廻之賦ニ候、
左候得は、当月末ニハ前濱へ廻船相成可申候、
一当御時節柄可成御手軽之
御旅粧可然
御沙汰ニ候、
一長州御処置之事求馬迄年頭飛脚便より申越候間御聞取
被下候半、既ニ不遠
大樹公ニも御上洛相成候ニ付
公裁被遊御待候、
御趣意ニ御座候、一橋公・越公・容堂公などの御評議
も、幕府ラ以何く迄も御処置被召付度と之御趣意ニ候、
何分にも長州罪科、対
朝廷、幕府大罪ニ候間、至公之御取扱相成候上私事ニ
及、順序不乱義ト
思召候、
右之趣形行大略申越候間
御聞ニ達せられ、宜敷御申談求馬等へ御打合セ可被
下候、以上、

正月五日　　大久保一藏

奈良原幸五郎（繁）様
松方助左衛門（正義）様

奥御小姓辺ニ而も旅馴候者不被召附候而、不相叶訳
ニ候間、御取調御申出可被下候、併此節之義御船中
計之事候ニ付、夫ニハ及ひ申ましく候欤、御着後之
処ハ如何様共御都合出来可申候、何分懸而ハ差究難
申上候間、宜敷御評義可被下候、

## ※　二八一　伊地知貞馨・岸良兼養宛書翰

新春之御慶千里同風目出度申納候、先々各様御安康被成
御超歳奉恐悦候、随而小子御同前加年仕候間、乍略義御
降慮可被下候、年頭御祝詞申上度如此御座候、恐惶敬白、

正月五日　　大久保一藏

伊地知壯之丞（貞馨）様

岸良七之丞（兼養）様

追而御連名大略御免可被下候、桂大夫（家老桂久武）御上京相成委事奈士より承申候、前後諸君御配慮察上候、未定ニハ候得共小大夫（家老小松帯刀）・西郷・桂大夫一同御帰国可然と内評有之候、尤爰元形勢当月末ニも相成候ハヽ両様相分可申候得共、永井等長州紀明も迚も急ニ埒明き丈ニ無之、紀明之ヶ条凡而以書面一々弁瞰いたし候由、此度別而機密ニいたし候筋ニ相見得其書面之趣分兼申候、右ヲ以永井等一応上京、此上長州迄踏入実見之上御処置可相成か、今成ニ而ずらりと御処置可相成か、寛急之間議論六ヶ敷之由、一旦ハ下坂ニ而又々旧臘廿八日晩永井等上京ニ而候、如何決議相成候や追而相分可申候、仍而御当地守衛人数等引取之義未たニ参兼候間、今成ニ而要路両三輩前条通御下りと申事ニ決たる訳ニ御座候さなくてハ勢ひどふもいたし方無御座候、只今にてハ大ニ模様も変ッ、第一熊本国論一変、植田打下サレ、跡ハ淺井・井關両人別而正議ヲ唱へ、御国と合セずんバ迚もいけぬと申者ニ而、近々面会もいたしたいトの事ニ候、是ハ自然ト義ヲ以合候故、真之同一合体ト申ものニ相成可申候、扨大夫等御帰国之処も当に一盃と御得心可被下候、其外申上度候へ共細事申上候得ハ、一朝一夕ニ無之間、略草いたし候、御遠察可被下候、例之龜毫御高見所仰候、乍紙末市來君へ宜舗御伝被下度御願申上候、

## ○　二八二　史「近衛忠熙公宛意見書」①—118

兵庫開港之御処置ニ就而ハ実ニ不容易

皇国之重事件と奉存候、就而は開鎖之論ハ且ク置、何れ天下之賢侯之公論被

聞食、衆議一決之処ヲ以何分共御処置不相成候而は難相済、万一被失御処置候而は天下人心之向背は勿論、

皇国安危之境ニ関係仕候義は必然ニ御座候、然るを天下諸侯之所見も　御尋問不被為在、草卒須臾之間ニ

勅許と相成候而は、誠ニ無勿体御挙動ニ而、

御先代様ニ被為封候而難被為済、殊ニ其期ニ臨ミ混雑ヲ
相生候様ニ而は尚更御大事之訳ニ御座候間、兎角公評一
定之上天下人心之安堵する処ヲ以、
御沙汰不相成候而は呉々も不可然儀ニ付、乍恐兵庫開港
之義即今時務相当之御処置ニ不出候而は難相済候得共、
実ニ
皇国之重事候間、天下侯伯之所見も被　聞食、熟論衆評
一決之上御治定可被遊趣ニ而、
御沙汰相成度奉存候事、

〔表紙〕

追加第二巻

大久保
44

○　二八三　鴻雪爪宛書翰　⑨—1682

来翰拝見、如示諭霖雨不堪欝然候へ共、尚御安祥奉拝賀候、扨再願之御事御差出相成候而何も御差支之儀無御座、相当之御沙汰可有之候間、御出ッ被成可然候、此段御答迄早々、来客中乱筆御免可被下候、拝首、

五月十一日

「〆

雪爪老師　　甲東拝

拝復　　」

○　二八四　岩下方平宛書翰　②—233

両士復

命之上は、一大事件神速相運不申候而は不可然、当府之義未其情実を詳にせす候へとも、眼前無事なるヲ以テ平定といふべからす、畢竟先月十五日兵威ヲ以畏伏セしめ、今日迄無為之姿を成候ハ、

御撫恤之行届たるにてハ更に無御座候、況乎東国之形勢におひても、今日

官軍破竹之勢ひにてハ行処捷さるハなく、終に奥羽之果まて一時兵威之行とゝき候にハ疑を容さる処なるべし、扨其上に至り

皇化を無窮に布せしめ候ハ、所置其宜を得、寛猛其中ニ当り生民安堵之思ひを成にあるへし、忝も

聖上

玉体を労し給ひ塗炭之苦を救ひ給ふと之一点之

御仁心、誠以山岳ヲ動かし鬼神ヲ感せしむる之

英断と仰奉るべし、此際に当而余論ヲ容るゝニ地なし、
今度東下之上実地ニ臨、鎮定之目的外ならすと存候処、
両士より恐多も
宸断云々之次第拝承涕泣之堪奉らす候、此上
御賛成之任ハ
御補翼之御方ニ一帰し候間、無御猶予御尽力被為　在候
様奉伏願候、両士より委曲言上可致候得共、僕愚慮之次
第ハ申上候付、
輔相卿江被仰上被下候様奉伏願候、且亦当府体裁一条も
両士より言上可有之候付、早々御決定至急ニ御沙汰御報
知被下候様奉願候、何れ本体より
御基則不相立候而ハ中々今形にて実之挙り候処無覚束被
存候、最初より心痛仕居候事なから、実地ニ当り微力ニ
ては誠に(困)込入候次第御座候、多罪、

廿九日　　一藏

岩下君

## ○　二八五　岩下方平宛書翰

②—235

拝啓残暑去兼候へ共、尚御安祥被為成御精務奉大慶候、
爰元形体ハ木戸・大木帰京にて御聞取相成候半、其后何
も何も相変候事無之候、何分只今通にてハ行々不可然と
相考申候、仍而両士復
命早々御運相付、当府政体等之事も報知有之度昼夜祈望
之外無御座候、段々愚考之次第建言も致候へとも、微力
にてハ彼是六か舗御座候、折角除弊之論相立一二件ハ近
々被相行事欤トモ相考申候、誰か一人参与之内より東下
相成候様御尽力奉願候、扨豊瑞丸先月廿八日着坂之由仄
に伝承、
君公も御都合克御着城被為在候由、恐悦御同慶奉存候、
御再上之処如何之御事ニ候ヤ、頻に奉案候、何分相分次
第早々為御知被下候様奉願候、白川口も頃日樺山休兵衛
出府にて模様承候処、別而官軍御威光盛大之由、しかし
棚倉を落し候后ハ、大挙一発之軍議にて先小戦ハ取止之
由、尤賊も三里位之仙臺街道須賀川と申処迄悉ク退き居
候由、従当地追々仙臺進撃も出張可相成候間、其節一時
懸り候賦と被聞申候、平潟口之方ハ三邦丸帰帆にて別紙

之趣相分申候、既に棚倉と之道も相開ケ候間運送旁別而致安相成候、岩城平も十二・十三日ニハ弥落候ニハ無相違候、有川矢九郎口を窮申居候、殊之外兵気も相進居候由大慶至極ニ御座候、北越之方委曲之報知有之候筈、爰元江も吉井より一封達シ新納四郎右衛門も出府此内之苦戦之次第承候処、誠ニ絶言語候次第御座候、釘打本込小銃二百五十挺・戒(戎カ)服千枚位差廻候様申来、其外白川より申来、軍務官も当時都合六か舗処ニ甚心配仕候、幸帯刀殿出府中にて相談、横濱方より七八千両之金策相調、随分都合ハ出来申候間安心仕候、最早よほと勢相付新潟も掌握いたし候半欤、当月二日三日比か一時ニ二十八ケ所之台場ヲ孤軍ニ而責(攻)抜候、激戦実ニ愉快之至ニ御座候、右ノ機ヲ以定而追々勝利相成人数益相重ミ、懸念ハ有御座ましく遙察仕候、先々右形行申上候間、平潟口之次第ハ、輔相卿江も御申上置可被下候、早々頓首、

七月十六日　　大久保一藏

岩下左次右衛門様

侍史

追而従御国元志州鳥羽江着船之隊跡人数京師へ着候ハヽ、是非白川口へ差向呉候様頻に樺山よりも承申候間、御当地へ御廻シ可被下候、白川城ハ七口之攻口有之、進撃ニ就而はよほと兵隊無之候而は、六か舗由正治(伊地知)よりも分而申遣候間、呉々御願申上候、以上、

## ○　二八六　中井弘宛書翰　②—249

弥御安祥奉拝賀候、昨日は三井より一万金預書持参にて慥ニ落手仕候、早速御尽力被成下候由別而安心奉厚謝候、別封若松より昨日相達申候、最早落去無相違候半、先以大慶〳〵、少も早目横濱江御廻被下候様御願申上候、先日御頂申上候時計両日相試候処、少々相煩且工ニ過キ素人持にハ如何と存候、同品英製ニ而よろしきのハ有御座ましくや、何卒御探索被下度御頼申上置候、若無之候ハヽ、調文いたし方可然ト相考申候、先返上致置候付、御受取可被下候、此旨早々可得御意候、拝具、

九月三日

追而山口君江宜舗御礼申伝置可被下候、大金策昨日
ハ如何様之御都合御座候や、

「中井弘藏様　　大久保一藏」

〔表紙〕

追加第三巻

大久保
45

## ○ 二八七 松方正義宛書翰

⑨—1690

追日春暖相成愈以御安康被成御奉職奉敬賀候、小子碌々罷在漸々御国元相発当所江先日より滞在、今日解纜仕候間乍憚御降慮可被下候、此内は御投書慥ニ相達難有拝見、是非当所にて拝接可仕と相考居候処、山口江立寄彼是延日相成不得止直乗いたし候、御国元ニおひて何も相変候義も無御座候、二丸公も兎角長御煩ニ而速ニ御出立中々六か舗、先差向之処御猶予之御願ニ相成候、長州も意外之次第にて大に目的も相違仕候、乍去速ニ鎮定致無此上都合ニ御座候、此上は跡折合之処第一之事と懸念致し候、従東京徳大寺公・吉井・土方等山口江被差向候由当所ニ而承申候、今比ハ着相成候半と相察候、御県よりも精々御探索被下、相分候義は為御知被下度御願申上候、段々浮浪輩等へ気脈相通居候と之風説も有之候へ共、縦令有にもせよ格別之事ハ無之と相考候、鶴崎川上彦齋一列之処益評判承候、頃日御探索之趣ニ寄、安心は致居候得共、尚又御手筋有之候ハ、愈慥成情実丈は御探置可被下候、

兎角

皇国之事も当年中ニ何れにも相定り可申と相考候、爾来東京之御模様如何之御事候や、情実相分兼候へ共、御案内通軍局・民部・大蔵之処迚も只今（虫クヒ）ハ大基本相据候見留更ニ相付不申、甚以大難事と相考候、政ハ只民心を得ると、得さるとニ可有之候処、今日之有様にてハ実に旧幕之暴ヲ慕ひ候人心ニ而、長大息之至ニ御座候、従阪地段々愚存も申上置候得共、一体御案内通之次第にて改るにも又一大難事ニ候間、何そ一機会ヲ得不申候而は此弊を一掃いたし候事ハ六か舗相考候、況乎今日ニ相成

候而は困却之外無之候、軍局も即今之姿にては振興之目的無御座候、扨々世中は六か舗ものにて、此節ニ至りよふ〳〵悟道仕候位、御笑察可被下候、段々申上度事も有之候へ共、書中態と簡略仕候、

一一帖差上候間（豊後日田の僧侶）五岳老江何卒染筆御頼被下度御願候、些煩しく可有之候へ共、当分ハ是をたのしミに致居候間、分而御頼被下候様願上候、尤画讃なくてハ面白無御座候、相調候ハ、其元より幸便有之候ハ、直ニ御送被下度、若無之候ハ、当所江御差出可被下候、高栄馮銃如と申支那之画人昨日席画相企一見仕候、誠に面白兎角日本人とハ相替り、風骨之感する処も有之候、

右乍延引回復、且御頼旁呈寸楮候、解纜ニ臨疎略御免可被下候、折角為国家御尽力被下度、御県之処も名に叶候様、当年一盃位ニハ御成功有之度所仰候、一県より隣県ニ推及し終ニ天下ニ模範たらしめ度御事ニ相願候、早々敬白、

三月二日　　甲東拝

松方君閣下

侍史

尚々五岳老染筆呉々よろしく御願申上候、可成早目相調候得ハ仕合、何れ東京より一礼ニ及候様可仕候、

## ※　二八八　藤井助市・石原近昌宛書翰

□□無拠□□之旨にて立セ申候間、着之上早速暇御遣し可被下奉頼候、左候而かならすからくり候而又々登り候手数致候も難計、若左様之儀有之候得ハ、直太郎之例有之、当人之為にも不相成候間、可然御理解被成置可被下候、尤宿許出入等不致様御申付被下度奉頼候、

一正五郎事彼是用向有之登りくれ候様頼遣候処、此節便ニハ参候と之趣別而幸之至ニ御座候、傳作よりも伝言承候、就而ハ自然相違有之ましく候へ共、少々之差支ハ推而参くれ候様乍重畳御申聞被下度、是非直に不申付候而ハ不相済事件も有之、何も同人往復之上御聞取可被下と態と相省き候、尤吉井氏此節帰東可相成候間、同人江御頼被下候得ハ、何も子細無之候付何卒可然様奉願候、

先は右御頼申上度、且御礼答旁如此御座候、敬白、

九月廿六日　　大久保一藏

藤井助市様

石原直左衞門様

猶々御家内様江よろしく、おはさまニハいかゝニ候や、定而御元気之筈三官橋へも同断御伝可被下候、兎にも角ニも結構之事ニ而、当分精勤被成候、直二郎殿・仲右衞門殿・眞太郎なとミな〳〵元気之様子ニ候、当分ハ私ひまなしニ而被参候而も寛々いたし候事も無之候、それ〳〵御伝可被下候、彦之進・伸熊別而之修行ニ而たのしミニ御座候、牧野氏江も其段御伝被下度御頼候也、

「〆

吉井彈正少弼殿　　利通」

## ○　二八九　吉井友実宛書翰　③—387

外ニ御談申上度候処、今朝ハ不及其儀候、後刻村田も参と之事候由、就而は小子見込大に相違之事に御座候、若早目御引取も出来候ハヽ、御立寄可被下候、此旨早々頓首、

十月十日

## ※　二九〇　上書

賜書奉拝読候、昨夜ハ都合能御調談被為済、願書文面等今朝持参ニ付談候様承知仕候、今日午后條公江集会御決定可有之下書持参之事承知仕候、右御所労中御尽力之儀誠以奉恐入候、乍去実急務之義神速相運大慶仕候、此段御請奉申上候、謹白、

十一月十四日　　大久保一藏

上

## ※　二九一　岩下方平宛書翰

昨日は御参御太儀千万奉存候、今日は都合克御処置済相成、御互ニ大慶仕候、最早無懸念明日は発程相決候付、少々御咄合申上置度事件も御座候間、今晩は御来杖奉願候、此段早々拝首敬白、

十二月廿九日

「岩下老台
侍史

大久保生
」

〔表紙〕

大久保
46

## ○ 二九二 税所篤宛書翰

⑨—1716

猶小子支那行中偶作重野へ評を乞候処添削相調、流石大家ニ而実感伏仕候、依而折角之事ニテ凡テ認替、追々御送り可申上候間御引替被下度候、跡ニ残り候得ハ笑を招き而も凡情いやニ候間此段申上置候付、先ツ表紙ナトナヒヤウニ御示シ置可被下候、（五代友厚）松陰子へも其段御伝置可被下候、楠公墓銘モいかゝと今更握掌仕候、

二月廿一日之御投書慥ニ落手辱拝読、愈以御安固被成御座、爾後健康之為御遊猟御勉強之由奉敬賀候、小子ニハ積雪之為妨られ漸々一度出懸候迄ニ而候、乍去最早道路も宜ク相成候付、出精之含、近々高輪住居可相調候付、一両日ッ、滞留、職業相始候ハ、晩菜之補而已ならす、経済之目的依之相立可申、実ニ一挙両得生涯之策を得申候、当方未何も相変候儀無御座、近々新聞も可有之、折角御待可被下候、故ニ、未格別之呵責も無之、殊之外寛々ニ而仕合之至ニ候、

一建物之事則御下知被下候由、甚御面倒成上御礼申上候、最早今明日ニハ相達可申と楽相待居候、風呂樽も御送り被下候由、是又御礼申上候、高輪家作も過日申上候通出来上り候処殊之外立派にて、先ツ我連中別荘ニ而ハ第一等と存候、加之無上之飾り付いたし候も誇ニ足るへしと自負仕候、兎も角速ニ御出京有之度候、

一彼新田一条御取止之由承知仕候、小子ニハ何れにても宜ク、就而ハ猶御相談申上候、過日も申上候通、若半金貴兄方にて御調金出来候ハ、、半金は小子之借用ニいたし度旨御相談ニ及候付、多分何とか御発言被下候

欵と奉存候、前条通御取止ト申事ニ候ハヽ、何卒三千円丈は従前之通改而借用之都合ニ参候得ハ別而仕合ニ付、甚厚顔之至ニ候得共、可然御考候ハヽ、御相談被成下ましくヤ、高輪家作も意外之入費ニ及、其上本妻上京等前後見込に迦れ候事多ク候付、右御取止を幸に猶又御相談申上候、先キ之事ハ先キにして先ツ目前活路第一と存申候、

一右御相談御調被下候ハヽ、早々御送金被下候得ハ難有奉存候、左候而建物・船運賃・金襖紙其外払残之分は、右之内より御弁置被下度、此節差上度候得共、甚手数相成申候間、是又御願申上候、

右御回答御頼迄早々、猶追々可申上候、時下御厭ひ御保護専要所祈候、拝首、

三月四日　　利通

税所篤様

追々両三日ハ稍春光を帯、別而軽々相成候、最早格別之余寒も有之ましく候、吉井・得能其外一同無異追々取会何も御安心可有之候、

## ○　二九三　松方正義宛書翰　⑥—989

拝読、扨木場一条云々被示聞承知仕候、段々御面倒成上候、明日は六字前より御出懸被下候趣承知仕候処、本宅より出懸候付、此方より同刻御宅江御誘可申上候間、左様御承知可被下候、貴答早々拝首、

四月五日　　利通

正義様

## ※　二九四　岩倉具視宛書翰

尊書拝読仕候、今夕七字比より御面談之義有之差支無之哉、尊論之趣奉承知候、何も差支無御座候間同刻より参昇可仕候、此旨御請、早々敬白、

四月廿五日　　利通

岩倉公閣下

## ○　二九五　税所篤宛書翰　⑨—1719

拝啓愈以御堅固被成御座奉敬賀候、先日一封呈上候間御落手被下候筈、松陰(五代友厚)にも両日跡到着、則今日は高輪ニお

ひて争端を開き候処、久々振ニ而殊ニ勝利面白事ニ御座候、是より楽際限有之ましく候、同氏江御伝言之趣も承知仕候、兎も角速に御出発有之度屈指御待申上候、扨長ハ殿事ニ付得能迄御申越候趣承、幸明日其県官員就出立、同道出立被致候、甚御気之毒ニ候得共、却而御賢考通差返候方可然と申請候、矢太郎差添可申筈之処、実は龍吉も病キニ而病院江参居、別而差支甚不本意之至ニ候得共、官員同行ニ而候得ハ何も気遣有之ましく、得能ナトニ申合右通取計候間不悪御汲取可被下候、貴兄ニも御立腹之筈とは親察候得共、必程克御叱置可被下候、人心相替如面、仮令親子之間といえとも、決而一様に参候者に無御座候間、幾重にも御勘弁被成度、分而御忠告申上候、其地か或は県元ニ而も相付セ妻対(帯)ニ而も為致候方御上策と存候御本妻御出張之由、さすれハ同居ニ而居合を御付被成候方大に宜クハ無之哉、其方か大に御安心なるへしと愚考仕候間、乍余計申上候付、何分御熟慮可被下候、余りニ前後之考慮ニ過キ候ト、果は無之候間、よろしいか減ニ而御分別有之、何も差置キサツサト御出懸被成度、当分ハ気候無申分、殊ニ高輪之住居ハ閑にあらす喧ニあらす、一日御出被成候得は御寿命可延候ニ相違無之、半鐘か高し高しと御待設致居候、必ス〳〵寸刻を争ひ御発途可被成候、当方も別而静謐、就而ハ種々之風説も御聞込可有之候得共、決而左ニ無之、小子は七八年来始而如此安気な世を渉り実に天幸と存候、先は右御断旁如此、何も不遠面晤之時に譲り候、拝首、

五月廿一日夜　　利通

税所尊老台下

猶々御出之節は呑用茶御持参被下候様乍御邪魔御願申上候、

## ※　二九六　（宛先不明）

尊書拝読仕候、過日以来之事件于今御落着無之云々、尊諭之趣奉承知候、別段小臣におひて見込も無御座候、就而今晩明朝之間、御入来可被下趣何も差支無御座候、明朝なれは仕合ニ御座候、此段拝答のミ、草々謹白、

六月四日　　利通

## ※　二九七　黒田清隆宛書翰

弥御安康奉敬賀候、然ハ今日ハ於御閑暇ハ高輪草亭へ御同道申上度、御差支無之候ハヽ、四字比より御宅江御立寄御同車可申上候、此旨可得御意候、何分御答可被下候也、

八月七日　　甲東

黒田様

## ※　二九八　杉浦宛（讓カ）書翰

所中二通御差返申候、英公使江一通り返詞原書差返し候而可然欤、此旨早々申遣候也、

八月十二日　　利通

杉浦殿

英公使江返翰早々可仕出（甲）

大久保

## ※　二九九　鮫島尚信宛書翰

拝読、明後日は御入来可被成旨承知仕候、明夕は参上候様被示聞、何も差支無御座候間拝趨可仕候、此内御請可申上候、草々拝具、

八月十三日　　利通

鮫嶋賢台

## ○　三〇〇　大山巌宛書翰　㋐1384

春日艦出発候付而ハ、必破裂と見居之外無之候、就而は跡之順序第一之処大坂江電報書通ナトニテハ迚も行届不申、仍而明日便より誰そ差立候都合ニ致度、岩公江御談之上猶御相談可申上候付、三字過より御入来被下度、此旨草々拝首、

十月六日　　利通

大山君

## ○　三〇一　大山巌宛書翰　㋐1124

只今朝鮮電報到来、互ニ条約相調二月廿七日キン印ノ約ナリ、廿八日弁理大臣帰帆之筈と申来レリ、仍而草々為

御知申上候也、

三月一日

「〆

大山巖殿　　利通」

## 三〇二　松方正義宛書翰　⑨—1767

益御壮固奉拝賀候、扨少々御談申上度義有之候付、明朝御出懸ニ而も御立寄被下度乍御面倒御願申上候、此旨早々拝具、

十一月廿八日　　利通

松方様

「松方正義様　至急　　大久保利通

封　　」

〔表紙〕

大久保
47

## ○　三〇三　石原近義宛書翰

④—666

拝啓仕候、時分柄弥御堅勝被成御奉務奉敬賀候、次ニ小子無異龍動江滞在いたし候間乍憚御放意可被下候、七月廿八日之御書翰去ル朔日相達忝致拝見候、貴公様ニも皇后宮宮之下行幸供奉無御滞御勤御帰東之由珍重之至ニ奉存候、珍敷場所ニ而御たのしミ之筈と相察候○宿許且其地ニおひても皆々無異之由委敷御申越被下大ニ安心仕候、七月廿二日大風吹候得共格別之事ニハ無之由仕合之至ニ御座候、乍去彼是御配慮被下候半と奉存候○福島屋舗地之事此内御返詞申上候間疾ニ相とゝき候筈と奉存候右相済候得ハ外ニいくらも入用無之、尤最初福島之方望ニ而相願置御免有之候上ハいたし方無之、右形行を以川村氏江御断被下度、乍去川村氏方も小子より再三相頼置候訳も有之、折角親切世話被致呉候を相断候而、不都合相成候而も甚気之毒ニ存候、其辺いかゝ之次第ニ御座候ヤ、夫さへ差支無之候得ハ福島方ニ而事足り申候、尤上納等も都合能為御済被下候由、是もいかゝと存候処残置候内ニ而可成相済候由一安心仕候、何とか今一左右ニハ川村氏方有無ハ御申越被下候筈と相察候、兎も角程能相断外ニ振向ヶ道有之候得ハ仕合ニ御座候、猶宜舗御願申上候○リンゴ并ぶどう能相付候由、猶又手入等可然御下知被下度奉頼候○小子ニモ先便申上候通八月ノ廿九日より当国之田舎「スコツトラント」トイヘル処江有名之場所へ廻覧いたし、実ニ珍敷見物いたし、製鉄所・造船場其外絹織(織物)器械・毛物織器械・紙漉器械・芋葛器械・白糖器械其外種々様々之物一見、或は石炭山・塩山なとニ入申候、塩山といえるものハ殊之外高大なるものにて穴之内

ニ往還有之、使節饗応之ため蠟燭を点したる事三万丁実ニ白昼之如ク有之、固より見物人も男女三百人位有之候、塩は皆岩と相成岩を砕き候得ハ塩之固まりたるものなり是は二百年已前ニ開ケたる由、此穴之内ニ而百人計之人数ニ而食事有之意外ニ珍敷候、其外色々御座候得共中々紙筆を以難申上候○龍動府出立も未分兼候得共来月初方ニハ是非発足フランス之様参候賦ニ御座候、御地はいかゝニ候ヤ、当国ハ至而寒ク候得共未格別之事も無之候、

右御答旁如此御座候、頓首、

皇暦十月十五日　　大久保利通

石原近義様

尚々内之事万事宜舗御下知可被下候、直二郎殿御一統被参居候由、よろしく御申入置宜敷相頼候旨御伝可被下候、家来共不埒無之様時々御譴責可被下候、幸次郎屋舗番ニ参居候由しっかり御申付置可被下候屋舗地当分百姓江作為致候趣致承知候也、

## ○　三〇四　石原近義宛別啓書翰　④—667

壱

別啓

髙輪屋舗之事ハ先便御返詞申上候通ニ而疾ニ御承知被下候半、仍而河村氏江形行御断被下候筈、右ニ就而は出立前同人江堅約致置候訳にて、今更変約之訳に当り気之毒ニ存候、然処備前屋舗之儀は岩倉殿遮而御払下ケ相願度候付、小子より河村氏江頼越呉候様承申候間、甚御面働之至御座候得共、早速御出被下御相談被下候様奉願候、最早相片付候得ハ無致方候得共、未其マ、ニテ有之候ハ、、何卒岩倉殿方江御払下ケ相成候様小子より分而希望イタシ候旨宜舗御伝可被下候○当所ニ而意外之儀到来、定而評判も有之候半と存候付為念申上候、其訳はドンロトン江米堅ジョエントナショナルバンク閉店相成、右江使節中其外日本人金子預有之候而、大ニ一同之迷惑と相成申候、小子ニモ今度御地出立前子共学費旁として得能氏世話にて三千両借用ニ而当地江持参、外ニ御手当金千金余手形ニ致置候処、右閉店ニ付全ク不用相成申候、甚意外之事ニ而候得共全災難ニ逢候訳にて致方無御座候、右見当ニ

而段々調文物等致置候故相断り候事も出来不申、不得止当座御拝借いたし候而相済申候、両子学費ハ是非不遣候而不相叶候間、是も御手当之内前拝借いたし候而半分位差送り候付先安心仕候、右之次第ニ而御案も可有之候得共、別段不自由之事ハ決而無御座候付御安心可被下候、右様不丈夫之バンク江預候事不明之訳に候得共、日本人は固より外国人も過分有之候事故無理からぬ事と存候、右バンクハ分散ニテ裁判所之裁断ニ相成候得共、迚モ右金子ヲ償ヒ候事無覚束トノ評判也、跡事ヲ言フテモ詮ナキ事候得共、外より評判御承知候ハヽ、余計之御心配ヲ懸ケ上可申欤ト存形行申上置候、御一笑可被下候、右之仕合ニ而年々子共学費差送り候儀懸念いたし何と欤工夫いたし可申、尚跡便より可申上候間左様御承知可被下候○当所ニ而右之調文品不得止買入申候間、追々飛脚便より横濱運上所江向ヶ差送り申候付、とゝき次第運上所より案内可有之候付、誰ソ横濱江御遣請取方いたし候様御取計被下度奉願候、何れ来年四・五月比ならてハとゝき申ましく候也、

尚々荷数等ハ尚追而可申上候、

正院・外務省・大蔵省等より便宜有之節ハ時々御一封被下度、日新々聞　新聞真事誌新聞日誌書店より御買入サセ、便毎ニ御遣被下候様御願申上候也、

「此表紙ハ図師崎助幹の所望ニより遂行

但し表紙左ノ如、

日本東京
石原近義殿

英国倫敦（ロンドン）ヨリ
大久保利通
平信

封

二月十六日川井田様より巨細出ス、

十一月十六日御仕出ニ而一月廿八日相届候事取調書也、」

## ○　三〇五　石原近義宛書翰

④—673

新春之御祝詞申上候、先以御安康御超歳被成候筈目出度奉存候、次小子旧臘十六日龍動（ロンドン）発足即夜仏国巴里（パリ）江安着、

無異滞留珍敷新春を迎候間乍略義御降慮可被下候、

一岸良氏便江御托九月十一日貴翰旧臘十日龍動(ロンドン)逗留中ニ相達忝拝見、細々御書中之趣承知仕候、不相変万端御世話被成下候由大ニ安心、何も此上可然御頼申上候、多分不行届之事のミ候半と相察候間、決而無御遠慮御指揮可被下候、扨ブドウ・リンゴ等未到着不致候由被仰越、多分其後に相とゝき候事と相察候、乍去サンフランシスコ江相頼置候事故、猶又為念書状さし出置申候付、延引相成候而も必スとゝき可申候間、とゝき次第ニハ追々申上越候通宜御取計可被下候、

一先月廿日比由利公正殿就発足、書状并ニ刀箱一ツ・端物其外入箱一ツ・都合二ツ相頼差送り候間、相とゝき候筈と奉存候、右便ニ馬車入箱之請取書差上候間、是又御落手被下候半、右ハとゝき次第運上所より案内可有之候付、新二郎ニ而も御遣被下候様御願申上候、尤三月初比ニハ相成可申欤、其節差上候請取持参いたし候様御下知可被下候、

一別紙荷数書付ハ追々英国龍動(ロンドン)より差送り候賦ニ取計置候付、三月四月ニ懸とゝき可申候、自運上所案内有之次第ニハ、時々新二郎御差出請取候様御下知可被下候、右之内丸点有之分ハ宅江取寄格護致候様、外ハ横濱之内慥成処江預置候而宜敷、先ニも申上候通伊勢勝方ハ随分丈夫ニ可有之と存候間、此方江預候方可然ト存候、尤別紙馬車之外十六箱ハ未船積入之請取書参不申候間参次第追而差上申候間左様御承知可被下候、

一当所御用向も追々相済可申候、大統領謁見モ旧臘廿六日無滞相済申候間、当所ハ殊之外速ニ相運、当月廿日迄ニハ発足相調可申と存候、当国ハ英国トハ纔ノ違ニ而候得共、気候よ程之相違ニ而初而青天白日を望ミ、殊ニ寒気モ薄く只今比ハ御国之気候と相変り不申候、尤当年ハ例年トハ違ひめつらしき暖気と申事ニ而仕合之至ニ御座候、家宅之壮麗市街之清潔気候之宜シキハ世界第一ニ可有之候、是より獨逸(ドイツ)辺江参候ハ、随分寒気も強ク可有之候、当年は御地も速ニ正月参り候而一同仕舞も宜ク候半と致遙察候、

一時々御仕出之貴書無相違相達申候、一々御返詞行届不

申欤も不相知候得共、凡間違は無御座候間御安心可被下候、先便ニ新聞日誌御送り被下候様申上越候間、乍御面働御買入させ被下、外務省江御たのミ可被下候、薄葉紙小筆之儀も御頼申上候、小筆ハ内ニ有之と覚へ申候、一先便ニ申上候通英国ニ而バンク閉店ニ付、小子ニモ金子過分及捐失申候、日用何も差支候儀も無之候得共、前条之品々凡而調文致置右之払ニ見込居候処、もはヤ調文出来前ニ而相断候儀外国に而ハ出来不申、不得止四千両余拝借いたし相弁候次第ニ御座候、右は帰朝之上凡而上納いたし候筋ニ相願置候付、多分留守中ニハ上納等之事ハ無之候得共、もしや月給を差引くと之事有之も難図、万一左様之儀も候ハヽ、一両月之処ハ何もさし支有之ましく候得共、小子帰朝迄之処宜舗御取計置可被下候、小子帰朝候得ハ右品々之内売却候而も上納いたし可申と存、其外愚存も有之候得共、万一之ためと貴兄迄申上置候付御含置可被下候、必ス御気遣ハ被下ましく候、

右年始御祝詞等申上度あら〳〵如此、大原氏当月中ニ発足帰朝之筈候間、本文之次第何もくわしく同人江相たのミ申上越候含候付御待居可被下候、多分其内ニハ荷物もとゝき申ましくと存候付、万事同人江御談御取計可被下候、頓首、

癸酉正月三日　　大久保利通

石原近義様

## ○　三〇六　史「石原近義宛書翰」　④—674

別封長岡義之と申人ハ租税寮官員ニ而運上所役人ニ而候間、松方氏江御頼慥ニ相届候様御取計可被下候、同人ハ先月廿日比当所発船、二月中旬比ニハ横濱着船相成、同人着之上運上所都合且品物とゝき次第、時々宿許江案内致被呉候様請合ニ而候、幸田尻知人も有之由、猶長岡江申談可然取計呉候様田尻江一封御頼置可被下候○由利氏便よりさし上候馬車入箱船請取ハ、御落手相成候筈と奉存候、是品ハ外品より速ニ相届候半と相考候○小西郷氏・松方氏より投書ニ預候処、此節は返詞も得不差遣候付宜ク御伝被下度御頼申上候、

## ※ 三〇七 覚書

覚

一箱一番　ヘイウード社
一全二番　右同社（但シ番号千二百六十）
一全三番　右同社（但シ番号千二百八）
一全四番　右同社（但シ番号千百三十八）
一全五番　右同社（但番号六百二十四）
一箱六番　右同社
一全七番　右同社
一全八番　ホッチ社
一全九番　右同社
一全十番　ヂョンス社
一全十一番　右同社
一全十二番　右同社
一全十三番　右同社

千八百七十二年十二月十三日

ヂョンス社中
ピッケット氏

○一十四番箱
○一十五番箱　同

荷印 ㊋

一箱一番　帆前　ヘイウード社
一同二番　船名デンビシャー正月卅一日出帆、　〃
一同三番　〃
一同四番　此船請取一通此便ヨリ出ス、　〃
一同五番　〃
一同六番　〃
一同七番　〃
一箱八番　船名デンビシャー正月卅一日出帆、　ホッチ社
一同九番　此船請取書一通此便ヨリ出ス、　〃
一箱十番　ヂョンス社
一同十一番　〃
一同十二番　〃
一同十三番　〃
一箱十四番　船名テイシンク船請取一通、　ピケット社

一同十五番（正月卅一日出帆便ヨリ出ス、）　〃

一箱　馬車入（船請取由利氏・大原氏便出ス、）（船名オリサ、ショーケーイトレーハンケイセウユル社中）

一箱　額類入（此船請取一通ハ仕出シ日限不覚候得共此内相送リ候）

## ○　三〇八　史「石原近義宛書翰」　④—677

拝啓弥御安康被成御勉務奉敬賀候、去月卅一日認書状二月五日「マルシエル」出帆、郵便船より差上候付御落手被下候半、右江英龍（ロンドン）動より送り品之内「ピケット氏」十四番十五番二箱之船請取書一通送り候間、若不相届候ハヽ、外務省江御聞糺シ可被下候、宛ハ外務省御中とイタシ置候付、多分間違も有之ましく存候得共為念御頼申上候、去臘十一月八日郵船より御用状とゝき候得共、御書状不相見得定而吹聴無之候半と相察候、使節一行中江ハ毎も案内有之筈候間、内史之内土方或ハ厳谷等之内ニ御引合置被下候様御頼申上候、○去月卅一日差上候書状ニ県宿許江金子送り方之儀御頼申上、今便別紙県元江之一封差上候付、早便より御遣被下度御頼申上候、右金子之事先にも申上候通り、傳作能ク承知いたし候付可然御談合被下度奉願候、昨年中は差支無之積ニ付先百五十円・二百円之間在金之内より遣候而宜ク、跡ハ尚帰朝之上勘考も有之候、正五郎より傳作江何とか申参居候半と相察候、別紙宿元状江ハ員数ハしたゝめ置不申候付、傳作より正五郎迄書状差遣呉候様御伝へ可被下候、甚乍御面倒御頼申上候也○未巴里（パリ）江逗留いたし候得共、此十日比ニハ発足相調可申と存候、是より白耳義（ベルギー）・和蘭（オランダ）江順行之筈ニ御座候、当地も両三日ハ余寒ニ而雪もふり候得共、格別之事も無之仕合之至ニ候、

右要用のミ如此御座候也、

二月五日　　大久保利通

尚々本文県元江送り物之事、大原氏一応県元江帰省之筈候付、其節御頼被下候而も宜ク、乍去其内幸便有之候ハヽ、御都合次第御取計可被下候、同人着涯都合ニ寄り宿江参られ候而宜ク旨申入置候処いかかニ候ヤ、松方氏転宅出来候ヤ別紙御届可被下候○毎々自由之事御頼申上甚恐縮之至ニ候得共、無御遠慮願

上候付左様御承知可被下候、尤御宅も御入手ニ而旁御面働と察上候得共、御約束通小子帰朝迄は是非是迄通り御気張り被下度奉願置候也、

## ○ 三〇九 高橋新吉宛書翰 ④—690

拝啓弥以御安康被成御精務奉大慶候、小子無異罷在候間乍略義御降慮可被下候、去ル九日前田氏ニも無恙帰朝、久々振面会且御地直左右承知大ニ安心イタシ候、利和ニも前田氏帰朝ニ付而は又々老台御引受被下候由、僻暑ニ付而も御同行可被下御談合被成下候段小子ニ於而ハ無此上安心ニ候処、三人之御引受ニ而ハ甚御迷惑と致恐察候、乍御苦労何卒可然様奉頼候○去ル二日比横濱出帆太平洋郵船江為替手形学費金残差送候ニ付、最早相達候筈と奉存候、右手形半分為念今便差送り候員数六百二十五トル（米金）ニ而候、凡当年中之見込ニ而差送り候間、何分可然御取計被成下候様是又御頼申上候、

右御頼申上度如此御座候也、

八月十五日　　大久保利通

高橋新吉様

尚々前田氏ニモ追々取会同人も一応帰県之賦ニ候得共、未日限等相きまり不申候由、

両子江別段此節ハ遣不申候付宜ク御申聞被下度、此度前田氏より直左右委曲承知致安心候旨御伝可被下候、彦之進写真額面一慥ニ相届則県元江幸便有之差下シ候付、其段モ乍憚御伝可有之候、小子ニモ十五六日比より箱根温泉江遊行之筈ニ御座候、

「□利型ヒラトルヒヤ　日本東京
高橋新吉様　大久保利通

封

」

## ※ 三一〇 西郷従道宛書翰

昨日陶藏咄ニ山県進退之一条一昨夜談合決定、先当分其まゝニ而出省其上ニ而云々と同人江治定、乍去一応貴兄江御示談之上と申事ニ而候由、昨日ハ御談合有之候哉、

先当分其儘ニ而出省之事ハ承知ニ相成候由、無此上事と存候間、未御談無之候ハ、、猶貴兄より促かし速に出省有之様御尽力被下度、余り同し事を何ツマテモゴテ々々いえる情実一向分兼申候、○昨日河村江ハ被仰付候鎮台出張人員ハ御究被成候也、

右奉得御意候、以上、

三月廿四日　　利通

従道様

「西郷従道様　上置　　大久保利通

封　　」

○　三一一　高橋新吉宛書翰　⑤—784

尚々子共書状二通御遣被下辱奉存候、追而返上可仕候、別而無事勉強之由仕合之至御座候、

一昨日は御返書致拝読候、桑港（サンフランシスコ）郵便船之義昨日承合候得ハ、来ル八日方と申事御座候間、御一封御遣被成候ハ、、明日早目拙者方迄御遣可被下候、学費之儀今日濱海迄差出為替取組五六百之間差遣置筈に御座候、跡は貴兄御渡航之折御頼可申上所存ニ御座候、昨日為御知可申上候処、昨日は終日繁用ニ而乍存延引いたし候、当夏休業より帰朝為致候事ハ貴兄よりも委事御申遣置可被下候、此旨草々拝首、

正月五日　　利通

高橋様

「高橋新吉様　　大久保利通

封　　」

※　三一二　大久保達熊・駿熊・七熊・か（ゆ）う宛書翰

一ふて（筆）申いれ（入）候、たかしまとのたよりをもつてつかはされ候ふミ（文）、一昨三日ちやく、一けんセしめ候、まつ〳〵無事、達熊・駿熊・七熊たつしやにてこのうへなく候、そのほか申つかはされ候おもむき何もし（承知）ようち、せつし

やにもだいげんき、すこしもふぐわいこれなく、あんし申されましく候、

一たはこ遣わされたしかにとゞき候、ことのほかながたいざいに而、何もかもきれまにて大によろこひいり候、

一いまだきまりかね候へとも、廿日比までにハ、こゝ元たち之(都合)つがうニなり候はんかとそんし候、

一ぶとう・りんごさしつけかた、じせつおくれ候はんかとそんし候ニ付、早々植木ヤへ申つけさしつけ可申候、なるへくたくさん之方よろしく候、

一桐(きい)ハしんのいで候うへにて、よろしく候はんとそんし候、

一竹はらどの・田尻どのへよろしく伝へ給ハるへく候、いつもの通りおせはに(御世話)あつかり候はつ、おれい申いれらるへく候、

一いはくらさま其外より御しんせつ一左右時々御しらせ下され候よし、なを此方よりめい〳〵御礼申遣すへく候、

右一左右まて申上候、

四月五日　　としみち

達熊殿

駿熊殿

七熊殿

かうとの(ゆカ)

「東京裏霞か関　　佐賀県より
大久保達熊殿　　大久保利通
平安
封」

## ○　三一三　黒田清隆宛書翰

⑥—970

尚々別封拙宅迄相達候様乍御面倒奉願候、

拝啓爾後愈御安固被成御奉職奉賀候、一昨廿七日条公迄一封差上置候付、自ら御伝聞被下候半と奉存候、猶昨日木戸江面会仕候処段々及懇話、此上ハ兼而差出置候書面江、御沙汰之都合ニ依則発足可仕と之事ニ而大ニ仕合之至、偏ニ伊藤出阪之功能有之候、仍而彼御沙汰御使之事ハ最早相運候事ト奉存候得共、前条之次第故、若未ニ候

ハ、神速ニ相決候様猶又御尽力奉頼候、且又小子帰東之事も来月早々と存候得共、都合も有之候付、十日比迄は延引可仕も難図候間、形行大臣公江御申上置被下候様奉願候、此段御頼迄早々拝首、

一月卅日　　大久保利通

黒田清隆様

〔表紙〕

大久保

48

○　三一四　吉井友実宛書翰　③—425

尚々黒田御暇五十日ニ而候処、本文次第ニ付而ハ延引可致候付、御願置可被下候、来月七日比迄に日数相延申候、

弥御安祥被成御奉務奉敬賀候、従兵庫一封一封(衍カ)ヲ以申上候通、去ル十一日解纜、同十二日当所江着候処、兼而風説承候諸隊動揺之事、意外ニ大破之次第にて、木戸初別而心配中ニ而何分不容易趣ニ被察候間、全体一両日にて神速引取候含ニ候得共、凡相静り候迄ハ滞在と相決シ、今日迄延引致候義ニ御座候、隊中二ツニ分れ、司令官以上ハ引離レ、兵卒而已千七八百人位同結、其外隊外江も連及有之、司令官以上ヲ厳罰ニ被処度外ニか条も有之、兵力ヲ以相迫候形に御座候、去ル十三日　知事公より御直ニ断然御沙汰之趣も有之、先拝命之姿に被察候、今日迄無事ニ而打過候間必ス破裂ニハ及申ましく、乍去若一歩ヲ誤候得ハ則瓦解ニ相違無御座、左候而は長一藩之事ニ無御座、実に　天下之御一大事と致配慮候、しかし木戸なと能折柄帰藩精々尽力目的も承候得ハ、差向平定ヲ主とし、しつかり本ヲ固メ十分基則ヲ立付、其上徐々ト手ヲ付ルと之事御座候、只今破裂いたし候様之義有之而ハ甚失策にて、種々愚考も申入置候次第に御座候○右次第にて漸々昨日　知事公御逢に相成、兼而相含候一条も今日之為体ニ而ハ真面目之論も難出来、最目前之大事不相定候而は決而方向も立兼候事当然ニ候間、此節は先引取候考に御座候、旧臘　知事公三田尻へ御立寄之節は、当知事公同所江御出張中にて、旁御直談も被為在、来月初旬に鹿兒島江御出之御約束為有之候由、然処如此行懸り

ニ而迚も来月初旬ニ弥御出之処六ケ舗、少々ハ御延引可相成欤、是非御出之御所存ニ候間、其内内輪之事も大概為相運、且従二位公御上京彼是之事件目的被為決候而、御談合可有之と之御事ニ御座候、仍而小子帰東も延引可仕相考候、小子行処として意外之事而已相起り苦慮不少御高察可被下候、乍去此行前件一事而已之目的之事候間、微力丈ハ励精可仕候、

正月十六日　　大久保利通

吉井君

尚々凡事無異ならんと之見込相付候付先引取申候、万々一又六か舗相成候ハヽ、是非御国より何く迄も御助ケ無之而は不相済事と存候間、委曲平田ナトヘ相含メ報知致候様申含置候、尤一人は御地江も報知いたし候様同断相含候、決而其処江及申ましく候へ共、万一之為入念置候付、左様御含置可被下候、

## ※　三一五　岩下方平宛書翰

朶雲拝見態々遠方迄御使難有奉存候、急ニ帰藩被仰付明朝発足、鳥渡御面会申上度ハ存候へ共別而いそかしく、不本意なから其儀不相叶候、少々御不快之由折角御保養専要奉祈候、木場・吉井等も参居御詠感吟仕候、折角囲碁御修業被成度帰京之上、御指南可申上候、此旨早々奉復如此御座候、頓首、

十一月廿八日

「方平君　　甲東」

## ○　三一六　井上馨宛書翰　⑨—1705

今朝ハ御紙面拝見、兎角寸切と御快気無之由、折角御保養明日ハ是非御参省之処祈念仕候、別冊東京府地税取調并ニ府県貫属家禄云々之二冊御差廻申候、猶明日も御直談可申上候、其余之件々ハ渋沢書面ニ而御承知と相略候、○証券発行渋沢取調之一書正院江伺、一紙相調今日差出候都合ニ運ひ候、○山縣大輔当省江相見得彼定額之事是非取究不呉候而ハ、既ニ鎮台出張之人員も差留置候訳にて甚困却イタシ候付、明日ハ決答致呉と之事ニ候、尚省

中ニ而も彼是紛論不致一定候位ニ候へ共、明日ハ閣下も御出省可有之候付示談御答可申入と申置候、是も面上可申上候得共大略申上置候、

右早々如此候也、

廿四日

尚々是非明日ハ御出不被下候而ハ甚困入候、黒田も出省、昨日御談之次第ハい細承候、○吉田横濱江一応出張いたし度と之趣上野より承候、是も明日御談可申上候と存候也、

「井上老台　二冊付　利通

封　」

## ※ 三一七　渡米中日誌

十二月廿二日蒸気車ニテ桑港（サンフランシスコ）ヲ発ス、当日「サクラメント」ニ至ル

但途中「トクトント」イヘル所ニテ狂病院ヲ見ル、男女院ヲ殊ニス、惣人員凡千百人位、製造ノ清潔万端ノ行届タル可感、院ノ中広間ノ一室アリ是教師ノ法場也、其余可推知、

「サクラメント」ハ「カルホルニヤ」州ノ一首府也、人員凡三万五千人市店最繁栄ノ地ト見ヘタリ、此ニ逗留スルコト両日、

廿三日同所大小ノ議院及ヒ政庁ニ至ル、議員ハ大小合百人位、大ハ鎮台管之、小ハ副鎮台管之ト云、「カルホルニヤ」州ノ長官如県令及「サクラメント」ノ鎮台等面会、

同日製作所ニ至ル製銭（鉄カ）・蒸気車製造其外修復等実ニ莫大之仕掛ニテ、鉄道ヲ建築スルニハ最急務之場所ナリ、

一今夜議院ノ点燈ヲ見ル、一八字ヨリ爨筵凡百五十人、

同日新聞紙ヲ刊行スル場所ヲ見ル、蒸気仕掛器械ニテ一字間二千五百枚ヲ摺出ス、

廿四日「サクラメント」ヲ発シ汽車ニテ廿六日朝「ソールトテーキ」ニ到着為雪逗留、

但途中「ラチフラット、」イヘル山アリ満山生金、此弐鉱山ノ利夥シトイヘリ、或外国人云、金ハ掘リ出シ

候得ハ世上ノ融通ヲナシ又利息ヲ増シ誠ニ重宝ナリ
地ニ埋置候得ハ瓦石モ同様也、我北道ノ如キハ如此
金鉱アルヘシト咄タリ、
一サンソランシスコヨリハ八百四十一リ我二百二十リ半、
此所「ソールトデーキト」イヘルハ潮ノ湖水トイヘル
コトニテ、流百四拾八里横六十リノ湖水ナリ、塩気多
クシテ無魚、
一「ソーヲルトテーキ」ハユタ州ノ内也、此所人員二万
四五千、市店之模様尤繁栄ニ見ヘテ、サクラメントニ
少シク劣レリ、モルモントイヘル宗旨統領ヨングトイ
ヘルモノ二十五年前来リテ開キタル地ト云、此宗旨一
夫ニシテ多妻ヲ娶ル、ヨングハ当七十一歳十六人ノ妻
ヲ娶テ四十九人ノ子ヲ生ス、
一廿七日、於裁判所当所官員・陸軍大将其外町奉行司法
省等百余人ニ面会、
一廿八日、陸軍大将ノ家ニ至ル、八小隊ノ練兵ヲ見ル、
一廿九日、二ヶ所ノ学校ヲ見ル、一ハ商法学校ヲ設、両
替屋・新聞紙屋其外八ツノ課目ヲ分ツテ学習セリ、
一正月二日、劇場ニ至ル、此夜ヨングノ子廿人余見物ニ
来リ居レリ、凡テ女子ナリ、
一当所二十年間ニ如此開キタリシハ要スルニ鉱山ノ利ニ
依ルトイヘリ、
一同四日夜官員一同ヨリ饗筵百三四十人、
三
右日誌中ノ大略也、「サクラメント」□「夕両州ハ
米国中ノ表ニ邦ノ内ニテ□僻遠之地也、都市ハ固ヨ
リ不足論候得共、如此懸隔(カク)ノ地トイヘトモ開化ニ赴
キ智巧ヲ開キ候次第、其政務行届タルヲ知ニ足ル、
依テ以呈□供フ、
○英米アラバマノ一条甚六ケシハ相成償金ヲ出シ候義
一切於□不折合ノ由、日々新聞有之、米ヨリ四億
二千二百万トルノ償金ヲ取ラントイヘルヨシ、中々
折合兼候(趣)赴ニ被聞兎角華盛頓ニ参リ候上委事分□

## ○　三一八　西郷隆盛・吉井友実・諸君宛　書翰

④—663

拝啓仕候、御一別後御音信不承候得共、弥以御堅固被成御奉務奉敬賀候、随而小子ニも去ル七月三日米国「ボストン」ヲ発シアタラチク之海上別而平穏無恙、同十四日英国デバホール港江着、翌十五日倫敦府(ロンドン)江安着、依然無異逗留仕候間、乍憚御放慮可被下候、就ハ米国華盛頓府(ワシントン)都合向之儀は同所より申上候通ニ而別段不申上候、当国之儀ハあやにく僻暑之折ニ而女王其外官員都而出払ひ候折柄にて、余計ニ掩留不致候而不相叶、しかし当国ハ名誉之場所柄故段々見物所ハ多ク、是非三四旬ハ相滞候初より之積ニ候間十分目撃致度存候、当分ハ何方へ参候共同様ニ而不得止次第ニ御座候、○御地も御静謐之筈奉察候、乍恐

主上御巡幸無御滞被為済候半、御発艦之次第等ハ新聞ニ而折々承知、実ニ未曾有之御盛事と大評判ニ相成御同慶此事ニ奉存候、折角後音屈指仕候○欧州之景況別段之事も無之趣、乍去着涯方角も分兼洋九月初晋国(プロシヤ)緑林ニおひて魯帝澳帝会議之筈に候由、何も未色地不相分候得共、魯外務卿「ゴロチヤコフ」も随従ニ而参候様子、宇内ニ名誉なる「ビスマロク等之大先生会議之事候得ハ、何事ならんと諸人怪ミ居候模様也、ビスマロク之勢益盛んニ而諸方より問客贈進門前車馬之声不絶、同人江面会致たると云は面目ニ相成候程之事と被聞候、

○仏国之形勢未何共難申上候得共、大統領「チエー」なる者はさすがニ豪傑之由、一旦人心四分五裂潮之湧か如ク物議も有之たる由候得共、一々扣キ付、今日ニ相成候而ハ自ら壓伏被致よほと折合之趣、同人七十有余之老人ニ而勉励する事壮士も不及、議院ニ而手ひどく沸論有之候而も、自ら踏止雄弁を振ひ候得は是を犯す者ハ一人も是なしとそ、以テ其人物ヲ御承知可被下候、鮫島等論ニハ「チエーニ今三四年之余命アレハ必ラス仏国全からんと言ふ、兵勢等ニ手ヲ付候事は愈厳密ニ而追々変革ヲ加へ候由、十五年之后ハ是非孛を覆サント仏人は公然申居候由也、○吉井君江申上候、賢息ニも則御尋問有之、別而壮康語学モ能通ン、学問も勉励、久々振面会相咄候処、中々乙名(大人)敷驚キ候ほとニ有之、乍憚鳶之子之鷹(タカ)ニ成可申候、御安心可被成候、

右安着之一左右且御安否御尋旁如此御座候、別段宿江書状不遣候間、乍憚御伝言被下度奉願候、頓首、

七月十九日　　利通

西郷様

吉井様

諸　君

「日本
東京
西郷参議殿

英国倫敦（ロンドン）ヨリ
大久保利通」

## ※　三一九　大久保達熊・駿熊・七熊・か（ゆ）う宛書翰

一

一ふて申入候、其以後いよ〳〵以相揃無恙之筈めてたくそんし候、次に此方にも海上無滞、去ル五日米国「サンフランシスコ」トイヘルみなと江安ちやくいたし候、廿日あまり之船中にて候得共、一日もあれたる事無之、別而おたやかにて彦之進・伸熊も何もさわりなくきけんよく于今当所江たいざいいたし候、御安心なさるへく候、ちやくの日よりまいにち〳〵けつこふなる御ちそふニあい其上おもしろきけんぶつどもにて日をおくり候、しばいも一らんいたし候処、まことにおもしろきものにて、日本のしばいもかはる事無之候、来ル廿日比より当所発足じやふき（蒸汽車）車にて一七日はかり□□中にてみやこえ華頓府と申処江参ルはつ□候、こゝに三十日位たいざい、それよりイキリスどんとんといえる処ニ参ル筈に候、当所は至而あたゝかにてちやく之後一日もあめふらす、東京之九十月の気候（かふ）ニ而さいわひの事ニ候、しかし是より先キハさむく可有之候、

一神さまそまつ無之様可被致候、

一写真（しやしん）

さし遣置候、御国へ一枚ツゝ、便宜（たより）之節さし下シ可申候

右一左右まてあら〳〵如此ニ候、何方へもよろしく御つたへ可被成候、かしく、

十二日　　甲東（大久保利和）
彦之進

伸熊（牧野伸顕）

達熊殿

駿熊殿

七熊殿（ゆカ）

かうとの

猶々便宜（たより）之せつハ一左右可被申遣候、西郷さんなとへたつね候得ハ分り候、当分旅宿ハ「カラントホテル」ト申て、当所一番之宿やにて五階有之、六七百人之御客ニ而候、そのけつこふ（結構）なる事ハ詠（ことは）ニも筆にも尽されす候、

酒井事ハ腫物（しゆもの）ニ而よろしく無之かへし申候、ひへの煩ひとみえ、こちらでハよほときらひ候故、いたし方無之候、岩下さんかいるゆ（故）へ何も不自由之事ハ無之あんしられましく事、

一正五郎も出立いたし候筈とそんし候、

一馬車ノコト、かたなの事、

右石原殿田尻江たのミ置候付、立後はすぐに相かた付候はんとそんし候、其外之事も有之、正五郎立之節御国へ金百両下し候筈に田尻江咄置候処、いかゝに候ヤ、もし下し不申候ハ御国江之書状に下し候つもりにしたゝめ置候付、田尻江相談取かへにてもいたし下し候様可被致候、右之趣いさい申入置つもりに候処、立前ハ（そ脱カ）いかしく、ごちや〳〵ニ而相とゝひ不申候故、為念申入候、きん子不足ニ及ひ候ハヽ、田尻江たのミ何方へ相談借用いたし候而もよろしく候、

一石原殿すくに御出之筈何篇叮寧（へんていねい）可被致候、

一達熊始子共無事ニ成長（せいちょう）之筈折角ねん入れらるへく候、

一火用心取締（とりしまり）第一之事ニ候、喜さいわ次郎へ分而可被申入候、

〔表紙〕

大久保
174

○　三二〇　岩倉具視宛書翰　⑦—1200

敬読仕候、陳、御談之儀被為在、今午後一時、又ハ明朝午前八時御入来可被下候趣拝承仕候、然処今日一時比療医入来之約束ニ而、今日始而薬ヲ用ヒ候事ニ而少々手間取、且暫時ハ動キ候義難相調候故御引後調兼可申、明朝八時ニハ兼而大山県令面会延引致置度々相断、明朝と兼約有之候付甚不都合ニハ御座候得共、不得止候付御断申上候、明日午後ニ候得ハ差支無御座候、若又御差支被為在候得ハ、明後八日午前八時頃ニ而も差支無御座候、此旨拝復迄草々如此御座候、拝首、

七月六日　利通

右府公閣下

尚々度々御懇示ニ預難有奉存候、追々快方ニ相向候付、御案被下ましく奉願候也、

※　三二一　覚書

十七日神嘗祭所労ニ付不参之届取計有之度事、

友幸　大久保

○　三二二　岩倉具視宛書翰　⑨—1741

拝読仕候、扨御談之儀被為在、明朝十時比御入来可被下趣奉畏候、少々持病ニ而今日も不参恐縮仕候、御請迄早々拝首、

一月十日　利通

岩倉公閣下

※　三二三　岸良兼養宛書翰

益御安固奉賀候、陳ハ昨朝御内談承候中山以下口供各県

令江心得達之義、猶内密ニ而相談候処、大政大臣よりニ而も宜有之候得共、全体有栖川宮裁判江御関係之事有之、今般中山以下糺問之末云々事件も判然相分及結了、此一条ニ付而ハ西南暴動之根源ニ而不容易一大事ニ候処、未一般之人心了解致候場合ニ至らす候付、管下人民江相心得させ候様ニ可致云々之旨ヲ以心得達相成方御当然ニ可有之と之事ニ候間、河野氏江御伝可被下候、尤趣意ハ御勘考可有之と存候、此旨草々如此候也、

十二月廿六日　　利通

岸良兼養殿

「岸良兼養殿　　大久保利通

封　　」

## ○　三二四　岩倉具視宛書翰　⑨—1625

敬読仕候、陳ハ珍敷御品毎々御送与被下難有拝受仕候、

○別紙電報ハ如命明日皇居江持参可仕候、

○皇大后新宿江行啓之義は十四日と御内決之由、宮内卿より通知有之候付左様御承知可被下候、

○煙草　后宮江献上之事拝承仕候、未在合品も有之候付御覧ニ供し度箱拵等ニ取懸り候付、出来次第献上仕可申候、是又御得心可被下候、先拝答迄如此、余拝謁可奉謝候、拝白、

二月十日　　利通

岩倉殿

〔表紙〕

大久保利通公書翰

大久保
183

○　三二五　岩倉具視宛書翰　⑤—791

「岩倉右大臣殿　　大久保利通」

拝啓仕候、然は昨日内務省御用済警保寮へ出席、司法省より次渡相済一体様子承候処、格別之事も無之邏卒辞表差出候、人員凡百余名免職いたし、跡は則人数繰込ミ無差支手筈相調申候、警視初邏卒鹿児島人は凡八、九百人余之内百有余名免職にて、仮令此上波及いたし而も二百人内外ニ而止り可申見込之由、川路警保助申居候、同人確乎として担当諸事無手抜勉励仕居候付、此上之処格別御配慮被為在程之義は有之ましく奉存候間、先御安心可被下候、坂元・國分ハ病気にて引入居候由、誠ニ不堪抱腹次第に御座候○昨晩濱町邸へ参様子承候処、奈良原・海江田も十分尽力切諫仕候得共、久光頑乎として決心、自分ハ自分之考也と言ふ勢ニ而、終に家扶某ニ命し辞表差出候而、全ク出抜キニ逢候姿ニ御座候、跡更無致方候へ共したゝか不足申入置、扨愚考ニハ多分辞表御聞届有之ましく、必ス明日ニハ別段厚叡慮ヲ以被命候義ニ付、辞表之趣不被聞食と之御沙汰可相成欤も難図、其節は十分尽力之見込有之哉と申入候処、其節は猶邸中一同申合必死尽力可仕と之事ニ付、畢竟其方抔久光を引出シ候而今日に相成候而力ニ難及ナト、申候而は、朝廷江対し候而ハ勿論、天下ニ対し何之面目かある、是非人之手ヲ仮らす憤然尽力引留可申と且諭シ且励シ置申候、就而ハ自ら　思食可被為在筈なから、若御引留相成候御決着ニ候ハヽ、明日中ニハ手強き方断然御沙汰相成候様奉願候、幾回辞表差出候而も御採用無之

候得は、独行脱走は出来不申候付、此上ハあまやかさぬ様御圧伏可被下候○榎本一条昨夜中黒田江示談之含ニ而懸合候得共行違ひ候付、今日中内話可仕含に御座候、然処明日ハ御決答出来兼候欤も難図ニ付、

親臨奏聞之か条ハ外ニ御取調置可被下候、臺灣事件今日御聞取有之候ハ、其顚末言上相成候而も宜ク、諸省定額之事も大限も申居候付、右　御評議有之而も可然欤と奉存候、乍去榎本一条も是非今日中決着相付、明日御評議に而御決相成候様精々尽力は仕格護ニ候得共為念申上置候、

右条々為御心得一応申上置度如此御座候、太政大臣公江別段申上度候得共、今日御面会之趣ニ承知仕候付宜ク被仰伝被下度奉願候、頓首、

正月十一日　　利通

具視公閣下

〔表紙〕

大久保公書翰

大久保
184

## ※　三二六　岩倉具視宛書翰

昨夜帰宅之上御細書拝読仕候、御別紙三通拝覧返上仕候間御落手可被成下候、

一久光公件細々被示聞趣拝承候得共、昨朝も頼申上候通此上別ニ情実も無御座候、概し而申上候得ハ子共同様之体ニ而甚込入仕合ニ御座候、理屈上ニ而了解仕候位なれハ致安ク候得共、全自棄自暴之姿にて迚も歯牙ニ懸兼申候、乍去是非御留置之御旨趣ニ候得ハ、昨朝申上候通断然として御採用さえ無之候得ハ相済候事と奉存候、しかし顛末不合かく迄御手厚御接遇被為在候ニ、猶頑乎タル不平相唱へ

至尊に奉対、実に不当之所為と申事ニ相成候得ハ、断して御免相成候而も何も差支之儀有之ましく奉存候、両様は猶御熟考可被成下候、

右拝呈迄如此御座候、延引御免可被仰付候、草々頓首、

正月十二日　　利通

具視公閣下

猶々小臣事今朝無拠義有之遅刻仕候付左様御承知可被下候、是非抜本之事も結局相付ケ参朝之心得に御座候、此段乍序申上置候也、

「岩倉右大臣殿　　大久保利通
至急　　」

## ○　三二七　岩倉具視宛書翰　⑤—845

去ル十三日川元便より被成下候尊翰、本日相達謹読仕候、

乍恐
聖上益　御機嫌克被為渉御同慶奉存候、次に　閣下益御安康被成御奉職奉恐賀候、爾来其地も至而静謐之由無此上奉存候、当方近況調所便より申上候通、何も異条無御座、未江東捕縛にいたらす是のみ遺憾千万に御座候、四国・中国・大坂等江手配之義は先便申上候通にて、未何たる報知無御座日々屈指仕居候、猶又此節土州江岩村権令・三刀屋・安藤三人を差出候、中国路江増田議官・三浦・寺田等差出、猶又津々浦々残る処なく十分細察手を尽候様、県官江引合候ため厚申含候、四国・中国江ハ幾重にも是迄手を付置候得共、此節之機会を失候而ハ幾許之時日を費候も難図候故、十重・廿重手数を尽シ申度前条取計候事に御座候、多分不日に吉報可申上と愚考仕候、一賊之為に長滞在余計之手数を懸候事憤懣ニ堪不申候、心事御諒察可被下候、

一高嶋侍従調所追々着京、賊臣処刑等　宮江御引合之末云々之事委曲御承知、最早電報到来と御待申上候、右事件に付而は余り六か舗申立候様にて恐縮仕候得共、小子にハ如何にも条理難相立と之見込にて、如此大事件余論を受候様にては、一身上ハ扨置朝廷上之御体裁にも関係仕候義にて甚安んし兼候付、判然之御沙汰相伺候義に御座候、委曲は先便申上候通に御座候間不贅候、実は貫属隊給与之義も差伺候事に候得共、其まゝに而捨置候事に御座候、是以兵事に関スル事故致方無御座候、

一岩村権令土州行之事、別紙御用状に申上候通同人内願之趣も有之候、其訳は林用蔵（有造）は実兄に候処是迄議論合兼、公事におひて不得止と兄弟三人涕涙して相別れ候得共、今日之際に相成看ス、不義に陥らしめ候義如何にも骨肉之情におひても難忍候付、今一応は弟たる之道を以袖にすかり忠告いたし度、且又当県官之処一応困難之際御受申上候得共、此末之処不容難事に有之未熟之者にて中々目的も立兼、其上一体之行懸り人心居合も如何と存候付、公私両から難止心情御察被下、余人を御居へ被下度と之事に御座候、江東土州江潜伏候得ハ必林より外ニ抱へ候者無之、就而は岩村御遣被成

候得ハ無此上都合ニ付、河野権大判事等よりも頻に申立候趣も有之候付、小臣にも実地に就而篤と致勘弁候処至極尤之情実に被聞、同人内願通許容致候方可然と相決差出候次第に御座候、乍去権令ハ其まゝに而遣候間、当県跡之処大田黒江参事心得を以出仕相達置候、同人も即今之処なれハ御請仕候得共、此末之処目的相立不申候付、御人撰有之候迄は御沙汰に従ひ、乍不及従事可仕と之事に而、先ツ其まゝに而居へ置候、御用状に申上置候得共当県跡治方之処実に困難ニ御座候間十分振はまり候人に無之而ハ迚も相堪へ不申候付、何卒可然人柄御撰有御座度、乍然三浦議官能存知不申候得共、民政にハ随分可然人物之由承居候付心付申上候、余に其人あれハ無此上、何卒　條公初江御談合可被下候、なまじい之人物にてハ決而出来不申候、一旦之処は大田黒も御請且小臣引取候而も、大蔵省・内務省官員は是非在県為仕置度存候付、当座は宜ク御座候得共可成速に其人を居へ付不申候而ハ、此上人之替り候様にてハ大に不可然懸念仕候、出張官員之内も渡邊大蔵大丞も大村人故決而不宜、兄岩村も余りニ替かましく候故被居不申候、何分宜ク御評議奉願候、

右拝答且用向奉申上度如此御座候、拝白、

三月廿四日　　大久保利通

岩倉右大臣殿

## ○　三二八　岩倉具視宛別啓書翰　⑤—846

別啓

川元江詳細御伝言之趣拝承仕候、小臣進退之事も折角差急候得共、江東入手仕候迄に平定之功を奉奏候義難相調、甚以心痛罷在候義ニ御座候、是さへ捕縛仕候得ハ、余は夫々官員残シ置候得ハ相済可申と奉存候得共、何分致方無御座候、委細は調所へも申含メ差立申候間、御聞取被下候筈と奉存候、

一東郷も着候由、陸軍省より電報にて安心仕候、谷干城も疾に着候筈、最早臺灣行も御運相成候事と遙察仕候、

朝鮮行之事ハ如何に御座候ヤ御案申上候、早便より右等之御運為御知被下候様奉願候也、

三月廿四日　利通

岩具視公閣下

別啓

「　前之分

岩倉右大臣殿　御親展　大久保内務卿

」

## ○　三二九　岩倉具視宛書翰　④—600

尊書敬読仕候、然は昨日来段々條公御談之趣承知仕、彼是御治定も相付候半と奉大慶候、井田参謀帰府之由、就而明朝　御臨駕被成下候趣奉畏候、此段御請如此御座候、恐惶、

四月十七日

〆

岩亜相公　利通

「岩倉右大臣殿　拝復　大久保利通

封

」

## ○　三三〇　岩倉具視宛書翰　④—447

謹啓仕候、益御機嫌克奉大慶候、然は西京之事情兼而小臣杞憂する処有之、長官公進退之事もむさと暴論申上候訳ニ候得共、衆評ヲ推シ喋々論シ候而モ、却テ事ヲ好ムニ似タル訳ニテ安心ハ不仕候得共、先不得止口ヲ閉候次第ニ御座候、抑当春出張弾台失策ノ事ありて、凡テ前幣ヲ一洗スルヲ目的として、府ハ府、台ハ台、長官ハ長官一同ニ偏見シテ彼ノミヲ取、是ヲ取ラサルノ大弊、亦今日ニ出来シテ実ニ人心恟々薄氷ヲ踏ノ姿ヲ成候形勢と被相察候、小臣等ヨリ如此発論イタシ候テハ自ラ私意ニ出ルノ嫌疑も有之、黙々暗歎仕居候仕合ニ御座候、長官公賀茂祭之節傍人大音ニ罵り候者有之、照幡ハ糞ヲ垂レ候ナト種々之事有之、且又府ニ於テハ厳重苛酷ノ取締イタシ、甚シキハ婦人迄モ（薫女トカイヘル歌道好ノ女）呼出シ糺問禁錮イタシ

候トヤラニテ、一方ヨリハ世中ノ事ハヤ是迄ト慨歎泣泣イタシ候由、世人見ル所只長ノ暴動ヨリシテ毛ヲ吹候ヨリ如此ニ至レリト、只今之儘ニ捨置候テハ小臣其結局如何ヲ知ラス、斯ク申セハ則草莽説ニ動揺スルトカ何トカ論スルモノ有ルヘク候得共、左ニ無之、政府ノ為政決テ一方ノミニ倚ル可カラサルモノニテ、其釣合ヲ能クシテ是ニ由ラシメテ徐々ト導キ候事目的トイタシ可申、善悪共過不及アレハ必其宜ヲ失ヒ弊害ヲ来シ候事顕然タル事ト奉存候、況乎淡州ノ動揺モ有之、可謹ノ事ニ可有之、摂ノ処も造幣局ニハ井上アリテ人心食肉ノ思ヲナシ軍局モ兼テ御気遣被為在候一弊モ有之、京摂間之人心明鏡ニ掛タル如ニ御座候、実ニ長ノ処気之毒ノ至ナリ、別冊尚其事実ヲ察スルニ足リ候間、極内々

閣下限リニ備御覧候、前条余リ切迫ニ申上候様ニテ過慮カハ不存候得共、何卒厚ク御勘考被成下度伏テ奉希望候、兎角政府上ニ居リ候ト平穏ニシテ事ニ逆ハス、無事ヲ唱ヘ候方如何ニモ工合ヨロシク、天下何事モナイヨウナ心持ニ候得共、古今是カ弊ト成テ災ヲ生シ候覆轍ニ御座候、兵部省参向ノ事モ殆ント二十日余も御ナラシ相成候、乍毎談シタル事モイツノ間ニカ、一場ノ春夢ノ如ク茫然ト相成申候、海軍ノ議論唐太ノ事等モ有之、ハヤ〳〵決シ不申テハ、誠ニ相スマサル事ニ御座候、

閣下御憤励既ニ二件モ御引受御尽力ノ処ニ無理ニ申上候コトニハ候得共、此末中々小臣等之及所ニアラス前途蒙々日夜苦慮仕候、

右御乗輿中ニモ御一覧被成下度、拝謁迄之間草々ニ奉申上候、謹言、

五月廿二日　　利通

亜相公

「岩倉亜相公　　大久保利通
至急」

## ○　三三一　三条実美・岩倉具視宛書翰

⑧—1543

八月廿三日午十二時四十分　熊本権令

三タイ(三田井)ノ賊粮食ヲイワト(岩戸)ニヒ運ヲシカタ(男鹿潟カ)ニ台場ヲ築キ、
割拠ノ様子ナリト報知アリ、昨日ヨリ鎮台兵及ヒ別働隊
一旅団馬見原ニ向進軍せり、

同警視出張所

三タイ(三田井)ヘ進入之賊糧食ヲイハトニ運ヒヲシカタニ台場ヲ
築キ割拠ス、馬見原ヨリ二里先ミヤタ(浜町)ニモ来ルト只今ハ
マ、チョリ報知アリ、当地ノ警備尤モ尤(術カ)厳重ニセリ、

唯今到来候付、奉供高覧候也、

八月廿三日　利通

三條殿

岩倉殿

「三條大政大臣殿　大久保利通

岩倉右大臣殿

上置

封　一

〔表紙〕

大久保
186

拾参

## ※　三三二　意見書

一還幸御決定ニ付而は東京皇居警衛之兵隊十分被備置、御威力依然トシテ相輝候様有御座度候事、

　但供奉兵隊可成被残置、皇居警護ニ被備置候様有之、

　供奉兵隊之儀志州鳥羽江

　御揚陸之御都合候得は、最寄藤堂藩等江速ニ御沙汰被成置、供奉被仰付候方御軽便ト奉存候、自ラ軍務官見込も可有之候付早々御尋問被為在度、

一備前侯刑法官副知事ニ而被残置候方、警衛之為且刑法官ハ当時急務之訳ニモ有之候付、全御委任被成置候辺ヲ以篤と御申含有之候様有御座度奉存候、

一供奉之人員且兵隊等之数取調之上早目御船賦り出来不申候而は、来月上旬と御差急相成候而モ中々六ケ舗、凡御見込モ可被為在とハ奉存候得共、春日丸モ未着船モ不仕、且荷方船人馬船等相応ニ相及可申候得ハ、依時宜外国船御雇入、且諸藩ヨリ滞船之向は早々御用之御沙汰相掛候様御運相付度事、

一弁事之内駅遞司之内志州鳥羽江早々先行被仰付、御本陣或ハ道路普請等御手当被為在候儀急務と奉存候、

　但一昨日條公江モ申上置候事、

一弁事以下供奉人体之事略取調差上置候付、尚御評議之上今日中ニ被　仰付候様無御座候而は万事之運不宜候尤人々如何と疑惑イタシ居候付、被残置候者ハ各安堵仕候様

輔相卿ヨリ御内諭被仰付候様有御座度、必ス

御輦江親随センコトヲ欲スルハ人情之常ニ御座候間、彼ヨリ言フヲ不待速ニ御申含相成候義肝要奉存候、

一田中五位此内老母就病気御暇奉願候処、十四五日位之処奉待候様御沙汰付畏入候得共、未何タル被仰渡モ無之候付御催促奉申上モ恐入候得共、何卒願意御採用被成下度と之趣先日承申候、右は供奉被仰付候付夫迄可相勤旨　御内論被為在候ハヽ、老母病症モ寛病之向ニ被聞申候間、御請奉申上候半と奉存候、

一再応言上仕候通両輔相公御去留之事御大事と奉存候、依而昨朝モ略奉伺候通阿州侯江被托置、両公共御供奉ニテ断然御帰京之方上策と奉存候、既ニ容堂公ヨリ條公御残之哉ニ御聞込ニ而、是非御前御残相成候様無之而ハ不可然と思召候、如何と心得候哉と先日御論承り、何分御所労之処御難渋と察上候と、一通りニテ申上候次第ニ御座候、其外東京府ナト御前御残りヲ欲シ、種々説モ有之向ニ御座候、約り一同ヨリ申立候時宜モ難図候得共、是非

御前ニハ御帰京ニ御確断被為在度奉万祷候、決而下ヨリ何れ江御残り被為在可然ト申事ハ、論ハ出来不申事ニ御座候、此条厚ク鑑セスンハアルヘカラザル御大事と苦慮仕候間、不奉顧恐言上仕候、

一八州知県事人物進退規則相立候様有御座度候間、三岡・副島江取調被仰付候而ハ如何可有御座哉、近来益悪説相聞不可捨置事件と奉存候、

一会計官属吏凡千人余有之甚紛雑ヲ極メ基則不相立、勘定奉行ヨリ之形行ヲ以其儘被行来候間、是非変革無之候而は不相済、三岡ニモ驚愕之様子ニテ尽力之含と相見得申候得共、尚亦

御沙汰被為在候方可然と奉存候、尤当分ニテ島團右衛門一人之様成者ニテ中々手之行届候丈ニ無之、勿論先入為主之弊モ有之、十分ノ変革ヲヤルノ見込有之間敷被察候付、三岡江被仰付候ハヽ、島并江東江モ御達シ被為在度奉願候、

一池邊并吹田・西村奥羽江会計取調トシテ被差出候様先日申上置候、右は三岡見込ニテ大ニ可然ト相考申候、既ニ議参ニテモ可被差出と之

思食モ有之事候間、差向之処ハ会計ニテ宜舗候半と奉存候、

右は全
御前限ニ為御心得申上候付、忌諱ニ触候条件等宜
舗
御容量奉願候事、

## ※　三三三　岩倉具視宛書翰

御書奉拝読候、今日参昇之儀見合候様奉畏候、拝復而已
早々頓首、

九月十三日

「〆
岩倉公
御請　　利通
」

## ※　三三四　岩倉具視宛書翰

御書之趣奉畏候、九字ニハ必可奉待候、此段御請仕候、
拝首、

六月十三日　　利通

具視公閣下

## ○　三三五　岩倉具視宛書翰　㋐—1213

兼而承知仕候大仏方広寺金子請取之義取調候処、別紙之
通相運居、当分於大蔵省営繕内分取調中ニ付、右相済当
省へ相廻候得は、直ニ当人江相渡候都合ニ候、大蔵省ニ
おひて精々取調居候趣ニ付、近々にハ相運可申候、此段
形行申上置候也、

八月廿八日　　利通

岩倉公閣下

〔表紙〕

甲東大久保公書翰

大久保

212

※　三三六　河瀬秀治宛書翰

貴墨拝閲、扨今日外務省へ御出頭之末彼是御心配之趣縷々被示聞致承知候、於芝離宮外務卿江委曲談置、何も宜候間御安心可被成候、此旨御回答迄、草々不具、

三月廿四日　　利通

川瀬大丞殿

※　三三七　河瀬秀治宛書翰

愈御安康奉拝賀候、扨昨日品川着面会ヲ得候付、篤と内諭ニ及候処、無異儀御請仕大ニ安心いたし候、仍而於曲折ハ貴台より承知致呉候様申入置候付、此内御談申上候通同人拝命之寛急等御打合可被下候、尤外務省へ関係も不少候付、外務卿存慮も可有之候間、諸事少輔御談合可然御頼申上候、今朝発足いたし候付右形行申上残度草々如此別紙品川の所書も為御見合差上候也、

五月廿三日　　利通

川瀬秀治殿

※　三三八　河瀬秀治宛書翰

別紙昨日黒田長官方より家禽教師之義申来、当分如何相成候ヤ、しかと所そん無之候付、未返詞も不申遣候間何分宜ク御取計可被下候、一応戻入置候外国人は放免いたし候旨、岩山より承居候様相心得候、何れ之筋速に御調為御知可被下候、今日就所労不能参省候付此段早々拝首、

七月十四日　　利通

秀治様

## ※　三三九　河瀬秀治宛書翰

御紙面之趣致承知候、家禽教師云々之義、此程牧夫手伝人医術相心得候半、就而ハ其趣ヲ以黒田江御通知被下度、当分開拓使江ハ一人も無之、流行病も有之由候得ハ、よほと差支候半と存候間、可成速ニ御遣見可被下候、此旨御答早々拝首、

七月十四日　　利通

川瀬様

## ※　三四〇　河瀬秀治宛書翰

明日御退出より御入来被下度松方江談置候付御聞取被下候半、過日来承候米国出居云々之事速ニ相決度、大蔵卿江も松方ヲ以遂示談候処、同人見込も有之候、就而は甚御面働之至候得共、明朝御出省懸鳥渡御立寄被下度、午後出会迄之間少々御談申上度義有之候付、此旨御願申上候、草々拝具、

八月廿五日　　利通

川瀬雅丈

己机下

## ※　三四一　河瀬秀治宛書翰

今日御咄申上置候山口県士族津川良蔵書面御廻申上候、外ニ冨田神鞭見込書二通、池田見込書一通序ニ致返上候、御落手可被下候、此旨早々拝具、

八月廿一日　　利通

川瀬賢台下

尚々近日米利堅江便宜有之候付、西郷副惣裁宅より品物差送度趣承候、右ハ明日ニ而も事務局江差出宜候也、鳥渡御示可被下候、

## ※　三四二　河瀬秀治宛書翰

拝読、扨内国博覧会ニ付各県より出張候人数不日就帰県、来ル四日正午迄ニ御面会被成度趣承知仕候、同日横須賀江ハ出張不仕、例刻より本省江出頭可仕候付、左様御承知可被下候、此旨御回答迄草々拝具、

九月二日　　利通

川瀬君

## ※ 三四三　河瀬秀治宛書翰

別紙西郷副惣裁より公伝唯今収手一覧候処、来年内国博覧会開場ニ付、英・白両国より出品致度候付、家屋貸与呉候様云々、同国在賈は事務官より頼談有之、就而副惣裁見込之趣も申来居候、固より我職に等之誘導進歩之ためニハ、有益ハ申迄も有之間舗候得共、畢竟今般内国博覧会開設之挙ハ、先全国之物産を蕃殖スルヲ以目的トシ、随而其施行順序も惣して右之範囲内ニ相運居候事ニ有之候、若外国人之出品を許允候事ニ相成候得ハ、第一初発より之目的を変し種々之故障を引起シ可申、且来書中ニも有之通甲国ニ許シ候得ハ、必乙国より請求候ニハ相違無之、是は事務官等無不都合遂談判又金額も定員有之候得ハ、断然謝絶と而も可然と相見え候得共、公然と在留公使江懸合有之候節は、実際中々其通ニ運兼候ハ顕然ニ有之候、且又雑居之制限相立居候内ハ、外国人之事ハ別而注意不致候而ハ困難百出可仕候、何分軽易ニ可許可訳ニ無之と愚考仕候付猶御勘考有之度、近々福井も解纜と存候付、別紙早々御廻申上候、此旨草々申遣候也、

九月九日　　利通

川瀬大丞殿

猶々本文当座卒然之勘考ニ有之不取敢申遣候間、他之御賢考も有之候ハヽ宜御評判有之度候、曾而英公使江面会候節来年内国博覧会御開之由承候、右ハ外国人出品相願候得ハ御差許有之候やと相尋候付、此度ハ先内国限り之目的ニ付、外人江ハ不差許筈、此度初而之事故都合克相済候上、追々ハ万国博覧会も可相開順序ニ有之旨相答候処、御尤と申居候、

〔表紙〕

大久保
216

○　三四四　五代友厚宛書翰　⑥—1021

「松陰賢台
上置　　利通」

拝読、今日は会日ニ而御待被成云々被示聞委曲承知仕候、角盤ニ而少々進ミ兼候得共、過日御手厚御馳走ニ預リ候付不参候も失敬と存候付、右之御礼として出頭之含ニ付左様御承知可被下候、此旨貴答早々拝首、

七月卅一日　　利通

猶々大隈・寺島は承知仕候也、

○　三四五　五代友厚宛書翰　⑥—1072

今日ハ退出より一応不致候而不叶用向有之候付、午後正二時より此方へ御進撃被下度候、最早御発足近寄候付若クハ寛大之処置ニ及候モ難図候、此旨草々拝具、

十二月四日　　利通

（五代友厚）
松陰高台

○　三四六　五代友厚宛書翰　⑥—1076

只今より吉田方へ出懸申候付、即刻御出車被成ましくや、御立前御繁用ニ候半と察上候得共、俗務は有司へ御命シニテ御済被成候事と存候、此旨早々頓首、

十二月十二日　　利通

松陰高台下

尚々磐石御持参可被下候、此品乍軽微備御笑覧候、御叱留被下候ハヽ幸甚、

○　三四七　五代友厚宛書翰　⑥—956

爾来御安祥奉賀候、然は此品麁末に候得共此度首尾克帰朝仕候故御土産之印迄に備、御笑覧候間、御叱留被下候得ハ多幸ニ奉存候、此旨早々拝首、

十二月十三日　　利通

友厚高台下

尚々今日ハ閑暇を得候付、午後三四字之比より参堂可仕候付、久々振碁馳走頂戴仕度候、

「松陰君上置　利通」

○　三四八　五代友厚宛書翰　⑥—1064

愈御堅固奉賀候、陳今日新嘗祭ニ而午後六時より参内之筈、其内岩倉殿入来之旨申来、迚も緩々之御闘事も不相調候付、何れ明日・明後日ハ可及連戦と存候、明日は時宜次第御宅江参上ニ而も宜舗候、段々切迫相成候間諸先生御招請御研究専要ニ候、此旨草々如此候也、

十一月廿三日　　利通

松陰堂主人

〔表紙〕

大久保

217

○　三四九　五代友厚宛書翰　⑤—883

猶御安全奉拝賀候、扨大隈ニも愈今日より参仕ニ而安心いたし候、就而は過日も御内話申上候今後大蔵省之事、一掃無之候而は不相済、且事務局船云々之一条等是非取止無之而ハ甚不都合ニ有之、其辺ハ猶御厚意上ニ而御忠告可被成と之事候処、既に明日御出発ニ付而は間合も無之如何と被存候、可相成は此事は御出立前十分御弁論、当人了得有之候様御尽力之程致希望候、過日も申上候通小生よりニ而も申入候而ハ大ニ角立申候間、矢張高台之好意上より御談候方穏当欤と被存候、右辺之義に付、種々物議も有之候事ハ御承知通之事にて、大ニ当人之失徳を来し候所以ニ候間折角　御(衍カ)此節之義御配慮有之末ニ候間、此機会ヲ失はす取占メ置候得ハ、当人之為大ニ宜クと愚考仕候付、何卒御勘考御初思貫徹候様御頼申上候、鳥渡参堂　御示談可申上候処、今日無拠前約有之其儀不相叶候間、乍略義以寸楮早々如此御座候、拝首、

六月二日　　利通

松陰高台下

○　三五〇　五代友厚宛書翰　⑥—1034

尚兎も角東京迄出懸られ候得ハ、猶更仕合ニ御座候間、其辺も御進め可被下候、

拝啓航海御都合克御安着、益御多祥被成御座奉拝賀候、次ニ劣生寂然致送光候、御憐察所仰候、扨御出立前御談申上置候含に候処、合戦に隙なくして其義不相調候、兎申ハ桂家之事ニ而候、当分ハ下坂之由粗承居候、必御出会可有之存候付、貴兄御考ヲ以同氏見込御探試被下まし

くヤ、何方へか最早奉務有之而可然事ニ存候、乍去従前之行懸ニ而憚も有之候半かなれとも、当今ニ相成候而ハ鹿児島之束縛ハ脱セられ候而も宜キ時分ニ而は無之哉、同氏は事務にも練熟何れに而も御用立之事ハ不及申衆人之所評候間、若独立他ヲ不顧之決着出来候得ハ如何様とも尽力いたし度存候、御一新前より難所のミ請持ニ而其功亦不容易候間、於
朝廷も度外ニ被差置候訳ニ有之ましく、此義御依頼申上候間以御都合程克御理解、何分之義御一封被下度奉頼候尤劣生より斯申上候事ハ御移ッ無之方宜ク候付、全ク御賢考ヲ以御取計被下度、右御頼迄、早々如斯御座候、拝具、

九月十四日　　利通

松陰高台下

## ○　三五一　五代友厚宛書翰　⑤—843

三月十日御発之貴墨今朝相達拝読仕候、弥以御安祥奉敬賀候、小子無異佐賀江滞留仕候、速に平定之段は御同慶之至ニ候、乍去肝要なる賊魁遁逃、是にハ戦争より返而面倒ニ而諸方探索等大に手数相成候、大かた鹿児島県へ遁逃島以下拾六名は捕縛之上捕縛護送相成、一先安心仕候得共江東未捕縛不致遺憾千万に候、しかし鹿児島江参候事は無相違、飫肥江入込候踪跡有之と之趣ニ付、不日吉報可有之と疑を容れす、未曾有之大罪人豈天網を免れ可申哉、今明日と屈指相待居候、白川県其外佐賀討罰迄之処人心動乱、よほと危かりし由候得共、
官軍勝利之一報より忽一定相成最早懸念無御座候、今少シおくれ候得ハ大事ニ及候機に候処旁上都合ニ候、
一安藤江御叮嚀御伝言御投翰拝承、種々御高配被下奉万謝候、
一木圭子別封一覧懸而情実分兼心配之趣尤ニ候、乍去一廓中之識見ニ而甚可惜事ニ候、
一小子引取之期限未何とも難申、何分此節降伏之始末無比例醜体にて、大将逃ケ出シ候故、已下尽ク散在、捕縛等之手数誠ニ余計之手間取ニ御座候、取纏ニ付実に六かしく候、佐賀之習風とハ乍申、一箇之男子たる者無

之、只々今日ニなり候而ハ一命をおしみ候のミ之事ニ候、江東等か煽動を受たる一同の処ハ初而欺罔せられたるを知、江東か肉を喰はんことを欲る勢ひニ有之、何も御察可被下候、大目どの処ハ当月を限り、来月初方にハ引取之都合に可至欤と存候、若シ其時分まて御東上無之候ハヽ、御面会可仕、しかし御急キ之御用事も有之候ハヽ、決而小子之ため御待ハ御無用可被下候、兎も角東京にて御面会可仕、尤表謹ものも御同行と存候、

右御答迄草々如此、何も不遠期面謁候、拝首、

三月十九日夜認　　甲東拝

松陰高台下

尚々戦争ハ最盤上ニエミに候間、抗抵力はかならす御止可被成候、恭順して御迎へあらハ寛典ヲ以御会釈可申上候、○指輪云々之事意味了解難仕候

本文尤ノ下二字御照見アルヘシ、

## ○　三五二　五代友厚宛書翰　③—303

御国江

勅使被差立候ニ付、外国船御雇入之儀御懸合申上候間相達候筈と奉存候、然は今日　柳原右中弁様江表通被　仰付候、御立日限之儀は何分船之都合不相分候而ハ御治定難相成候付、尚亦早々取調模様御届相成候様可致御懸合承知仕候、自ら今晩明日ニ懸而ハ御返詞可相達と奉存候へ共、別而

御差急之事候間、御周旋可被下候、是非十日内ニハ御開帆之御都合相成候様御頼申上候、尤御雇ハ朝廷より御構ニ付左様御含可被下候、七八日方ニ出帆之都合ニ御取計出来候得ハ仕合ニ御座候、此旨早々申上候也、

正月卅日　　大久保一蔵

五代才助様

追而御留主居方へも御邸より懸合罷成候付、彼是御示談可被下候、

## ○　三五三　五代友厚宛書翰　③—306

外国人御雇入之事、過刻御申上越候処其后尚又相伺候処、

弥

朝廷より御雇入之筋ニ御治定ニ而、則其府へ茂今日御問合相成候間、さ様御承知可被下候、左候而

勅使は八日

御発途、則御下坂、九月一日御滞在、十日御乗船御出帆と御決定ニ御座候間、其心得を以不都合無之様御尽力可被下候、乍去

御滞坂之日合ハ船之都合も可有之段

勅使江ハ申上置候、船之処ハ往来ニハ迚もなり申ましく候得共、両三日ハ滞船いたし候様相成候欤も難図候付、其段ハ先不決ニ而相済候ハヽ仕合御座候、しかし不調候ヽハいたし方無之候、此段早々申上候也、

二月二日　　大久保一藏

五代才助様

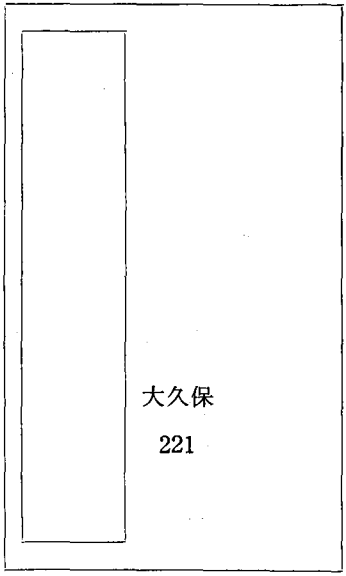
## ○　三五四　五代友厚宛書翰　③—308

昨日之御問合夜前相達拝見、然は外国船御雇入之一条、尚又御治定之条約書御差出相成大に安心仕候、乍此上船都合向旁可然御取計可被下候、尤木藤角太夫前以下坂彼是御都合いたし候筋に御座候、運賃一条ニ付昨日御懸合申上候付相達候事と奉存候、何分高料之訳合ハ御申越可被下候、最早右通御条約相成候上違約は出来申ましく候付、兎角右船へ御乗船ならてハ、若遅々いたし候様にてハ決而相済不申候、勿論不相当之運賃御約定被成ましくトハ相考候へ共、支配下之者不案内にて取計候も難図事候付申上候、相当之訳ニ候得ハ何も異議無之事と相考候、此段為念申上候也、

二月四日　　一藏

才助様

〔表紙〕




右三通（嘉永四年）亥六月十一日深見源次郎宅江差出候、

差出

巳札御改元

家内人数壱人

現人数壱人

但御改已後出入無之候、

右書同断

有馬小次郎

中宿名代

亥六月十一日

二番

触役所

右崎山一郎兵衛江差出候、

差出

大久保武右衛門

※　三五五　覚書

差出

巳札御改之

家内人数弐人

現人数弐人

但御改已後出入無之候、

右書同断

大久保善兵衛

中宿名代

大久保善兵衛
大久保太郎次

（嘉永三年）戌八月より亥七月迄何御奉公相勤候哉、可申出旨被仰渡趣承知仕候、右三人事、市來之内江中宿被仰付置、右月数何御奉公も相勤不申候、持高居屋敷所持不仕候、此段以名代申出候、已上、

中宿名代
大久保正助

亥八月
四番
触役所

差出

戌八月より亥七月迄何御奉公相勤候哉、可申出旨被仰渡趣承知仕候、有馬小次郎事、極貧者ニ而市來之内江中宿被仰付置、右月数何御奉公も（後欠）

今日も御堅栄被成御座奉賀候、昨朝ハ参上仕御邪魔罷成申候、扨今晩御自由奉恐入候へ共、御寸暇被為在候ハヽ、私宅江御訪来被成下候儀相叶申間鋪哉、当分御多用ニ而一寸も御隙無之筈と奉存候へ共、一刻ニ而も御入来被下度、金六（皆吉）公も御入来可被下と申事御座候間、平ニ〳〵奉希候、昨朝あらまし御噺之儀猶又得と承知仕度御座候、

武運長久　海上安全（ママ）ヨ
病難消除　御祈祷
弐朱一片ト親次右ェ門当年五拾歳依願喜界島居住被仰付、
銭六拾文　当分渡海

大久保正助

〔表紙〕

大久保
180

○　三五六　高崎五六宛書翰　①—49

明石淡路島辺懸念ニ付一応室湊へ
御着舟被為在候方可然段、帶刀殿より今朝小倉より之一
翰到来いたし候、右は此方にて疾吟味もいたし両三人差
出、室へ相待居、
御着舟之上明石辺之処差支無之と之事候ハヽ、
御通船可被為在、万々奉懸念訳も有之候ハヽ、依時宜室
より
御陸行と御内定相成候間、其段ハ帶刀殿へ御申上置可被
下候、先刻申上後ニ付為念此段奉得御意候、何も不遠拝
上可申上候、已上、

九月十一日

追而別紙御願申上候、

「高崎猪太郎（五六）様　　大久保一藏
別紙入　」

○　三五七　辻維岳宛書翰　②—130

爾来不奉得拝顔候得共、先以御安祥被為渡大慶奉存候、
然は明日御会集之一条従廣沢承、別而大幸此事ニ奉存候、
就而場所之儀此方より取究申上候様と之趣承知仕、折角
閑静之方取調候得共、差当宜舗処無御座、些遠方ニ而甚
恐入候得共、上立売江兼而弊藩下宿申付置候閑亭御座候
間、其方江御一同御光駕被成下候様奉願度、左候而刻限
之義ハ早目之方仕合御座候間、五ツ時より御出懸被下候
様致度、昼後ハ無拠用向有之候付其段分而奉願置候、此
旨所用迄不取敢以紙面奉得尊慮候、尚余拝接ニ申残候、

謹言、

十月七日夜　　大久保一藏

追而場所之儀は従此方御案内之人差上候付、左様御得心被下度奉願候、

辻将曹様
侍史

○　三五八　税所篤宛書翰　　㋐—1345

「堺県令
税所篤殿　　東京
大久保利通

至急親展

封　九年之冬　　」

拝啓愈御安康被成御勉務奉敬賀候、次ニ小子依然相勤候間、御降慮可被下候、過日は御投書辱拝読、御沙汰之通意外之事に成行心事御推計可被下候、此に至何も不及弁条理に倒れ候より外なし、頃日又鹿兒島分営瓦解之報あり、是畢竟煽動之為に此時宜ニ立至り候趣、誠に遺憾之至ニ御座候、かならす九州表は一般波及之姿ニ可立至、如何成行可申候ヤ此末之処何共難図候、初発より平々凡々ニ而は可相済行懸ニ無之、必如此之事故之可有之決定之訳故、今更可驚にあらす候得共

聖慮所在は全国人民之安穏を保より外に主とする処無之就而は是非至当之条理を以鎮撫する処に着手すへし、国家之安危を天に任セ心力之及限りと独決仕候、嗚呼如此之盛時にして如此之事変を生スル天宗社に祚セさる乎、是非如何ヲしらす委曲之事情は中々筆紙に難申尽、此度松陰子（五代友厚）帰坂相成候付、何も御直聞被下度、余は省略仕候、一次郎子は追々相見得別而勉強よほと成進之由、決而御懸念ニ及不申候、

一得能・吉井両子も至而無事、乍去吉井は例之風邪にて引入候得共、最早よろしく、兎角に当夏已来弱り候体なり、得能は本快に候、

一当府下も追々出火有之何か穏ならぬ形情に候、暫時之間は人心居合兼可申候、

右任幸便御答書旁如此御座候、頓首、

十二月廿三日　　利通

税所尊老台下

尚々御令閨江よろしく、おみッのかたへも同断御頼申上候、

## ○　三五九　岩倉具視宛書翰

③—1574

「岩倉右大臣殿　親斥　　大久保利通

封　　」

猶佐官以下之処も同様休暇給り候間、長官之見込ヲ以適宜取計候様御達ニ而可然欤、

益御安祥被為成御座奉大慶候、陳今日西南凱旋之総督宮已下将校休暇之義粗御決定相成、猶又及熟考候処実ニ今般之戦事ハ未曾有之刻苦、八ヶ月之間櫛風沐雨死中ニ生ヲ得テ一同帰京候事候得ハ、先例ニ拘らす特別之恩典被為在候而も不可無之と被存候、就而は着涯之処ハ宮ハ十日間、将校ハ一月間位休暇（是ハ御究りなしニ而是迄自分ニ休息致居候半）相済候得ハ、各軍務之都合も可有之候付、一応主務之省院江出務致、今後院省之都合ヲ以宮已下将校ニ至ルまても、上下ニ不関三周間之休暇給り候旨御達有之候而ハいかゝ、尤非常之艱難を経、別而身体を労候上、即今伝染病等も有之、厚

思食ヲ以特別ニ右通被仰付候趣御沙汰有之候ハヽ、一同感戴可致候、左候得ハ何れも随意ニ休息可致候付、既ニ一応御決之上ニハ候得共為御参考申上候付、猶御勘考可被成下候、軍功賞典之義ハ専ら勲賞局ニ而取調、分而御沙汰ニも相成居候筈と存候得共、此節ハ何卒機会ヲ不失速ニ御施行被為在候様祈望仕候、固より上人以上ハ一言彼是申候者無之候得共、人心ヲ収攬スルハ唯此賞罰之二字ニ有之候、政事之骨髄他ニあらす候付飽迄御決意も有之筈とハ存候得共、序ニ贅言仕候、纔ニ一省内之事ニ而も甚心配仕、物議を待す上申も仕たる事ニ御座候、

右申上度草々如此御座候、余帰京之上御直ニ可申上候、恐惶、

一月十九日　　利通

右府公閣下

## ○　三六〇　岩倉具視宛書翰（書添）　⑧—1574

書添

西南凱旋之宮始将校江
御陪食被仰付候旨兼而御噂も有之候付、是以速ニ御日限
御取究、唯今より御達相居候様仕度、追々温泉等出懸候
も難図候付、可相成ハ明日明後日ニも、宮内卿より御案
内状御仕出相成候様祈望仕候、参議も一同相揃候上可然
と之御事ニ候得ハ、廿五日比ニ御都合宜ク候ハヽ、被食
候而ハいかゝ可有之哉、山縣参軍・高嶋御前ニおひて戦
地実況被聞食候義ハ、分而速なるを好とし候間、是も両日
中ニ被為在度候、（既ニ被為済候半とも存候）且又佐官之処も野津大佐之
如キハ、御承知之通抜群憤励功労も不少候付、願くハ別
段之訳ヲ以御親聴被為在候様祈望仕候、

右存付候儘申上候也、

一月十九日　　利通

岩公閣下

〔表紙〕

大久保
181

## ○　三六一　藤井助市宛書翰　①—126

翔鳳丸今朝相達、御状只今相とゝき難有拝見、先以弥御安康被成御精勤珍重之至奉存候、次ニ去ル十五日中将様就御下坂御供仕下坂、今日又々帰京仕筈ニ而別而元気御座候間、乍略義御降慮可被下候、此節便より宿元より段々調文品相とゝきおくり書通相違無御座、就而は色々乍毎御心配被下候半、深々御礼申上候、尤宿元一条ハ内外御心添被下、当分御繁務中甚御気之毒千万奉存候得共、何分ニも宜鋪やう御頼申上候、直二郎殿別而元気ニ而毎々京都ニ而は御出舞(張カ)給り、初終将棋さしニ而面白事ニ御座候、段々流行病も有之候得とも、少モ痛モ無之候付、御懸念被成ましく候、金子も慥ニ相とゝき御申越之通、御預置時々御渡申上候様いたし置候、必々御案被成ニ及不申候、調文品は未相とゝき不申候へ共、今晩共ハ上り可申、此節丈ニ而もはやよろしく御座候間、あとよりハのほせ不申様御下知可被下候、彦熊衣裳用反物申越候付、染方ニ而もいたし下シ度山々相考候へ共、船便旁間後れも難図候付、両日中翔鳳丸又々出帆之筈に付、右便より太織紬之間下シ可申候付御受取可被下候、田中吉二郎当所へ残居候付、翔鳳丸へたのミ候様申付置候間、左様御申聞可被下候、只今出立之処ニ客来も段々有之御答書御返詞迄、早々如此御座候、以上、

一月十九日　　大久保一藏

藤井助市様

追而何方へもよろしく御伝可被下候、何欤御礼かた〳〵差下し度候へ共、実ニ大混雑ニ而行届不申候付後音(ママ)より差下可申候間、左様御納得可被下候、乱筆御免

可被下候、

## ○　三六二　宿許・大久保利和・牧野伸顕・大久保利武宛書翰　②—231

尚々皆々夏いたみ無之やう大事ニ可被致候、

一筆申入候、炎暑之時分皆々無異之筈珍重存候、次ニ拙者にも元気滞坂致居、明日外国船便有之江戸江出帆之筈に候、少も御懸念被成ましく候、

一上様にも俄に御帰国被為遊、賑々敷候半と相察候、彦熊事も御供にて安着候半トそんし候、拙者京都へ罷居候得ハ、暫時ハめし置度含ニ候得共、留主中にてハ安心も出来兼、且当分ハめったに此節之様便船無之候付、差下シ候、当人ハよく相付是非々々京都へまいり、其上下り候含之由ニ候へとも、何分前条次第にていたし方なく、千年川相頼さし下シ候、直太郎事も江戸へめしつれ候、何れ彼方都合次第差下シ可申候、彦熊にハ落着兼候半と相考候へとも、千年川にハよほと気入にて、同人もていねいにいたし呉候間、態と相たのミ入れ候、同人早々上京之賦に候間、其間ハ宿江めし置ていねい可被致置候、下りニ付而ハ途用金なとハ遣置候付、左様承知可被成候、さかな酒ぶたなと為給候へハよろしく候、其節書状差遣筈候処前日より客来別而いそかしく得不遣候ゆへ為念申いれ候、

一已来書状等ハ大坂税所長藏殿迄差出可被成候、同所より船便を以速に相届候、

一直太郎江御申含被成候事、助市様江御返詞不申上候而不相済候へとも、右ハ同人下り候節委事可申上、若急ニ下り兼候ハヽ、江戸表より何分可申上候間、左様御申上置可被給候、

、一彦熊便より品々差下候間、相とゝき候半と存候、燈籠五ツ下シ候間盆用に可被備候、藤井氏・石原氏江も可被差上候、

右ハ今日長崎迄浪華丸と申船出帆致し候段承、一左右迄申入候、何も江戸より委事可申遣候、可祝、

六月十七日　　一藏

宿許

彦熊殿
伸熊殿
三熊殿
人々

追而何方へもよろしく申入可被給候、彦熊にも帰国にき〳〵敷候半、いさかいどもいたさぬように申入可被給候、助市様・石原兄弟様江書状遣度候へとも、是以よろしく御伝置可被給候、

## ○　三六三　石原近義宛書翰　⑥—1002

拝呈、御別後愈御堅固、海上御都合克今比御安着之筈と奉敬賀候、次ニ小子ニも無事家内一同不相変候付何も御安心可被下候、其許にも類中何も無事にて候半、久々振御帰県ニ而一同御歓之事致遠察候、可成速に御仕舞御帰京御待申上候、御出立前御進め申上候通、御親父様ハ勿論みねなとも（利通三妹・石原近義妻）是非御召列有之度、此節は時分も宜ク又難得機会ニ候間、決而前後之事ニ拘らす思切テ打立候様御申聞被下度、女兄弟中間にて色々ト物議も可有之候得共、固より長キ事ニも無御座、一応見物かてらニ候間、能々了解いたし度祈入候、（利通二妹・山田有爾妻）すまニハ子供大勢にて上京ト申事不調候ハヽ、貴地にハ身軽ルニ候間暫らく一緒に上京候而も可然存候間、其段直左衛門（石原近義兄）殿江御談可被下候、小子も旁勘考有之前段分而申上越置候、

一諸書付類其外ハ御立前御願申上候通、可然御取計可被下候、且道具類之事若能品有之候ハヽ、御持参偏ニ御待申上候、其後段々承候得ハ重久氏ニ種々名品有之候由、古銅并ニ支那焼陶器之花瓶類所持之由ニ有之、花瓶は兼而相求度さがし居候処ニ有之候間、若大振ニ而可成古物宜キ品有之候ハヽ、御相談ニ而御持登り被下候得ハ仕合ニ御座候、外ニ瓶掛ケ等有之候ハヽ、同様御頼申上候、同家ハ貴兄も御懇意之事にも有之、随分御相談も可相調欤ト存候付申上候間、何卒出来候ハヽ、右通御計被下度、乍去推而ハ申上候事ニ無御座候間、其段ハ御承知可被下候、

右御頼申上度迄早々如此御座候、拝首、

五月十二日　　利通

石原近義様

尚々何方へも宜ク御伝可被下候、高輪之方も最早庭も惣成就相成、昨日も参候処凡而居り相付、誠に結構ニ御座候、多分東京第一ト相誇り候、税所上京候ハヽ大閉口ト存候、御賢兄様江御咄置可被下候、

〔表紙〕

（巻数不明）

○　三六四　吉田清成宛書翰　⑤—808

弥御安康奉敬賀候、然ハ過日御示談申上置候取調之一条、少々差急キ候ニ付、乍御面倒速ニ御調被下候様奉願候、外ハ寛々ニ而宜舗候へ共、各国政体之処丈御頼申上候、尤其内御面談仕度事件も有之候処、今日大隈より承候得は横濱へ御出之由、格別御手間取之事候得ハ、是非鳥渡に而も御帰相成候様奉願候、明後日中ニ御帰ニ而来ル四日朝拝接出来候得ハ別而仕合ニ御座候、大蔵省御用も無余義と存候へ共、前条遮而之事ニ付御調成らず（衍カ）ストも、四日朝御面会ハ相願度事ニ御座候、尤過日も申上置候通先内々之事ニ御座候付、其段ハ御含可被下候、此旨早々頓首、

三月朔日　　大久保

吉田様

○　三六五　吉田清成宛書翰　⑤—729

花墨拝読仕、然は御取調書御出来之由ニ而、則為御持被下正ニ落手仕候、篤ト拝覧可致御示諭之通、気付之処加筆御頼可申上候間、清書御申付可被下候、別而御骨折被下奉万謝候、且又国体論之処云々拝承仕候、是は可成早目之方仕合御座候間、大略を一通り順序を立御取調被下、綿密ニいたし、余は又跡に御回し被下ましくや、綱と目と区別いたし候而可然やと奉存候、勿論至急ニいたし而ハ詳細之御取調ハ御無理と相考候、此旨拝答迄如此、尚拝接可奉厚謝候、誠惶、

十月廿七日　　利通

清成様

○　三六六　吉田清成宛書翰　⑤—787

拝読仕候、昨日は御尋被下辱奉存候、扨大隈卿へ御示談之形行詳細被示聞逐一拝承、別段異論も無御座候得共、県官へ転任等之事、猶厚談合之上ならてハ御同意と申訳にいたり兼候、尤十日迄にハ内務開店ハ無相違為運候所存ニ御座候、兎角明日ハ暫時候へ共、参朝旁大隈卿へも打合せ候含に御座候、随分憤発之趣大慶ニ存候、乍去大蔵大丞ニハ是非さつかりたる者を御採用無之而ハ相済ましく、卿ハ今日之事務は相弁可申候へ共、決而御安心被成候而ハ不可然と存候、先御則答まて草々如比、余は拝接可申述候、頓首、

正月六日　　利通

清成様

○　三六七　吉田清成宛書翰　⑤—737

尚御多祥奉敬賀候、然は確定此ノ政体論ハ詳密相調、別段間然する処無御座候、尚又跡組立之処可成速ニ御調被下候様御願申上候、明日一字より大原子同道参上可致と約束致兼候ニ付御待可被下、同人調も一通出来候積に御座候、可相成は直ニ清書相成候様御願申上度、何分明日御参旁御談可申上候、遣使論は先つあれにて宜く、何分差向タル方片時も差急き候ニ付、為国家御勉強被下度万祷仕候、此旨草々奉得御意候、頓首、

十一月五日　　利通

清成様

○　三六八　岩倉具視宛書翰　④—640

奉謹読候、然ハ分家云々に付条公より御懸合之趣承知仕候、内実は旧県之処賞典に而、士族戦功之賞は行不申候故、差支候廉無之候得共、外響合にも相成可申候付、分与三万石に而も御取究被下候而可然奉存候間、明朝断然御答御申出被下候而、何も異論無御座候間、宜舗奉伏願候○明八日午後橋爪一会之事昨日承知仕候処、明日ハ於省も大に取込候儀有之四字後退省可相調、五字よりハ伊地知正治是非一会いたし度と之事候間、何卒明日ハ御前限り御聞取被下候得ハ大事奉存候、若御延期ニも相成候

ハ、、御沙汰次第参昇可仕候○明日右院式日に候処、省中ニおひて前条通差急候御用有之、出院相調不申候間、何卒よろしく奉頼候、乍去可成太輔にても参院之都合ニ可致含にハ候得共、時宜に依不参も難図故御断申上置候、乍序申上候儀恐縮之至に候得共、不顧憚奉願置候、

右尊酬旁如此御座候、恐惶、

九月七日　利通

「封

岩倉公閣下　利通」

## ※　三六九　伊地知正治宛書翰

「〆

伊地知正治殿　大久保一蔵」

庶而御用之儀候間、明廿日朝五ツ半比より築地御茶屋江可被罷出旨、右衞門殿被仰候間此旨申達候、以上、

二月十九日

## ○　三七〇　三条実美宛書翰

㊐—1217

方今ノ急務トスル処人民ノ営業ヲ勧奨シ、各自孜々黽勉物産富殖ナラシムルニアルハ不竢論、然ルニ陸羽地方ニ於ルヤ海陸未タ搬運之便ヲ得ス、人員未タ蓄息セス、民力萎靡農工不興、故ニ今般千載未曾有之盛典ヲ被相挙、該地方

御巡幸親ク万民ノ安苦ヲ被為諮、随テ利通亦御先発ノ命ヲ奉シ実地ノ景況ヲ熟察スルニ、人民頑陋物産不興荒蕪原野ハ各地ニ連通スルモ、空ク獣蹄鳥跡ニ委シ、良産美品アルモ渋滞シテ僅ニ其一区ニ止リ、実ニ不堪愛惜、然ルニ該地方ヲ振起セシムルモノ独民力ノミノ能スル処ニアラス、到底官力ヲ副テ勧励スルニアラサレハ能ハス、今ヤ

御巡幸ノ後民心盛発ノ時ニ臨ミ、宜ク勧奨ノ道ヲ可施ノ一大好機ニ際シ、豈一日も忽諸スヘケンヤ、依之陸羽各県勧業資本之義更ニ特別之御評議ヲ以金弐拾万円御裁定相成度、然ル上ハ篤ク隆旨ノ在ル処ヲ諭シ、各地適当ノ方法反覆審案ヲ尽サシメ、人民奮起固有之物産ヲ蓄殖シ、

漸次未開之良産ヲモ興サシメ、徐々トシテ陸羽今日之面目ヲ改メ、尚一層ノ国力ヲ興殖致度此段仰御裁定候也、

内務卿大久保利通

太政大臣三條實美殿

## ○ 三七一　松方正義宛書翰

㋐—1183

「東京　宮城県
松方大蔵大輔殿　大久保利通
親展回答」

両度之貴墨落掌辱敬読、愈以御安固被成御奉務奉賀候、一内国博覧会諸規則等取調済一応御差廻可相成ヤ、御問越之趣致承知候、省議ニ而決定候得ハ別段御差廻ニ及不申候間、速ニ御運はセ可被下候、パテント取調ニ付八等位相当之人物、雇出仕之間ニ御採用可有之趣被示聞是又致承知候、佐々木も来ル廿五日ニ発船之都合之由、就而同行云々も致承知候、

一小子にも山形県より一昨日当県江着仕候、是より松島石之巻等へ巡廻之筈ニ御座候、

御着輦被為在候得ハ直ニ秋田・岩手を経過し、青森江出　御待迎申上候含ニ候、此節之巡廻は別而学問ニ相成候得共、何分にも急か舗、漸々一日ッ、之逗留ニ而、何を見ル間も聞間も無之、飛脚同様之事に候、乍去勧業之事ハ逐一示談、凡而是迄着手致候形行且将来之目的を立、詳細相認差出セ候事に相達置候間、左様御承知可被下候、委舗承候得ハ少々宛ハ似合〳〵ニ着手致居候県も有之、少々導キ候得ハ其功験ハ必相見得可申と存候、内存ニハ右見込書差出セ候上得と取調熟議を尽シ、猶時宜ニ依奥羽地方長官或は主務之者を呼集、厚ク其方法を論シ其宜キヲ取、奥羽一般ニ着手致度存候、就中手ヲ入度ものハ製糸器械所ニ而候、奥羽地方ニハ是か第一と愚考イタシ候、仍而可成人民（豪農豪商）を説諭し取起サセ候手筈に示談致置候、少々ツ、資本貸与へ候得は三・四ヶ所ハ必らす調ヒ可申候、置賜県豪農佐々木宇右衛門と申者ハ蚕卵之非ナルヲ知り、憤発して自力ヲ以四十二釜之器械所ヲ設立、当時盛ンニ運用

イタシ候、県庁より六・七里隔り候処ニ而、是非一覧致呉候様歎願承候故差越一覧イタシ候、二本松製糸場之小サイノミニテ、器械其外工女之手練等少しも相替候処無之候、鶴か岡県ニ而ハ本間酒田より出懸同人宅江是非参呉候様内願有之候得共、酒田迄参候日合無之故相断、是以製糸器械所設立之義相進め置候、誠ニ古メキ候得共少々ハ感応有之候様見受候、兎も角東京江引出シ候手段を三島江謀り置候間、当年中ニハ必らす出京可致、さ候得は大ニ又眼を開き可申候、未だ奥羽ニハ金持沢山ニ有之、是を運用為致候得ハよほと之助ケニ相成可申候、本間ハ奥羽中之信ヲ得候間、先ツ是を説伏セ候義第一ニ候、

右御回答旁草々如此、猶追々可申上候、敬白、

六月十八日　　利通

松方正義殿

猶々時下御保養専要所承候、

## ○　三七二　松方正義宛書翰

⑦—1199

「松方正義殿　　大久保利通
至急」

度々御面働之至候得共、明朝御立寄被下候様相願度今日御談申上而も宜ク候得共、少々相憚候事故態と差扣候、且品川一封も参候処彼貸金一条も十分注意致候と相見、仍而大隈江御申入無之内御談申上度候、此旨早々、拝具、

八月四日　　利通

松方雅丈
玉欄下

## ○　三七三　松方正義宛別啓書翰

⑧—1434

「東京　　在阪
松方大蔵大輔殿　　大久保利通
親斥」

別啓

鹿児島県人撰等之義奈良原近情を得候間、内々同人江御談可被下候、最此上之模様ニ依而ハ、同人鹿児島江参候様之義有之候得ハ、如何様共御請可致候付申遣呉候様承

居候、仍而考候ニ岩村参候節は、前後ニ同人を差遣候ハヽ、旁都合も可宜と愚考候付、其旨御致意被成置被下度候、左候得ハ岩村其出発之節同行ニ而も、其前ニ而も上坂有之様御談置可被下候也、

三月廿六日　　利通

松方殿

## ○　三七四　松方正義宛書翰　⑧—1433

拝啓愈御堅固被成御奉務奉敬賀候、陳ハ此内度々御投書ニ預御答も不申上多罪々々、西南之模様官軍必勝之地を占、最早我掌中之ものと相成御同慶之至ニ候、

一鹿児島新令岩村通俊御請相成誠に仕合之至ニ候、就而此節書記官并ニ属官人撰、且其余伺定め之為暫時出京有之候、書記官ハ同人考ニハ鹿児島人之望ニ候得共、種々勘考ヲ廻らし見而も気付無之候、上村なとハ随分と存候得共承候得ハ、少々云々も有之候由ニ而迚も御請致ましく、仍而愚考ニハ人見寧義同県江一応遊歴、人望も有之候間可然と存候、同人は迷惑欤も難図候得共、為人気胆も有之候故憤発出来候半と信用いたし候、中々尋常一様之人物ニ而ハ所詮六か鋪候間、貴台より十分御示諭被下度候、勧農局ニ而も必用ニ而御困りと存候得共、大小軽重御参酌御断決所仰候、乍去若外ニ可然適当之人物御見込も有之候ハヽ、猶承知仕度候、此内前島少輔迄申遣置候間、自ら御示談も有之事ニ候半、御名考も候ハヽ、無此上候、一考ニハ小子手元ニ有之候西村と存候得共、是ハ未事務ニ馴不申候故少シク不安心ニ有之候、殊ニ鹿児城ノ人心ハ気請第一ニ候間、人見之方万々と存候、判任ハ属官連多々有之故、十分ニ其人を得可申候得共、課長之処容易ニ無之、尤是ハ同県人も無之候而ハ、事情不通之患も可有之候間、御熟考被下度候、

一大蔵省御伺之件も不少候付、岩村より御談可申上候付、宜シク御尽力可被下、今日之際決而他江同県江御請致候人ハ無之候故、少シハ出格之御取分ケ無之而ハ甚無理と存候付、例之大蔵省之規則ツメ（ク脱カ）ハ御用捨有之度候、同卿江も其段御伝可被下候、

右御頼申上度草々如此、何も同人より御聞取可被下候、拝首々々、

三月廿六日　　利通

松方雅兄

○　**三七五**　松方正義宛書翰　⑦—1330

別紙□(史山田顕義)□添書□(史ヲ)以青□(史森)県□(史土)族杉山□(史龍)江と申者地租改正之事ニ付、同県区長大道寺繁禎建白書□(史持)参ニ付、一覧之上御廻□(史申)上候、建白書中宮城県之比較等照考候得ハ、随分理屈ハ有之様ニ相□(史見)得候、如此者ハ能了得為致置不申候而ハ不可然と存候付、御熟覧之上杉山ナル者へ御面会□(史御)質問有之安心候様、御説諭被下度御都合為御知有之候得ハ、山田迄申遣候様可致候、此旨草々如此候也、

十二月十七日　　利通

松方正義殿

○　**三七六**　松方正義宛書翰　⑦—1159

「松方正義殿　　大久保利通

品々相附　　」

益御多祥奉拝賀候、扨兼而御約束申上置候五岳老画幅差上候、外ニ馬少白一幅持合之品ニ付進呈致度差出候付、御収手被下候得ハ大幸之至ニ候、且又別紙之通岳老江贈品為持上候間、毎度御手数ニ候得とも、御序之節御送与被下度奉頼候、又々書画頼遣度毎々迷惑欤と相察候得共、此内出来之画ハ

臨御之折、奉供

天覧候処、別而

思食ニ被為叶、二幅ハ

御用相成、即日御持セニ而、則より

玉座江懸ケサセラレ候由、小子ニ至誠ニ本懐之至ニ候、

岳老承知候ハヽ、必難有カラレ候事と想像イタシ候、外ニ

二幅ハ三條殿・岩倉殿江進上候処、残少ナニ相成候付、

是非相頼度候間、何卒得意之画染筆給候様御頼遣被下度、

便宜之折ハ為御知被下候ハヽ、小子よりも猶一封ヲ以相

願可申候得共、已ニ発足も近寄候付、此旨御頼旁草々拝

表奉謝候、拝白、

五月十三日　　利通

松方正義雅丈
玉机下

打付箱　一
内羽二重　一疋
銀銚子　一
銀桃形盃　一
右五岳老江一礼トシテ差送度、
ぬめ地　三枚
書画願
同　三枚
御頼之拙筆
右甚御面働之至ニ候得共、便宜之節差送方可然御頼申上候也、

五月十三日　　利通

松方雅丈

## ○　三七七　松方正義宛書翰　⑧—1577

「松方勧農局長殿　　利通
至急　」

此度ハ御苦労之至ニ御座候、扨新町器械所写真并ニ製糸等、明日ハ参朝大臣始ハ勿論奉供
天覧候心得ニ而、差送方之義申入置候処、未到達不致、若勧農局之方へ参居候も難図候間、明朝御取調、参居候ハヽ、十時迄ニ内閣江御差出被下度、い細御尋被為在候付、言上之節
天覧被為在候ハヽ、御都合と存候、製糸場概表尤必用ニ有之候、此旨御頼申上度草々如此御座候也、

十月廿三日　　利通

松方殿

## ○　三七八　松方正義宛書翰　⑨—1696

尚々長谷部大坂江被転候旨申上置候へ共、一旦御治定相成居、御検印迄も相成候処、其後御見合と申事

之由、昨日同人被仰付候方宜舗と申候へ共、廣沢論ニ同人御請致ましくと貴兄御咄之旨申出、それにてハ無致方と其まゝ捨置候、何そ同人咄にても御聞込候やいかゝと存候、

弥御清安奉敬賀候、然ハ過日御咄申上置候最上外国勤学之事、今日萬里小路・石山両華族洋行被仰付筈に内定致候付、明後日御発足可有之候、直ニ御申立有之候ハヽ、御評議も相付可申候、大木御示談省より御願立之運ニ相成候方可然、尤農政ハ一大緊要事何は扨置御差出無之候而不相済候、尤追々人柄取調願立旨をも御申出相成居候而も宜舗御座候、委曲拝謁可申上候得共其内早々如此候也、

壬廿九日

「松方盟台
閣下　　大久保
」

○　三七九　松方正義宛書翰　⑨—1718

「大蔵省
松方大蔵大輔殿
至急　　大久保利通
」

御面働之至ニ候得共、遮而御内談申上度義有之候付、御差支無御座候ハヽ、御退出より鳥渡御立寄被下候得ハ仕合ニ御座候、此旨草々拝首、

五月五日　　利通

松方様

〔表紙〕

明治七年台湾事件及
支那談判関係文書

大久保
205

※ 三八〇 覚書

癸
五月

長崎ヘ行ニ付御用書類 可見分

※ 三八一 覚書

明治七年五月四日於長崎左ノ件々ヲ決ス、

一柳原公使(前光)至急派出セラルヘキ様東京ヘ電報差出シ候事

一西郷事、雇船或ハ買得船ヲ以至急生番社寮ヘ出発スル事、

一大隈事、柳原公使当港着迄待受篤ト旨趣申含メ協議イタスヘキ事、

一大久保事、明五日中出帆実地ノ景況ニ依リ進退決着ノ形行可及言上事、

一前条決着ニ付難題ヲ醸出シ候節ハ、大久保始其責ニ任スヘキ事、

大隈
西郷
大久保

※ 三八二 談判案文

一八月十七日、貴王大臣ノ照会ヲ閲悉スルニ、我請問スル処ノ各節ニ貴答ナサレス、本大臣甚了解イタサヽル所ナリ、抑此議論ヲ来ス所以ノモノハ貴国ノ疑問アルニ起ル、故ニ是ヲ弁論シテ貴国ノ疑団ヲ釈然タラシメ、両国ノ和好ヲ保存スルノ要旨ニシテ、本大臣ヲ派スルモ他意アラス、因テ貴王大臣江初次面晤ノ時ニケ条ノ

問ニ及、順次数回ノ往復ヲ重ネ、逐条互ニ其意ヲ尽シテ今日ニ至ル、然ルニ言ヲ左右ニ托シ答復セラレサルノ旨趣ハ、我談判ヲ拒マルヽニ出ルカ、或ハ弁解語塞ル故カ、甚疑惑スルトコロナリ、

一臆度猜疑ノ詞ヲ以云々申サルヽニ付、照会中ニモ申入レ置キタリ、本大臣問フ所ノモノ尽ク明征スルトコロアツテ、一モ臆度猜疑ニ出ルモノナシ、若又貴王大臣如何ソ是ヲ隠秘セラルヽヤ、社餉ノ条並ニ可見中國無置而不問等ノ条、現ニ実事ノ差違アルヲ以テ之ヲ推問シタルモノニテ、俄然今日ニ至リ答復ヲ置カルヽノ理ナシ、貴王大臣毎ニ云、和好ノ誼如此ナルヘキ可キカ、(衍カ)

一貴王大臣若シ談判ヲ拒ムノ意ニ出レハ、是則両国交親ヲ破ノ旨赴ト見做サヽルヲ得ス、若シ弁論ニ渉レハ睦誼ヲ傷ノ恐レアリトイハヽ、何ヲ以テ属否ノ論ヲ決セン、然ラハ何レノ弁法ヲ以之ヲ理スルヲ得ンヤ、

一貴王大臣何ソ弁法ナク、談判モ亦拒マルヽニ於テハ、無用ノ地ニ止ルヲ得ス、故ニ本大臣速ニ帰朝スヘシ、然レハ一言貴王大臣告ルアリ、談判ヲ拒マヽレ此案ヲ成局セサル時ハ、是迄柳原大臣・本大臣共ニ尽誠セシトコロノモノ、凡テ水泡ニ属シテ其本ニ反スルノミ、其本ニ反スルトハ則昨春我使節ヲ以テ人ヲ遣ハシ、査弁スルヲ以テ貴衙門ニ告知ヲ経、承引セラレシナリ、是我征番ノ挙ニ就テ無主ノ野番タルヲ以テ確拠トスルモノナレハ、貴王大臣談判ヲ止ラル、上ハ、弥昨春使節ノ告知シタルヲ以テ異論ナキモノト見居ルニ付、其旨心得ヲル可シ、我隣国ノ礼ヲ尽セシハ足レリトスルトコロナリ、此上ハ愈我義挙ノ目的ヲ貫功ヲ達センコトヲ欲スルナリ、

一我征番(蕃)ノ挙タルヤ我人民ヲ保恤スルヲ以第一トス、凶暴野蕃ヲ膺懲(懲)シテ之ヲ開化ニ誘クヲ以テ第二トス、将来航海者ヲシテ安寧ヲ保タシムルヲ以テ第三トス、此三ノ者名正言順豈天地間ノ一大美事ト言ハサル可ラス万国誰カ啄ヲ容ル、モノアランヤ、然ニ貴国旁議ヲ容レ侵越臆度等ノ言ヲ以テ、我義挙ヲ妨ケラル、果シテ何ノ意ソヤ、

一条約第一条・第二条ヲ以テ引カル、処ノ言、前条陳述

スル処ヲ以テ其誤解ナルコトヲ了知アルヘシ、

一判然無主ノ野番ナルヲ益征認シタル上ハ、台番ノ我兵一人モ退クルコトハイタサヽルノミナラス、既ニ本大臣発足后数千ノ兵ヲ送リタル旨モ報知アリ、台地ニ於テ現ニ道路ヲ建築シ、居所ヲ造営シ、不毛ヲ開キ、礦山ヲ起ス等ノ業ニ取カヽリタル由、猶追々砲台等ノ用意モイタスヘクトノ赴(趣)ナリ、由テ一層盛大ノ事業ヲ創、目的ヲ達セントス、是又了承之アリタシ、

一前条ニ付テハ貴国ト接攘ノ地故、互ニ兵隊等ノ末々ニ至リ疏暴ノ挙動ヲ以、両国ノ和好ヲ破ラサル様注意イタシ度ニ付、分テ申入レ置クナリ、

〔表紙〕

大久保
207

一月廿三日　　利通

右府公

再伸、明日就
御発輦是非
皇居迄ニ而も参内、奉伺
天気度候処、何分明朝迄ハ参内相調兼、甚心外之至
ニ奉存候得共、御断申上候付、左様御聞置可被下候、
此模様ニ而は平情ニ而御都合可宜と奉存候、

○　三八三　岩倉具視宛書翰　㋐—1374

「岩倉右大臣殿　　大久保利通
親展

〆　　」

過刻は態々御入来被成下、恐縮之至奉存候、北島一封一
覧返上仕候、此内御廻有之候徳卿(徳大寺実則)一書も返上仕候、明日
迄ニハ奈良原面会可仕と存候付、鷹尾一条相談置可申候、
御安心可被成下候、此段草々如此御座候、拝白、

〔表紙〕

史料尺牘　明治四賢之巻

大久保
208

○　三八四　岩倉具視宛書翰　⑤—694

尚々午前外出之事、公用には無之故御都合次第ニハ相止候而差支無御座候間、左様御承知可被成下候、今朝来度々御面倒奉恐入候、然ハ昨夜極内愚存言上仕候末、今日中何分御答可被成下趣承知仕居候処、明日木戸氏江條公御同道御出向被成候筋御決定之旨拝承、無此上御都合と奉存候、就而は同氏見込是非御聞取相成候而、過日来再三申上候通、夫を根軸として速ニ諸事御運相成候様希望する処ニ候、申上候も奉恐入候得共、何く迄も同氏江厚御頼談、是非赤心吐露仕候迄は、至誠御貫徹相成候様御配意専要と奉存候、全体昨夜言上之旨趣ハ、小臣御受不申上候得ハ、木戸氏も迚も六か鋪と之御内話故、しからハ止を得さる故云々愚意申上たる次第に御座候、今朝伊藤子も相見得、懇切ニ忠告之趣も有之候得共、何分小臣之存慮ハ再応閣下方へも申上置候通ニ而甚当惑仕、乍去折角之親切故、尚熟考可仕と答置、且一体之見込之咄有之故、昨夜申上候、内存ハ決而不申入、兎角木戸先生を根本にして、御一定有之外見込無之旨相答置候次第に御座候間、左様御得心被下度奉願候、鳥渡参上右等御直話申上、且御示談之御都合も相伺度候得共、必御多用と奉察、為念一筆ヲ以如此御座候、明日ハ御沙汰次第参上可仕候得共、午前ハ外出仕候付左様御承知被下度奉願候、草々拝首、

九月卅日　利通

具視公閣下

「岩倉右大臣殿　大久保利通

封

親展差上置

└

〔表紙〕

大久保

209

## ※ 三八五　中井弘宛書翰

益御清康奉賀候、陳ハ今夕明朝ニ懸、深川進撃之義伊藤子へ相促候処、別紙之通返詞到来候ニ付、乍御面倒彼近辺江一泊之場所御見立被下度御頼申上候、今日御出省之上ニ而ハ機会ヲ失可申候間、此旨草々御注進ニ及候、何れ爾後御宅之様御立寄可申上候間、御待可被下候、頓首、

一月廿六日　　利通

中井君

〔表紙〕

大久保

210

## ※　三八六　岩倉具視宛書翰

（後筆）「條公江差上候手扣書写」

小臣事無量之
天恩を蒙り、殊ニ　殿下之懇命ニ預るコト亦不浅、実に感佩する所に御座候、然るに今日ニ至甚恐縮之至ニ不堪候得共、奉職之目的難相立辞表差出候、実に暗愚を忘、漫汚重任候儀、今更赧顔至極に御座候、今日之事何様之御沙汰を承知仕候而も断然心決仕候間、速に御許可被下候様万祷仕候、乍去国家之事度外ニ置候心事更に無御座候間、若禍端を開き候ハヽ、一兵卒と相成、一死を以聊万分之一を奉報度候付、其節ニ臨ミ候ハヽ、進ンテ御依頼申上候付、何卒微忠御哀憐ヲ賜り候様今より奉願置候云々、

尚々御預申上置候御書取返上仕候付御落手可被下候

（後書）「辞表之稿」

不肖之小臣不顧分漫汚重任罷在候処、奉職之目的難相立候付、当務被免位階返上被　仰付候様奉願候間、速に御許可相成候様御執　奏被下度奉懇祷候、誠惶頓首、

利　通

「岩倉右大臣殿　至急　　大久保利通」

〔表紙〕

元勲四公尺牘　素軒叟署

大久保
211

## ※　三八七　上書

奉拝見候、御別紙別段異存も無御座候得共、就御質問左ニ愚考奉申上候、

一霖雨出水ニ付、阿州長岡先ツ兵隊丈ケ速ニ出帆セヨトノ御達シ可然候得共、最早両日ニハ通路明キ可申候間、愈主人ノ発足ヲ御促シ相成候而、召列候兵隊ノ内先供ハ是非両三日中ニ発船ノ都合ニイタセトノ御意味合ノ方可然奉存候、奥羽ノ一左右モ有之、実ニ至急之場合ニ付而ハ、一涯御厲シ可有之事ニ御座候、先ツ兵隊タケト申候テハ主人ノ処急ナラヌ様ニ心得候テハ不可然ニ付、益御責ノ方ニイタシ度モノニ愚考仕候、

一小松ノ事ハ既ニ御決定ニ相成居候得ハ、別段議セラルヽニ及申間鋪、私事ハ東海道陸行ニ而、修理太夫江同行ニ付而は、寛急イカヽトモ難図、仍而其内ノ処関東江ハ御治定通小松可被差遣トノ御達ニ而可然愚考仕候、

一岩下ノ処、後藤一時下坂ノ賦ニ御座候や、御ケ条ニ而ハ其辺分兼申候付、何共難申上候、

右愚存奉申上候、百拝、

五月廿日　　大久保一蔵

上

〔表紙〕

大久保
219

○　三八八　森山新蔵宛書翰　①—1

証弁

金子拾四両壱部㊞

両ニ付七貫五百文替㊞

銭ニして

百六貫八百七拾弐文㊞

但壱ケ年ニ金子五両余宛本くやし（元金入れ）

右之通此節無拠入用ニ付、致御借用候儀別条無御座候、御返済之儀ハ壱ケ年ニ金子五両余ツ、入付、三ケ年目元利無相違引結可致候、依而為後日証拠人相立如斯御座候、以上、

嘉永四年辛亥
六月廿八日

証拠人
皆吉金六㊞

借主
大久保正助㊞

森山与兵衛殿

○　三八九　森山新蔵宛書翰　⑨—1671

証弁

太刀　壱本

代金廿両㊞

両ニ付七貫五百文替㊞

銭ニして百五拾貫文㊞

右は此節無拠入用候ニ付致御借用候儀別条無御座候、右為引当本行之品差上置候、拾ケ年内金子入付候は御返可給候、若年限相筈合候は、御勝手次第御取計可被給候、依而為後日証拠人相立、証文如斯御座候、已上、

嘉永四年辛亥
六月廿八日

証拠人
皆吉金六㊞

借主
大久保正助㊞

森山與兵衛殿

○　三九〇　森山新蔵宛書翰　⑨—1672

請取

金子三拾四両壱部㊞
両ニ付七貫五百文替㊞
銭ニして弐百五拾六貫八百七拾弐文㊞
右之通為御借用金慥ニ相受取候、已上、

辛亥
六月廿八日　大久保正助㊞

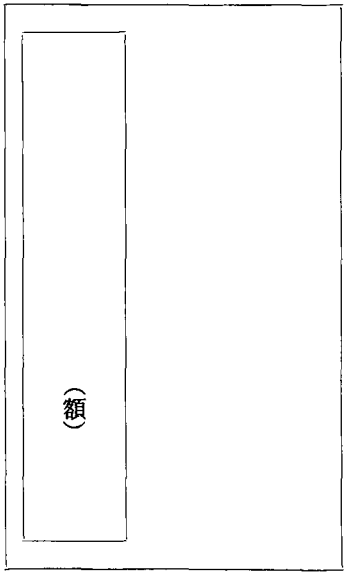
森山与兵衛様

○　三九一　森山新蔵宛書翰　①—2

残暑未甚敷御座候得共、愈御堅勝奉賀候、扨年々御返済金当月中御延引御願申上置候付、是非五金丈御首尾合可申上含御座候ハヽ、精々ニ才覚致候処、漸々二金丈相調、近比赤面共何とも申上様も無之次第ニ御座候、何卒右丈ケ御受取置被下、残金暫御延引被成下候儀相叶ましくや、平ニ御願申上候、此旨乍大略以書中御相談申上候、尚拝眉委曲可奉申謝候、已上、

閏七月廿九日

「森山與兵衛様　大久保正助
金子糺合」




奉頼候、随而些少之至奉存候へ共、肴一折御着之御祝詞迄懸御目候間、御笑留被下候へハ多幸奉存候、此旨貴様迄早々奉得御意候、以上、

十月八日

追而御礼かた〳〵鳥渡参上仕度と存候へ共、其後夜終遅退出かた〳〵ニ付、其義不相叶候間、何卒御憐察可被下候、

「岸良七之亟様　上置　　大久保一藏」

## ※　三九二　岸良兼養宛書翰

尚々段々御噺申上度候得共、とかく御直談ならてハ難申尽候、近々之内御出被下候へハ仕合奉存候、晩ハ格別客来も少ク御座候、

追日寒冷相催候処、弥御安静被成御座、珍重之至奉存候、私事も先日ハ案外之奉命、難有仕合奉存候、就而ハ見事之御肴御祝被下、忝御礼申上候、将亦堀君ニも御安着之由御安堵之筈奉存候、長々之舟中嘸々御退屈之筈親察仕候、宜敷御伝置被下度

（掛軸）

## ※ 三九三　小松帯刀宛書翰

よと河舟中夜半に月を見て
棹さして行々見れは九重の
　　都の空に月かすむ也
散花と都をたちてよと河の
　　月になかれてかへる旅かな

右御笑草に奉備御覧候、
追々御高調も被為出来候半、何も御下り之上可奉拝見候、以上、

三月廿六日　　一藏
帯刀様

## ※ 三九四　黒田清隆宛書翰

昨夜ハ態々御投書拝読、然ハ篠原氏江御出御談被下六か鋪趣承知仕候、多分無益とハ奉存候得共、傍観ニ不忍只人事を尽シ候迄ニ而、奉労候事に御座候、其後大隊長之一件も何も承不申候、固より如此紛擾を生シ候事顕然無驚にあらす、此上ハ形行ニ任セ候外無御座候、小子ハ明日より参朝心得に御座候、昨日大隈（重信）参議兼大蔵卿・寺島（宗則）参議兼外務卿・勝（海舟）参議兼海軍卿・大木（喬任）参議兼司法卿・伊藤（博文）参議兼工部卿拝命之由ニ御座候、右乍延引御礼答旁如此改期拝接候、頓首々々、

十月廿六日　　利通
（黒田）清隆様

右甲東大久保公手書両通与羽皐黒田公者、其一作于癸酉十月、時朝鮮案起、西郷南洲以議不合、挂冠去、篠原國

幹亦将従之帰、公謀留之不諧、故書中云、雖知其無益聊尽人事耳、嗟乎既知事之決裂莫能為、尚且竭心力以謀補救之、凡百施為其無所苟可知矣、夫如此而猶不有成則天也、安以俟命而已、是公一生本領此書足以見一班、古潭鈴木君欽公手澤装潢蔵之、余因道所以私慕于公者以為之跋云、明治辛巳（十四年）五月小牧昌業謹識、

## ※ 三九五　石原近昌宛書翰

拝啓、三邦丸より之御手紙拝見、愈以御揃御無異被成御座、奉敬賀候、次ニ小子無異儀相勤、来ル廿日比東下仕候間、乍略義御降慮可被下候、爰元別而静謐ニ而、出立迄ハ先格別之御用も無之候付、先以朔日より伊勢参宮共いたし候、乍去六日には早目帰京いたし中途は極急きにて一日ニ十七八里ッヽ之通行ニ而、迚もなくさミは出来不申候、しかし是非一度ハと考居候付誠ニ安心仕候、御守共下シ申候間御配分可被下候、将又御高下り之一条被仰聞、少々所存有之見合之考御座候へ共、貴家之高脇方へ御片付被成候も残念ニ存申候間、金子都合いたし此節幸便ニ付、小松家付之白石宗右衛門と申付役江たのミ差下シ申候、委曲ハ正五郎江申越候付、弥其通之御勘考ニ候ハヽ御譲受可申候間、正五郎江御談可然御取計可被下候、しかし是非とハ難申上、可成御気張相成候様にと存上候、別段御賢考ヲ以御高下り之御含ニ候ハヽ御もらひ可申上候、当分御変革之折私共よりせがれて高ニ而も求候而ハ甚よろしからすと相考候付、外事候ハヽ一先見合申候、其段ハ御含居可被下候、助市様ニも御旅行之由、貴公様にハ未御在宿欤ト奉存候付、宿元之事万事無御心置御下知被下候様御頼申上候、御賢弟様も御元気之由、追々御紙面も参候、不遠御面会彼是御咄可申承トたのしミ居候、此節御登之御状も慥ニ相受取、目貫たのミ置候処致成就下シ給り、大に安心仕候、東京江参候ハヽ暫時ハ又目の玉飛出候めに逢ひ可申欤ト相考候、御笑察可被下候、宿元板蔵修復等

御前様一条も被為在候付、能折ニ打立候様御申聞可被下候、細事正五郎へ申付置申候、原良別荘も助市様御心配被下、手入候由、安心仕候、跡之処可然御下知御頼申上

候先御答見合御頼申上度草々如此、尚追々可申上候、恐々拝首、

四月十三日　　大久保一蔵

石原直左衛門（近昌）様

追而乱筆御免可被下候、おゑひ初成長之筈奉歓察候、（石原近昌妻）きち・（同近義妻）みねへもよろしく御伝可被下候、宿元之事たのむと御申聞置可被下候、

## ※　三九六　内田政風宛書翰

「内田政風殿　　大久保利通

高答　　」

貴墨敬読、陳ハ御乗船も愈来月八日と御内定之由被示聞趣承知仕候、鹿児嶋江降舟之義ハ未確と分兼候得共、別紙之通申出候付、為御心得差上候、直行之方も分次第ニハ為御知可申上候得共、何れにも来月初旬中ニハ鹿児嶋迄便宜ハ有之候ニハ無相違と存候付、八日之御乗船ニ而候得ハ御不都合ハ決而無之、其内御用意相成居候得ハ可然と愚考仕候、御回答旁草々如此、拝具、

四月廿七日　　利通

内田賢台下

## ※　三九七　岩倉具視宛書翰

「岩倉右大臣殿　　大久保利通

親展　　」

山形県・秋田県人民より

御巡行歎願之一条、御奏上之御都合相伺度尋候処、今日ハ風と失念仕候間、何れ明日中参上御伺申上度奉存候、明朝八時より大政官江出頭之約束も有之候付、七時比拝趨仕候而も可然や、御出立前御都合も可有之候付一寸以楮且御伺申上候、草々拝白、

五月十三日　　利通

岩倉公

## ※　三九八　内田政風・東郷平八郎宛書翰

鹿兒嶋琉球行郵船之義昨日御通知申上候後、猶又別紙之通申出候間、則為御知申上候、来月一日之名護や丸ハ頗ル時日切迫ニ候得共、三四日ハ有余有之候付、随分間ニ逢可申と愚考候、不取敢此旨草々如此候也、

四月廿八日　　利通

内田君

東郷君

別啓

過日ハ陪食之栄を蒙難有奉存候、則御礼参殿可仕之処、取紛失敬仕候、何れ近日参拝御礼可申上候得共、其内可然御執成被置被下度奉頼候也、

# 牧野伸顕関係文書

## ○ 三九九　黒田清隆宛書翰

⑥～1033

拝啓、別後愈以御堅固被成御座奉敬賀候、次ニ小子碌々相務居候間御降慮可被下候、爾来政府之景況も格別相変候義も無御座候得共、兼而御内話申上置候木・板両先生（木戸）（板垣）之問纏り兼候模様、既に木より発言寛急見込不相合、且大坂ニおひて約束之事も違背候旨をも陳述、此上は迚も前途之目的無之候付断然進退可致云々ヲ以板江申切、其当日拙者へ入来、前条之顚末被相咄、初発御相談之上可申入筈候得共、大坂にても粗御咄申上候通、兼而病体ニ有之、長ク奉職も難堪、且今日如此ニ至候而ハ別而失策ニ而後悔千万、寧ロ一昨年之儘ヲ御貫キ相成候方遙ニ増シト思ひ当り候、仍而可成政府之論ヲ寡（スクナ）クシ本ニ復し候方可然、断然決着前条之次第ニ及候間、不悪汲量致可呉云々承候、小子返答ニハ誠ニ以意外之事ヲ拝承仕候、抑小子之旨趣タルヤ一昨年来之内外多難、幸にして静謐ニ帰向之上は、廟堂一層公平正大之御趣意ヲ以既往ハ敢て不問、今日朝廷依頼セラルヘキ人物は御収攬一定不抜之根軸確立候様之素志ヲ以誰彼ヲ不論、第一先生か御立不被成候而ハ其運に難至と存、愚意建言之上下坂、聊赤心ヲ御談申上候末、終ニ御復職之運に至候、爾後小子ニおひては万事御依頼驥尾ニ就而今日迄行懸候次第、既に不容易御変革も被行、且四月十四日重大なる詔書も天下ニ布告セラレタルニ、今半途ニシテ先生御弱リ進退とか何とか御申出有之候而、将来之事如何成行可申欤、誰か跡ヲ引継可申欤、左様相成候得ハ国家之事今日限りと小子ニハ見据候外無之云々と十分手強ク論シ、其間応答長ケレハ略ス、約リ今日は先是にて置キ、猶又

愚考之次第ハ改而可申上候ト相別レ候、直ニ伊藤（伊藤博文）ニ十分責ヲ負セ弁論候処、伊藤もよほと心配、井上（井上馨）と相謀り必死尽力有之、井上より板江説キ伊藤より木江論候処、先ツ此節迄は何とか折合相付可申と見留申候、乍去今日迄は未結局ニ至ラス、大臣殿（三条実美・太政大臣）始別而御心配ニ而候、既に今日此に及候機は凡ソ相分り居候事故、別段可驚事にも無之候得共、何となく世上にも相響き、人心は大ニ疑惑を相生シ、誠に先生方ニ似合はぬ御所為気之毒千万ニ御座候、（左大臣島津久光）左印ハ不相変御連勤格別之御論も未出不申候、是も板と之工合十分ニ参らす、稍瓦解之様子ニ被察候、倒底児戯ニ属し候為体笑止千万何も御遠察可有之候、此節迄は別段御懸念被成候ほとの事も有之ましく候付、左様御承知被成度、しかし約ル処全を保チ候義六か舗と愚考仕候、右ニ付兼而安田子江御托置之由ニ而、此内電報之返詞も表面ヲ以同子江ハ申入置候処、右之次第粗漏洩之由にて頻に尋問ニ預り候得共、小子より前条之機密を相咄候事、乍不本意相調不申取繕ひ相答へ置候、如何にも不安心之様子、兼而閣下より遺托ヲ受居候付、跡更兎角申様之事有之候得ハ、閣下ニ対し申訳無之と甚心配之趣ニ付、左様ならハ小子より一封ヲ以大略之形行申遣候様可致と申入置候間、是又左様御承知可被下候、無申迄候得共小子微力之限リハ相尽し候付、閣下ニハ御職前之事御尽力速に御帰東被成度候、此旨即今之景況御報知申上置候、無御顧念其元之御職務御従事可被成候、追々漸寒ニ向可申候間御自愛専要所祈候、草々不宣、

九月十三日　　利通

黒田清隆雅兄

猶々当方各位無異、大山氏も此内帰東、鹿児島も殊之外静謐に而世上之噂とハ大ニ相違之由に御座候、西郷も毎日ほと出会別而元気之由ニ候、

## ○　四〇〇　㊨「黒田清隆宛別啓書翰」⑥—938

極密副啓

征蕃ノ義挙タル内外人民ノ保護上ニ出、蕃民ヲ化シテ人道ニ導キ、将来航海者ノ妨害ヲ除カントノ一大美意ニシテ、是我条理ノ撓屈セサル眼目ノ旨趣ナリ、此道

理ヲ有スルカ故ニ支那政府モ終ニ屈伏スルニ至リ、各国公使等ニ於テモ我ニ左袒スルノ情ヲ来セシナリ、故ニ此道理ハ不可失ノ至宝ニシテ益之ヲ貫徹セサルヘカラス、然ルニ彼ヨリ資給スルトコロノ五十万両（テール）ノ金額、将来如何ニカ使用シテ可ナランカ、此処分ニ依テ大ニ日本国ノ名誉ニ関係アレハ厚図画スルヲ要スヘシ、小子聊慮ルトコロノ旨趣ヲ左ニ掲ク、

一十万両（テール）ノ金額ハ難民撫恤ノ名目トイヘトモ、名ヲ仮リタルハ衆人ノ知ル処ナレハ、死者ノ家族ヘ相当ノ扶助金ヲ給与シ、難ヲ受資財ヲ奪ハ（レ脱カ）タルモノ等ヘ同断分配スヘシ、其余金ヲ以征台ノ将士死者ニ施シ、且功労アルモノニ酬ユルニハ不足ナカルヘシ、因テ十万両ノ額ハ其用ニ供シ可ナルヘシ、

一四十万両ノ額ハ　奏聞ノ上

宸断ヲ以テ受用セラレサル旨ヲ清国皇帝ヘ謝却アルヘシ、如何トナレハ到底我趣意人民ヲ保護シ、内ヲ恵、外ヲ恤ノ他ニ出テサレハ、建房道路ノ費モ亦之カ為ナリ、故ニ此額ヲ以テ支那政府我意ヲ意トシ我為ストコロヲ為シ、一蕃民開導ノ用航客ノ安寧ヲ護スルノ資ニ充テハ、

聖慮ニ於満足アラセ玉フハ疑フ可カラス、因テ此四十万両額ハ受用セラルヲ欲セサル処ナリ、

右英明ニ非サレハ之ヲ視ル事能ハス、大断ニ非レハ決スル事不能、幸ニ我

皇帝陛下英明絶倫ニ在シ、大量果断ノ

天資ヲ具セラレ候得ハ、若シ一ニ

宸断此ニ出テハ清国之カ為ニ気ヲ奪ハレ、各国之カ為ニ胆ヲ抜カルヘシ、

実ニ千載ノ美談古今ノ勝事ト謂ハサルヘケンヤ、曾テ我馬関ノ償金英・米・蘭江可払ノ残額アリ、当春政府断然之ヲ消却シテ、英国ノ貪心ヲ殆ント恥シメタリ、米国議院ニ於テ謝却ノ公論アリトイヘトモ、外各国ニ対シテ之ヲ実行スル事能ハス、然ルニ我国亜西亜ノ一小島ニシテ文明各国ノ未為サヽル処ヲ為シ近清国ノ疑心ヲ取リ、遠ク欧米ノ意表ニ出テハ、我国ノ盛名赫々トシ輝ヘシ、豈宇宙間ノ快事ナラサラ

ンヤ、剣ヲ提テ敵国ヲ退治セシヨリモ、此大断ニ於テハ其功・其利一層ノ高処ニ居ル可(衍カ)ヘシ、去ナカラ小子其任ヲ十分ニ尽ス事不能、反ツテ措大ノ事ヲ説テ之ヲ掩フニ似タレハ、他ニ向テ公言スヘカラサルノ情アリ、然トイヘトモ国権ノ上ヲ論シ利害ノ間ヲ謀リ候テモ、僅々タル四十万ノ額ニ万倍スヘシ、是眼前ノ益ニハアラサルナリ、

再本文ノ趣意ハ之ヲ行フトイヘトモ、西郷都督復命ノ上一言示サレシ上ナラテハ不可然候ニ付、ソレマテハ先御含置下サル可シ、

## ○ 四〇一 黒田清隆宛書翰 ⑥—937

拝啓益御安固被成御奉務奉敬賀候、陳は当方談判之都合意外荏苒折角玄武丸モ差立ラレ候得共、何分不任心底事ノミニテ、終ニ今日ニ推移心外之至ニ候、爾来ノ形行ハ公信ヲ以上申候ニ付別ニ不贅候、

一去ル五日晩景ニ至リ英公使来館、総理衙門ノ依頼ヲ受ケ五十万両之金額(テール)ヲ差出シ、証書相認ヘキ故御承知可被下哉、拙者ヨリ相伺呉トノコトニテ参上候、如何ノ御趣意ニ可有之哉トノ事ニテ、此返詞ハ実ニ両国幾万ノ生霊ノ命脈ニ係ル事ハ無論、我人民保護上ニ起リ義挙タル趣意ノ立否ニモ関スル大事ニテ、小子ニモ熟考ノ上一刀両断ヲ以公信上ノ通及独決候、尤至理至当ノ所分ト見据小臣一己ノ見ニテハ天地俯仰無恥トコロナリ、

一支那政府我征台ノ挙ヲシテ義務ト見認、是迄両国間ニ起リタル台地ニ関スル紛論今後取消シ、資銀五十万両ヲ差出スヘシトノ事ニ至リ候得ハ、十分彼ノ権利ハ殺クルトコロアツテ、我ノ権利ニ於テ聊モ傷カス、且我人民保護上ニ起リタル義挙ノ盛名ハ、宇内ニ対シ千載ニ亘リ磨滅ス可カラス、然レハ此上何ヲカ求ン、

一償金ノ論ニ至リ候テハ、固ヨリ要求スルハ十分我ニ道理アルトコロナリ、去ナカラ彼譲ルトコロアツテ我義務タルヲ証認シタル上、只金額ノ多寡ヲ以論ヲ破リ、両国ノ交際ヲ絶チ候ハ我本来ノ趣意ヲ失フニ似タリ、是小子名義ヲ重シトシテ他ヲ顧ミス断決スル所以ナリ、

一彼暴ニ出戦ヲ開候得ハ我戦ヲ以応スルコトハ、固ヨリ宸断以テ決セラル、処ナレハ一歩モ退クヘカラス、且戦ノ上ニ於テハ敢テ恐ル、ヘキナシ、然ルニ彼和好ヲ主トシ談判上ニ於テ未戦ノ意ヲ以テ口ヲ開クコトナシ是レ大ニ意アルトコロナリ、談判破裂ノマ、ニテハ戦ノ名義ナシ、唯公使謁帝ノ事ニ於テ其名アリトイヘトモ段々教師江モ調サセ候得共、公法上ニ於テ十分ナラストノ論ナリ、因テ小子ニモ甚困苦当惑シタル事ニ候、

一前条ノ大意ニテ両国ノ為後図ヲ慮リ、且道理ノ上ニ於テ疑可ラサルヲ信シ独断ニ及候間、其責ヲ受候コトハ甘ンスル所ナリ、

一前条ニ就テ条約書写ヲ以テ、今般玄武丸ヨリ福原大佐・岩村高俊・小牧昌業ヲ以報知仕

奏聞ノ御運相成、則退兵ノ

勅命ヲ下サレ度トノ趣ヲ上申イタシ候ニ付御尽力被下度奉願候、

一退兵ノ神速ヲ欲スル趣意ハ、両国和好ニ帰着シタル以上ハ飽迄信義ヲ示シ度事ニ愚考イタシ候、併シナカラ撤兵ト出金トノ先後ハ十分ニ相争ヒ、撫恤銀十万両ハ神速ニ相渡シ、四十万両ハ期限同日ニ相渡トノ事ニ決シ候故、十万両ヲ先ニ受取候得ハ我権利ハ相立候事ニ有之、此上ハ満足シテ一日片時モ早ク退兵相成候方、支那ニ対シテ信義ヲ厚クスルニ当リ、各国見テ以テ我義挙ノ義挙タルヲ感伏スルニ至ラン、随テ小子モ期日ニハ無相違退兵スル事ヲ支那政府ニ約シ、且英公使江ハ期限前ニ退兵スヘシト申放チシ故、若シ前条ノ運ニ至リ候得ハ小子面皮モ相立何ノ幸カ如之、

一退兵ノ

勅命ヲ西郷都督ニ下サレ、一艘ナリトモ速ニ出艦相成順次ニ船々相送ラレ可然ト存候、且此ニ希望スルトコロハ蓄地出征ノ将校・兵士、当五月以来櫛風沐雨艱難ヲ経功ヲ奏シタル事ニ付

勅使ヲ送ラレ其労ヲ慰シ、且支那ト和議調タル上ハ一日モ兵ヲ置カレ候事ハ、友誼ニ於テ

聖慮ニ背カセラル、訳ニ付、神速ニ引揚クヘシトノ趣ヲ伝ヘラレハ、将士モ感銘シテ凱陣スヘシ、然ラハ帰

国ノ上之ヲ御スルニ其術モ難カラサルベシ、
一小子上海ニ至リ金子受取ノ手順ヲ付、厦門ニ至リ河村中将ニ面晤シ、夫ヨリ蓄地ヲ経西郷都督ニ事情ヲ申述ン、撤兵ノ
降命次第速ニ退陣ノ事ヲ約束シ、然ル后帰　朝復
命ノ所存ニ候、全体神速ニ復　命スヘキハ勿論ニ候得共、千里隔絶ノ地兵士ノ未々ニ至リテハ、意外ノ齟齬ヲ生シ候モ難図、万々一左様ノ義出来候テハ第一
御旨趣ニ触レ候事ハ言ニ及ハス、小子使命ヲ全フセサルノ責亦免カルヘカラス、因テ復　命ニ汲々タラサル所以ノ素志ナリ、請察之、
一前条ノ事若シ全キヲ得ス、清国ト再ヒ和好ヲ破ルノコトニ至ラハ、小子何ノ面目アツテ天地ノ間ニ立ンヤ、
右
奏聞ノ上
叡慮ノ所在廟議所決ニテ、小子使シテ外ニ在レハ敢テ啄ヲ容ルヘキニアラス候得共、畢竟国ヲ忘レサル一片ノ衷情ヲ以テ黙スル能ハス、私書ヲ送致シテ貴下ニ呈ス、唯採択ニ任ス、匆々不尽、

明治七年十月卅日　　大久保利通
自清京

黒田清隆殿

## ○　四〇二　黒田清隆宛書翰

⑥—935

「□京　　清京
黒田清隆殿　　大久保利通
親斥　　」

益御安康御精務之段敬賀々々、小子談判之形行ハ追々御承知可被下、何分時日を遷シ候義心外千万ニ御座候、此節以公信申上候通ニ付、此両日之内ニハ成否相分可申候、未預知ス可らすトイヘトモ、可也ニハ纏リ相付候半カト心算イタシ候、兎角今一報御待可被下候、玄武丸天津江着、調所・松村当方江出京有之御托之貴翰接手拝読、御示諭之趣逐一拝承、毎々御懇篤之程感銘之至ニ堪ヘス奉万謝候、殊ニ玄武丸ハ彼是有益相成大幸之至ニ候、模様分次第善悪共同船ヲ以急報可及候○御気遣之趣調所より分テ承、成程御察之通云々モ有之候得共何モ御安心可被下

候○近来之処ニテハ我日本ノ趣意ヲ道理トスルノ論多ク相成、誠ニ為国家御同慶ニ候、英公使ハ三十余年在留支那癖アルト申位ノモノニ候処、近日ニ至リテハ日本ヲ道理ト申居候模様ナリ、ソレ故カ少シ支那モ折レ候形ニ有之候、

右御一礼ノミ早々如此、時下御愛護為国家御尽誠所祈候、拝白、

明治七年十月十九日　　大久保利通

黒田清隆様

猶々事遷延ニ従テハ紛論モ起リ、定テ政府御難渋可有之と推察候得共、是丈ケは十分御尽力無御動揺様所祈ニ候、末事ニ破レ候テハ甚遺憾之次第ニ候、当方百事尽キ候上は交戦ノ名義ハ必ラス有之候ニ付御含居可被下候、

## ○　四〇三　西郷隆盛宛書翰　⑨—1681

別啓仕候、得能より委曲其元情実承、彼是御尽力ヲ以先々要領之二・三事件無滞御運相成御同慶奉存候、就而ハ種々不容易御配慮之程奉親察候、軍艦之事も決而以奸策脱走之訳にハ有之間舗候間、自然御運も相付候事と奉存候、折角御左右奉待候、扨別紙

還幸之一条ハ大に所以も有之、畢竟太政官も被召移朝廷上旧政御一新之処、第一御着目之事候処、急々相運兼候次第も有之、殊に夏向相成候得ハ当分行在所之処中々御栖居被為調兼候間、今般之御左右を以一先還幸相成、早々坂地行在所・太政官、仮之御造立御取懸り被為在、御運可相成と之御内定ニ御座候、然処一応其許江往復之上ならてハ不可然と之論、其起ル処ハ慶喜恭順ハ虚にして水戸退隠之節も二千人位も引列下り候の、又ハ軍艦ヲ以奥羽之官軍を討の、摂海江差廻し候のと、色々異説を唱へ候処より御決着付兼候内情に御座候、是ハ軍艦脱走之説ヲ以表面ヲ以疑惑するの説と被察申候、私共愚考には最早要領ノ事ハ相運候間

還幸相成、早々跡御運之相付候処肝要ニ而、断然御促ニ

而可然相考申候へとも、於行在所一先御懸合之上於其元平定之御見据相立、更ニ御奏聞之上ト申論ニ相決候事ニ御座候、仍而其辺可然御洞察御答相成候様御取計被下度奉頼候、畢竟太政官被召移候事、機会相失シ今日ニ至リ候間、此上ハ還幸相成候而、断然浪華遷幸御運相付候御内評之事ニ御座候次第は、紙面ニ難尽候間何分ニも御勘考可被成下候、

一徳川相続之儀は徳川亀之助江被仰付可然と之論も有之候得共、一説ニ右被仰付候得ハ大久保・勝なとハ則退ケられ候訳ニ可立到と之訳も有之、実ニ不容易事件ニ而懸而事実も難相分、就而ハ慶喜ニ血統近キものを被立候方可然カ、又同人ニ而可然欤、情実ニ寄可然人体御見込も有之候ハヽ、早々御申越相成候様岩卿より御沙汰承知仕候、御勘考為御知可被下候、

一堀内蔵頭（堀直虎）恭順を立、割腹イタシ候始末、事実分兼候付御糺之上御申越可被下候、家督も願出有之候付右通之次第ニ候ハヽ、早々被　仰付忠義ヲ御旌揚相成度候得共、説のミ相聞候事ニ而若相違有之候而ハ不相済候間為念懸合いたし候様承知仕候付是亦御頼候、

右早々如此御座候、拝首、

四月廿三日　　大久保一藏

西郷吉之助様

## ○　四〇四　伊藤博文宛書翰

⑦—1385

謹啓

聖上益御機嫌克御同慶奉存候、台下ニも御別後愈御安固被成御座、鉄道開業式も無滞被為済候事と奉欣賀候、随而当地ニおひても外務省引続教導団兵営一棟焼失后、余ニ異条も無御座候、

一御出発前御内談申上候件々陸軍卿御示談有之事と存候然ルニ南海之近況愈狂涛を発シ候趣、既ニ別紙熊本県令より電報ニ依リ候得は、陸軍省之弾薬も強奪之様子、多分相違有之ましくと致想像候、此上は河村之報知ヲ以模様可相分候得共、何れにしても此節は破裂と見据へ候外無御座候、其情態を憶察スルニ、此度之暴挙ハ

必桐野已下斑々之輩ニおひて則決セシニ疑ナク、其証ハ追々近況を聞クニ、一月之下旬比ハ西郷は日當山江入湯致居、桐野宅江壮士輩昼夜ヲ分タス頻ニ相迫リ、西郷兼而外国と必事ヲ起スニ無相違候ニ付、其節ハ断然突出云々、桐野之ヲ評シテ其説古シト嘲笑セシトノ事モ有之候、是等ハ如何にも実情等敷候、十一月比混雑之源因ハ西郷江迫リ候節熊本・萩之挙動ニ依而決而不可動、乍去此上之時機ニ依

天朝之御危急と申場合ニ至ル欤、且熊本・萩之暴徒初ニ我ニ依頼セシヲ是ヲ諾セス、彼必懇を結ニ無相違候付、或は我ニ報センモ図可カラス、若左様之時宜ニ臨ミ候得ハ十分応セサル可カラサレハ、其用意はナクテ不叶と之一言ニ而、我も〳〵と騒キ立、終不可制之勢ニ立至リ候由ニ候、一言一句ヲ不慎ハ其罪不可許候得共、其底意を推シ候得ハ、兼而御承知有之通之気質故、丁寧反覆説諭スル流議ニ無之、一握ニ方向ヲ捻チ廻ハサセ候、例之方便上ニ出候訳ニ而、決而無名之軽挙をヤラカス趣意ニ無之と信用仕候、追々御咄も申上候通、昨年来之行懸リ止ニ止マレヌ形情ニ陥リ、終ニ今日之事端を発クニ至候義と存候、乍去此節之端緒よりして若干戈と相成候得ハ、名もナク義もナク実ニ天下後世中外ニ対し而も、一辞柄之以テ言訳も不相立次第、実曲直分明正々堂々其罪を鳴らし鼓ヲ打テ之ヲ討セハ、誰カ之ヲ間然スルモノアランヤ、就而は此節事端を此事ニ発キしハ誠ニ　朝廷不幸之幸と窃ニ心中ニハ笑ヲ生候位に有之候、前条次第ニ候得ハ西郷ニおひてハ此一挙ニ付而ハ万不同意、縦令一死ヲ以スルトモ、不得止雷同して江藤・前原如キ之同轍ニハ決而出テ申ましく候、万々一モ是迄之名節砕テ終身ヲ誤リ候様之義有之候得ハ、サリトハ残念千万ニ候得共、実不得止それまで之事ニ断念仕外無御座候、

一仮令西郷不同意ニ而説諭を加ユルニシテモ倒底此度は破れニ無相違候付、変ニ応スル之手順相立候義最肝要ニ有之候、西郷ハ斃ルヽニモセヨ、関セサルニモセヨ、同県ニ事有ル日ニハ全国其影響を及ホシ、一時天下は瓦解と見ルヨリ外ナシ、宛然戊辰東北戦争之時分ニ異

ナラサル可シ、然レハ大ニ廟謨を確定シ、必勝之神算ヲ計画シ、其順序ノ手配・追討之発令・陸海軍出征配賦預しめ期定スル処無之而ハ、他之一揆暴徒とハ同日之論ニアラス、一機ヲ誤リ候得ハ言フモ忌々敷候得共、皇国之安危存亡ニ可関ハ必然と存候、

一前条ニ就而は固より陸海軍ニおひてハ、兼而用意全備之事ニハ可有之候得共、一応政府相纏リ御評議無之候而ハ、東西懸而往復書通等ニ而意脈貫通致候事ニ無御座候、仍而乍恐

主上御神拝式来ル十一日之由候得ハ、右被為済次第ニハ早々御東下被為在候様御内定有之度祈望仕候、最台下ニハ兼而開業式相済次第ニハ帰東之筈ニ御内達も有之候事故、不日御発程ニ有之と存候、此節行幸ハ御神拝之御旨趣ニ付、右被為終候得ハ其余之事は先御差置候而、何も御不都合は被為在ましく奉存候、鹿児島県之事は未公然タル事ニモ無之、且是かため俄ニ還幸と申も如何ニ候得ハ、現場御変革引続行幸ニ而諸事大事件も是かため御決定相成兼候事も不少候間、表面ハ其辺之廉を以御達ニ而可然欤、最其為土方御差立候事ニ有之候付、右等ハ如何様共御都合次第ニ而相済候事ニ可有之候、兎も角右ニ御治定之処御配慮被下度御依頼申上候、自ら右府公より太政大臣殿へ公然之御懸合ハ被為在候付、前条ハ下官一分ヲ以申上候事ニ候間左様御聞取可被下候、

一長崎江軍艦被差廻候義如何ニ候哉、今日ニおひて尤不可欠と存候、乍去春日艦出発ニ付而ハ供奉軍艦之御都合も有之如何と奉存候、其辺は河村江御打合セモ有之候御事と相察候付、定而何とか御達も可有之、何れ速ニ還幸ニ被為成候得ハ、別段軍艦相廻リ候様無之而ハ相済ましく候、摂海ハ第一ニ空虚ニナシ候事は、此節柄御大事ニ可有之候、

一熊本鎮台司令長官之事は何様之都合ニ候や、此比承候得ハ大山よりも何とか陸軍卿迄申遣たる由、同人ハ先当分通被差置候方宜クと愚考仕候、乍去自ら陸軍卿之賢考も有之筈と存候、谷干城も此節は随分はまり込候

模様之由、若ヤ今度端ヲ開キ候事ニ相成候得ハ、将官ハ九州江ハ出張無之而ハ相済ましく候、谷相はまり候得ハ此際ニ御繰替も同人之名挙ニも可相関候付、宜クと見込相付候得ハ其まゝ被置候而も可然、未然なれハ兎も角事此ニ及候上ハ何様ニ可有之哉、猶陸軍卿江御示談可被下候、

一河村は如何様之手筈ニ御示談有之候哉、何れ神速　行在所へ報知申上候様御含メも有之候筈と相察候、兎も角此模様ニ而否相分候事ニ有之候、下官ニモ為念一昨朝神戸迄電報差出置候、相達候否ハ不相分候、其趣ハ再度之報知彼レ愈決心と相見得候、此上ハ益彼ニ曲ヲ与ユルヲ我利トス、少も彼レノ暴ハ顧ミス県庁へ強ク責め付、西郷江面会ヲ以テ第一とスヘシ、事破ルト見居ヘハ速ニ長崎江引上ケ急ニ報知スヘシ云々と申送り置候、為御含申上置候、何卒彼レノ曲を責め十分屈辱セしめ、彼内輪ニおひても処分ヲ付此一段落は謝罪為致候上策ニ為出度、千祈仕居候得共、何分勢ひそこニ至り兼候欤と想像仕居候、模様次第此上之手順は警察之手ヲ断然差出候心得ニ候、乍去是ハ御承知之通弾薬之中ニ火を投スルカ如キ今日之行懸故甚関心仕候付、今一左右次第其時宜ヲ見而差出可申候、他県ニ候得ハ、取も直さす警察ハ差出不申候而不相済候得共、是ハ下官之所見有之候付、其段ハ御聞置被遣度候、

右申上度草々如此、余ハ何も土方より御直聞被下度候、匆々敬白、

二月七日　　利通

伊藤賢台下

再伸、大臣公始木戸君・山縣君へ宜御伝被下度奉願候、何も心事御推恕所仰也、

## ○　四〇五　伊藤博文宛書翰　⑨—1713

尊楮拝読、爾後御安祥、今日自神戸御帰阪之由奉拝賀候、扨明日午前御入来可被下旨奉畏候、何も差支無御座候付御待可申上候、此旨拝答而已早々拝首、

二月三日　　利通

博文様

○　四〇六　伊藤博文宛書翰　⑨—1714

尚々明朝ハ九字ニ参上可仕候、乍去若御急キ之御事候得ハ八字比参上仕候而も宜ク御座候、何分御都合為御知被下度奉願候、

只今帰坂仕候処御投翰拝読被示聞趣承知仕候、扨早速御面会可被下木戸君も御滞坂之由甚以御気之毒奉存候、今晩ハ遅方相成候付何れ明朝参堂仕可申候付、御待被下度此旨御答迄早々、何も拝顔御断可申上候、拝首、

二月八日　甲東

博文殿

○　四〇七　伊藤博文宛書翰　⑦—1393

明治丸之貴墨敬読、愈御壮固被成御座奉敬賀候、陳は西隅之模様爾後確報無之候得共、昨夜別紙熊本県令及旧宮崎県裁判所支庁判事補より司法卿江之電報有之、事如此ニ及候得ハ、既ニ開端之兆と被察候、熊本之方ハ為念谷干城江大山より尋越候処、頻ニ押寄スル之風説有之候得共、未確報無之趣ニ付猶追々相分可申候、警部を捕縛実事ニ候得ハ最早事尽候次第ニ有之候、愈河村(純義)・林之様(友幸)子如何と関心仕候、兎も角両日中ニハ否確報可有之と伸首仕候、前条之次第付而ハ倒底保無事候事は六か舗必異変ニ及可申、仍而一報次第愈手切レニ及候ハヽ、直様出京之心得ニ有之候間、左様御承知可被下候、

右御回答旁如此草々拝白、

二月十二日　利通

伊藤参議殿

再伸、匆々際、細事相認兼候、何も不日ニ御面会仕候事ニ相成可申候、

明治丸より渋谷彦助外ニ両三人鹿児島江差遣候、同船ハ神戸迄ニ可有之付、三邦丸を直ニ出帆為致候筈ニ付左様御承知可被下候、最早間ニ逢兼候も難図候得共、可成分離之手段を尽シ度差遣申候、

○　四〇八　伊藤博文宛書翰　⑦—1398

唯今花房(義質)入来ニ而鹿児島行之義承候、就而は同人当地より出発候得は、旁旨趣も相貫都合可然と存候付、長崎之

方ハ巡査五百名出張、海陸軍も十分行届居候付、何も懸念無御座候間、同人を鹿児島江差遣候方可然旨、外務卿江電信ヲ以申遣候而ハいかゝ、於御同意ハ御差出被下度此旨草々、拝白、

二月廿四日　　利通

伊藤殿

尚々同県は旧幕人ナトニテハいけ不申候、

## ○　四〇九　伊藤博文宛書翰　㋐—1402

船之事ハ過刻申上候通、品川丸入港致居候付、右ニ振替へ候得ハ格別之遅速も有之ましく候付、何も差支無之と存候、乍去尊台も態々御下坂鳥尾と御示談有之候上之事ニ而、太平・赤龍二艘ヲ他ニ用ユルヲ拒候辞柄ニ而、如此取計有之候而ハ甚以意外之事ニ存候、乍去唯今久留米之電報ニ由レハ、今日之戦争官軍不利之疑故、鳥尾(小弥田)も懸念より起り候事ニ候半、無左候而は、俄ニ神戸ニ移転と申事も有之ましく候、最今日戦争ハ未野津(鎮雄)・三好(重臣)之兵ハ接サル先キと相見得候付、左而已懸念致候程之事ニ有之ましく愚考仕候、品川丸江振替候事ハ既ニ電報差出置候、山田へハ同断申遣置候付御安心有之度候、此旨草々拝具、

二月廿六日　　利通

伊藤殿

## ○　四一〇　伊藤博文宛書翰　㋐—1401

別紙唯今到来、何様之報知有之候哉、未野津・三好之兵接戦之義ハ、此方へ申参らす甚関心仕候、既ニ博多ニアル三浦之人数も出発之都合ニ御談置之由も承居、右之後備之積りニモ可有之哉、

船ハ幸品川丸(八百人乗)神戸江入港之由届相成居、則用意を命シ、何時出発相調候ヤを急報サセ候、

勅使ハ無御抱出帆ニ而、長崎ニ而御待合セニ而、可然石井へ申含遣候、兵隊ハ右品川丸明日は出帆可相調候付、出来次第差廻可然候、此旨草々拝白、

二月廿六日　　利通

伊藤殿

○ **四一一** 伊藤博文宛書翰 ⑦—1403

本文之通取究候得ハ、直ニ勅使出帆相成、伊東少将へ通置度候、
唯今山田少将着、鳥尾ハ出京無之、大山は直ニ博多ニ廻り候趣、山田と鳥尾談候趣ニ而ハ、何分陸兵を分ケ候事六か舗候付、海軍を廻、製造所丈之処分致候方可然と之趣ニ候、しかし折角
勅使も出発相成候事にも有之、其まゝ御止も残念ニ存候間、巡査而已護衛相付ケ、軍艦二艘ニ而試ニ被差遣、若勅使之事不相達時宜ナル時ハ、製造所之処分をナストきめ候而ハいかゝ可有之哉、猶又鳥尾上京調候哉、唯今電報ヲ以尋越候得共、同人出京候而も所詮出兵ハ六か舗と被存候、鳥尾より何分返詞ハ可有之候得共、其内右申上置度如此候也、

二月廿七日　利通

伊藤殿

○ **四一二** 伊藤博文宛書翰 ⑧—1435

別紙三條殿より御廻有之付差上候、乍毎英公使御世話過キハ面働之事ニ候、扨林海軍大佐昨晩参候付直談致候処、町田大主計并ニ東艦長沢某相残居候付、同人等江御用有之節ハ、申聞呉と之事ニ候、猶委曲ハ面上可申上此旨草々、拝具、

三月廿七日　利通

伊藤高台

○ **四一三** 松田道之宛書翰 ⑧—1514

松方太輔今日昼迄帰京候様電報差出置候付、今日午後早々より御入来被下候様仕度候、
鹿児島江出張京都府始、判任人名相揃候付、明日神戸着港名護丸より差立候筈に相決、其旨大坂府其外県々江電報差出置候、昨日差上候新撰巡査解放給与取調之義、陸軍壮兵解放にも関係、格別齟齬無之様いたし度趣承候付、猶打合せ可致と西郷へ談置候付、左様御承知有之度、猶委細ハ後刻可申上候、

右草々如此候也、

七月五日　　利通

松田殿

尚々暗号ニ而少々分兼候得共、岡部伊三郎一人之事と被存候、

昨夜電報ヲ以岡部伊三郎出京云々義御申越ニ付、早速より探索為致候得共相分兼候、就而同人生国・年輩・容貌等、且西京江何用ニ而、何方へ向ケ参候模様ハ相分不申候ヤ、電報ヲ以御取合セ候得共、猶為念一人下坂可致愼村江示談候付、参次第諸事御申含有之度候、昨夜着手之都合ハいかゝニ候ヤ、此旨草々如此候也、

六月廿五日　　利通

松田大書記官殿

## ○　四一四　松田道之宛書翰　⑧—1599

楠元知事より上申書一通、

山口県権令心得、木梨より電報一通、

長崎県河内より同一通、

地方会議（官脱カ）日誌一冊、

頒暦商社長林立守より一通、

右差廻候間、宜御取計有之度、長崎河内より之電報昨日差出候心得之処、失念延引相成居候付、速ニ前島少輔江御談有之度候、地方官会議日誌ハ活版相成居候付、外にも可有之と存候有之候ハヽ御廻被下度相願候、此旨草々申進候也、

十二月四日　　利通

松田殿

## ○　四一五　松田道之宛書翰　⑧—1506

別紙遺失物取扱規則第四条改正之義、法制局ニ而議案之通取調、下官方へ廻議相成候、右ハ兼而御論も有之、法制局ニ而御協議相成たる事ニ候ヤ、如何と存候付、御廻申上候間未御談無之事ニ候ハヽ、一応局長江御陳述有之而ハ如何、尤別冊ハ下官方へ廻議ニ相廻候付、若局長請取ニ相成候ハヽ、其趣大史江御通置被下度御頼申上候、

## ○　四一六　松田道之宛書翰　⑧—1598

此旨草々如此候也、

十二月三日　　利通

松田様

再伸、高知県之事速ニ取究不申候而ハ、時機を失可申と存候付、明日午後か明後朝之間ニ御面晤申上度、何分御都合為御知可被下候、兎も角明日前島少輔と御打合セ可被下候、

○　**四一七**　松田道之宛書翰　⑦—1386

別紙之通北島・木梨より電報到来候、伊藤参議今日西京より神戸江出港之筈ニ付、見込ハ同人江申置、兎も角帰県有之候様、至急電報ヲ以北島江返詞御差出可被下候、此旨草々如此候也、

二月八日　　利通

松田君

○　**四一八**　小松帯刀・伊地知貞馨・吉井友実宛書翰　③—292

尚御揃御安祥被成御滞坂奉恐賀候、然は長州江御示談相成候土地人民御返上被成度御建言一条、黒田江御委任之旨、下坂之時分拝承仕候付及尋問候処、別紙之通返詞参候而甚危疑仕候次第、全体国家之大事件、今日之大急務如此不連続之事にて、

御趣意通徹仕候事思も寄不申、如何様之齟齬にて可有御座や、若夫形御帰国相成候ハヽ、小生ニおひて尽力ハ可仕候得共、是迄之手順ハ凡而相絶可申、左候而ハ御国論之御趣意相立兼候場も可有之と苦心仕候、最長州ニ対候而も御信誼立兼候半、兎も角も迂闊千万之事にて別而当惑仕候間、早々御返詞被成下候様奉願候○横井横死之事件も未明白ならす候得共、追々と手懸りも出来申候間自然相分り可申候、段々連及も有之模様にて、所謂攘夷社中と相見得申候、一変動以来頃日誠ニ衆説紛々煽惑いたし候筋ニ聞、彼云横井一人ニ止らす外ニ参与中除カスンハナラヌ者モ有之と、後藤辺尤評を受、是ハ内輪ヨリ堺一条之復仇ヲヤルナト、頻に申唱へ候由、同人所労にて引入大坂府兵ヲ警衛セシムル由、当時岩下家モ引続而不

参、福岡一人是モ別而恐ヲナシ候模様也、即今之処
朝廷根軸一層屹立不可抜之御威権相立不申候而は不相済
と苦心之折、却而前条之勢鼻息ヲ潜メ候姿ニテ、何共慨
歎切歯ニ堪不申候、刑法官ナト不可謂之次第有之候、此
機会ヲ以　朝廷ヲ動シ立テ候種類モ亦不少、実ニ危殆之
有様ニ御座候、又云、
御再幸之事必ナラス遷都之
御趣意ナラン是何之意ソヤト、就テ思惟スルニ、此秋ニ
至リ寸毫御動揺之機相見得候ハヽ、終ニ天下生殺与奪之
権草莽之手ニ帰シ候様成行、果ハ土崩ニ至候外無御座候、
加之其地失策之条々ヲ始メ当地局々之処、凡而大弊ヲ生
セサルハナク、是以断然御変革ナクテ相済不申と相考候、
然ルニ参与中ヲ始其手ハ不揃、木戸ニモ東京之方難迦趣
申来、是非可替之人物御差下シ之上ナラテハ、上京為致
がたしと東久世公御懸合有之候、条公にハ鳥羽江御上陸
にて、来ル十三日御帰京之由候得ハ、副島随従に候間大
ニ力を得候得共、小生既ニ御示談申上候進退之処先思止
り申候、実ハ黒田より段々承候次第も有之中々御大事と
相考、乍不及是非一応なりとも帰国仕度決心にて岩輔相
公江詳細懇願仕候処、左様之訳なれハ暫時都合ヲ以御許
容可相成旨承知仕候処、其后横井一条出来候而前条之動
揺ニ立至、今日一歩ヲ退候而は甚本志ニモ相反シ、且難
ヲ避ルニモ相当候事故、帰国之義先御断申上候段追而申
上置候次第御座候、百尺竿頭進一歩之機関只此時に可有
之と愚考仕候、御国之儀諸先生何卒御尽力被下候様奉万
祷候、尚模様次第にハ帰国可仕候、坂地失策之条々ハ後
藤江忠告し、断然取止させ候含に御座候、扨今日之難一
昨年来之苦ニ競候得は、難といふニ足サルベシ、非常之
断アルヲ以非常之事を成シ候訳、豈尋常ヲ以如此大功業
出来可申哉、然ハ今日之事大道ニ車輪ヲ転スルヨリ猶安
シト云ツテ可ナランカ、
右申上度草々如此御座候、不当之過言ハ御許容所仰
候、頓首多罪、

正月十日　　大久保一蔵

玄蕃頭様
（伊地知貞馨）
壮之丞様

幸輔様（吉井友実）

尚々乍憚御帰国之上桂太夫江可然御伝被下候様奉願候、小子帰国之儀御書面ニ而承知仕候得とも、本文之形行不得止候付、是亦御伝被下度奉祈候、

西入道江よろしく御願申上候、

## ○ 四一九 岩倉具視宛書翰 ⑤—719

尊墨敬読仕候、然は今日参議四名出頭、御評議之形行早速御示諭被下委曲拝承仕候、赤坂之方も徳卿御紙面之趣ニ候得ハ、必念遣有之ましく、先々右之御都合ニ候得ハ格別之事も有御座間舗、乍去明朝迄之内ニ拝謁を願御迫り申上候、輩も可有之相察候間申上も恐入候得共、益御貫徹被下候処希望仕候、兎角明日御参朝相成候処ニ而、弥模様分レ可申候、就而ハ世上人心動揺も有之、速に夫々人撰御登用云々御尤奉存候、別紙一覧仕候、人撰之儀は実に容易ニ無之、昨夜も申上候通諸省卿参議兼帯ニ而候得ハ、子細も無御座候得共、従前之通参議三四名御抜擢之事候得ハ、公平至当、諸省も安心いたし候様無之而ハ、亦々物議を起候而ハ実に相済不申候、依而愚考ニハ寧ロ諸省卿参議になして仕舞候方可然欤ノ旨趣に御座候、固より事を急き候而ハ誠ニ不宜、此節は是非軽挙無之様と之気遣ハ小臣も持論ニ御座候得共、決而急ナルヲ好ニハアラス、今日実務上よりして不得止此内より内慮仕候、乍去強而難申上候付、猶又此一条は篤と御熟慮被為在度千祈万祷仕候、且又変革云々之御布告案ハ一時人心を治ルノ御旨趣ニ而可然と奉存候得共、御変革ハ是非無之而ハ相済申ましく候、勿論今般之形勢にてハ御変革を疑惑スルハ抑二・三に落チ、是にハ格別之事も無之、過日来朝鮮事件大臣殿御急病にて人心動揺いたし候付、何れへなり片付候得ハ凡安堵も付可申候付、変革云々ハ別段御布告なくてもよろしくハ無之哉、諸省長官江程克御含メ相成候位之事欤と奉存候、兎も角此度人心之疑惑ハいたし方無之と奉存候、先尊酬而已如此御座候、明朝迄之内一応拝接旁奉申上儀も有之、今晩七字後参上之心得に御座候、頓首百拝、

十月廿二日　　利通

具視公閣下

「右大臣殿　　利通
拝復
封　　」

○　四二〇　岩倉具視宛書翰　⑤—727

又

昨夜遅方帰宅仕候付、拝報延引仕御高恕奉仰候、
御前被為召候事ハ可成速なる方御宜敷と奉存候、左
候ハ例刻　参朝仕候、
尊楮拝読仕候、然は被示聞趣逐一拝承仕候、木戸も異存
無之、勝も明日より出仕可仕と之事ニ候由、誠に安心仕
候、将又今朝鳥渡申上候参議一同
御前江被為召、盛発憤励仕候様
御懇命有之、陪食ニ而も被仰付候ハ、御宜舗ハ有御座ま
しくや、此一機会にて英雄之心を御収攬被為遊候事、実
に御肝要と愚考仕候、御宅江も被召候御口気も有之、右
御前終而次に御催有之候ハ、、順序も相立大に徹底可仕
候間、存付之儘申上候、
御沙汰振ハ厚御熟考可被為在候、尚御請旁草々如此御座
候、頓首百拝、

十月廿七日朝　　利通

具視公閣下

尚々寺島出仕候ハ、樺太事件御評議肝要と奉存候、
右曲直談判之事ハ是非前議之通ならてハ、小子にお
ひては全信義を失、面皮無御座候、此段乍序申上置
候、

「右大臣殿　　利通
拝首
封　　」

※　四二一　前島密宛書翰

別紙唯今千坂より到来候付、則御廻申上候、暴徒鎮定ニ
付招集之士族不体裁之趣相見え候、右ハ今朝松方入来候

付、東京巡査着候ハヽ、解放有之候方ニ、県官并ニ千坂江御申越有之度旨御伝頼入置候付、御承知之上御仕出シ被下候事と存候、此旨草々如此候也、

十二月十三日午後九時三十五分　利通

前島少輔殿

## ○　四二二　伊地知貞馨宛書翰　①—16

一翰呈上仕候、追日寒気相向候処、愈以御安泰被成御精務奉拝賀候、次ニ小生無異毎勤仕候間、乍憚御安慮可被下候、其元御都合如何ニ御座候や、もはや御一左右到来之時分と折角御吉左右奉待事ニ御座候、両度急飛脚被差立申候間疾ニ相達、御趣意通旁御奔走周旋被成下候筈、実以御難問之御義ニ奉親察候、乍併最初より御任之事ニ而私共ニ至り安心仕居候、其元形勢追々承申候処、愈急迫之時宜ニ相成候由、日下首尾克着ニ而尚亦現事承候得は、長藩上下振起之次第感伏仕次第ニ御座候、彼是模様御賢考相違之向も有之、何れ之筋にても易図場合も可被為在、実ニ機会ニ奉存候、仙臺御参府御免・肥後姫君国御暇なとの大かた賄賂ニ而相運ひ候段相聞得、左候得ハ御参府一条之事も与程被成安キ場も可有之奉存候、於御当地も日々御盛大之御処置に相成、白石一条なとも願意よりも十分相運ひ、三木も掛りニ而出関被　仰付候、御軍役方も大抵地盤相居候向ニ相成、其余少長之次第ハ紙面に難尽何も御察可被下候、当分ニ而も御左右相待一扁に御座候、未中山・岸良両士之一左右も無之、もふ疾着之時分御座候得共、如何様長舟中欤、不遠何分相分可申候、委曲申上度奉存候得共、別而多用ニ而得不申上候、詰所ニ而草卒之文面御推読可被下候、敬白頓首、

十二月五日　大久保正助

堀次郎様

## ※　四二三　（宛先不明）

三郎様益御機嫌克今日七ッ時京都二本松御邸へ被遊御光着恐悦御同慶奉存候、追々　御中途迄御問合被成下逐一承知いたし候、御道中鳥渡之寸暇無之、一々御返詞

も不申上不行届之至御座候、其地辺も長邸一条等彼是御配慮之筈御推察申上候、就右御処置之義云々之御趣意御尤千万、何れ之筋天下を禦するにハ寛宥仁恕之大綱を張而、一掌中に打丸め候様之気宇に無之候而ハ、決而大業成就出来候ものニ有之ましく、古より創業之相調候中興之主ハ、時此一気宇ニ止り可申候、自ら御趣意十分被為立申候間、必御懸念被成ましく候、

## ○ 四二四　伊地知貞馨宛書翰

①—21

「堀小太郎様　　大久保一蔵
貴答　　」

今朝は貴翰難有拝見、御沙汰之通昨夜より之潤雨ニ而心持清涼、殊に

一橋公愈昨日差向御請相成、先ッ〳〵御互ニ奉大慶候、越之村田(氏寿)如何様之模様に御座候や承度、且亦土佐一条ニ付御口合申上度義も御座候間、明日は御出殿被為在度奉願候、此旨御答旁奉得御意候、以上、

七月七日

追而大原様御方御太儀奉存候、明日は御国元江急飛脚被差上候間為御知申上候、

## ○ 四二五　伊地知貞馨宛書翰

①—113

一翰拝呈厳寒之砌弥以御安祥被成御精務恐悦奉存候、随而僕ニも滞坂無事相勤候間、乍憚御降慮可被成下候、爾后長崎江亦々御出懸初終御奔走御太儀奉存候、扨御調上申上候品々今度御差送り被下、別而難有慥に落手万々御礼申上候、度々御投翰ニも預り難有拝誦仕候、小太夫(小松帯刀)等御着後之模様ハ奈幸士(奈良原繁)等被差下候間御直聞可被下候、僕ニも腫物ニ而暫時ハ難儀いたし候へ共最早よろしく御座候、京地之事ハ委曲情実も達不申候、即今之姿ニ而ハ何も見留付不申候、異舶摂海来港之事も、何れ来春共に相成可申模様欤ト被察申候、華城茂修補等有之、城代邸へ異人休息所之ため段々普請も有之由ニ被聞申候、各国呼寄之事ハ深意も可有之候、別而盛大ニやり立候向に御座候、幕も内輪改革海陸軍手当等ハ、非常ニ手ヲ付候次第

ニ而、兵庫開港甘ク幕よりやり付各夷結合候日にハ、詮方ハ有御座間敷と管見いたし候事ニ御座候、先は来翰之御礼旁乍麁毫如此御座候、頓首百拝、

十二月四日　　大久保一蔵

伊地知壮之丞様
侍史

追而御礼として何か差上度奉存候へ共、此節得不差下追而差上可申候、

## ○ 四二六　伊地知貞馨・市来政清・岸良兼養宛書翰　①—90

御翰相達難有拝見、寒気之砌御揃愈御安康被成御精務奉恐悦候、随而僕碌々相勤申候間、乍略義御降慮可被下候、御地混雑一条も、御再糺之上明白之御処置相成候段、細々被示仰聞先々安心仕候、其后佐二右衛門殿（岩下方平）・幸輔殿（吉井）下候間、程克折合も付候半、実ニ如此大事之節国基動候而は万事難成事ハ不及言、仰願ハ大志ヲ確定公平至当ヲ旨として、国家ニ尽度頻ニ所冀ニ御座候、御当地之形体も別段申上候程之事も無御座、愈幕府独木辺（一橋慶喜）之処処置を失進退究し、一向薩ヲ抱込候手段専務ト被察申候、永井主（尚志）水正於藝州宍戸談判相済、別而穏之向ニ被聞申候へ共、未明証を得不申候、兎角不遠、結局之模様可相分事と相考申候、兵庫開港一条於關東取返し談判六か舗、亦々摂海廻船之模様も有之由ニ御座候、若其期ニ及候ハヽ、十分之尽力不致候而は難相済、幾重ニも危難之境ニ相臨候事ニ御座候、此上は於我藩ハ益至細之筋ヲ著明ニし、名義ヲ正シ候外無御座、迚も即今之形勢ニ而調和も出来候訳ニ無御座候、懸隔候而ハ情実決而相達不申事のミ可有之奉存候、何御了察可被下候、委事ハ西郷より表通問合相成間態と文略仕候、各様為国家御厭御尽力呉々奉祈上候、先々御答且御安否御尋申上度如此御座候、頓首、

十二月六日　　大久保一蔵

伊地知壮之丞（貞馨）様
市來六左衛門（政清）様
岸良七之丞（兼養）様

追而御連名ニ而甚麁略奉存候へ共御宥恕可被下候、

○　四二七　伊地知貞馨宛書翰　①—15

一筆致啓達候、追日微寒相向候処、疾ニ御安着御精務被成御座候半、恐悦之至奉存候、次ニ小生無異毎勤仕候間、乍憚御安意可被下候、其元形行如何之御都合御座候や、不遠御吉左右も可有之折角奉待候、去月廿四日去ル十三四日比両度急飛脚被差立候間、追々相達候半と奉存候、段々御模様も相変何共難有、御互ニ為天下国家大慶至極無此上、就而は其元之御周旋は追々之御趣意に基キ、是非御成就之偏ニ御頼申上候、廿四日より急飛脚ニ及御懸合候一奇策相運ひ申候得は、別而大幸に奉存候、何分ニも此一挙に大事之成否判然相分候機会可有御座候、自然岸良士出府ニも相成候ハヽ、今一ツ策も替り御尽力不被下候而ハ相済間舗候間、一盃之御籌画万々奉祈願候、扨此節田中太郎左衛門殿出立ニ付、於其元柴田藤五郎江云々手数相施度、乍併御上之御都合如何之事候や、もし御不都合ニ相成事共ニ候ハヽ、取止可致、小生義及相談候間、何分存慮承度と之事ニ御座候、依之小生返答いたし候には幸堀出府中之事ニ候間、御趣意之程篤と御相談、堀考次第ニ御手数相成候而可然、尤其趣書面を以申越置候と之処ニ而申置候、自然御引合可致候間、何分思召を以宜舗様御諭置被下度奉頼候、亦御仕ひ場も可有之と存上候間、旁御賢慮次第御取計可被下候、其後格別相変候義も無御座候、上之処愈動キ不申候、折角諸事地盤相居候処専要と、尽力一盃周旋之時宜御座候、一々何も難申上御親察可被下候、今日出立ニ付殿中ニ而草卒之文面、且亦態と細事不申上候間御推読可被下候、要用迄草々如此頓首敬白、

十一月十八日　　大久保正助

堀次郎様

○　四二八　岩倉具視宛書翰　⑤—776

謹読仕候、木戸入来、御長談被為在候処、未御決答に至らす、猶早春御示談と申事に相成候趣被示聞奉畏候、此上御高配被為在何とか判然たる究り相付度祈望仕候、昨日伊藤之示談も洞徹致兼候趣に承候、何も来陽委曲拝承可仕候、拝復迄草々如此御座候、謹白、

十二月卅一日　　利通

岩倉殿

尚々御内儀より

思食ニ而御肴御拝領之由に而、御分与被下候段難有拝受仕候、何も参上可奉謝候也、

「岩倉殿　　利通
御請
封　　」

○　**四二九**　岩倉具視宛書翰　⑥—1576

御書敬読仕候、益御安祥被為成御座奉大賀候、陳下官唯今帰宅仕候、左様御承知可被成下候、過日愚考申上置候件々、則三條公御示談之上、夫々御内定相成候趣、縷々御示之旨了承仕候、　建宮御参内ニ就而ハ、三木一同御召之事に御運、無此上御都合ニ而安心仕候、尤宮内卿よりも御召之達承知仕候、右御届御請相混、草々如此御座候、余明日参内之上に可申上候、拝白、

十月廿三日　　利通

岩倉公

「封
岩倉右大臣殿　　大久保利通
至急　　」

○　**四三〇**　岩倉具視宛書翰　⑤—809

昨日は　賜書敬読仕候、猶条公江御談合に而被為示聞趣逐一了承仕候、其後も反覆熟慮仕候に、今日之危殆実に寝食も不歩、愚不肖也とといえとも、　御旨趣確立不可犯之御憤発さえ被為在候得は、水火も敢而辟さる之決心ニ而、固より一言可申上様無之、乍去動もすれは、昨是今非（ママ）之御容子なきにしもあらす、殊に一昨夜来は怒髪衝冠之慨歎頗ル相生シ、前人は勿論後人に対しても面皮無之と、乍残念切迫唯々微軀之足らさるを恨候仕合ニ御座候、一片之衷情御憐垂可被成下候、抑今日之事至重至難御心配は不及言候得共、猶未幾層之困苦ヲ来すをしらす候得共、

され共古人之困難に処し千辛万苦卒業セしに比すれは、数百歩を譲るへしと愚考仕候、今日より先キに社(こそ)、忠臣タル之節操は、初而顕るゝ位之事にて甚深味可有之、今此時に屈する様之志しにては男子たる之腸にては無之と存申候、誠に虚喝等舗　思食も可有之候得共、小臣平常之素志如此、凡既往之順序に至候而も、必御配慮被成候様候義は誓而御請可申上と信用仕候、乍延引拝答旁以寸楮草々猶拝　謁縷述可仕候、恐々頓首、

二月二日　　利通

具視公閣下

猶々木戸子より昨日別封参候付奉備御内覧候、右ニ付而は許多之咄有之事ニ而、是又御直話ニ可申上候也、

「巖倉右大臣殿　　大久保利通
拝復
封　　」

## ※　四三一　内務省宛電報

チヨクシ、コン、ゴゴ、サンジニジツフンノ、キシヤニテソノチヘ、ユカルコノムネホヲチス、

大久保

海軍省出張所ニ而
林海軍大佐(林雄二)

右電報至急可被差出候也、

五月七日　　利通

内務省

当直

## ○　四三二　岩倉具視宛書翰

「六号禄税ノ件
木戸顧門辞退ノ事、

岩倉右大臣殿　　大久保利通
親展内啓

」

(ウ)—1305

益御安祥被為渝奉粛賀候、扨昨日は態々御来駕被成下千

万恐縮之至奉存候、

今朝伊藤参議入来、鹿兒島禄処分之義猶委細示談承候、同人取調ニ而、倒底売買許可相成居候一段ニ而、特別之御裁断ヲ以別法被設候か否ニ止り候、寺島より承候趣ハ又々大ニ相違致候趣、寺島之咄ニハ持高と唱へ候モノ凡而、税を収め居候事ニ相心得たる由、左スレハよほと判然スル事候得共、税を収候と之義ハ無之事ニ有之候、就而特別之御処分相成候ニもセヨ、大蔵省之上申書前後趣意支吾且曖昧に属シ候付、改而差出候様示談候得共、大蔵省ニおひて迚も纏り付兼候趣、大蔵卿返答ニ候由、幸今朝松方も相見得候付、猶又大蔵卿江示談相遂ケ可申、畢竟大蔵省之旨趣両途ニ渉り候付、何れにも一ニ帰着不致候而ハ甚不都合ニ有之段申聞、同人より委細相心得厚く相談可致と之事ニ而候、尤書面出シ替候事不好訳ニ候ハ、、正院より今一応御再問相成候而、事理明白答議差出候運ニ致候而可然と、伊藤とも談合仕候、若右之通六か舗候得ハ、伊藤見込之通鹿兒島官員差出実際取調之上、御処分相成候而も可然と愚考仕候、前条昨日之御談話と少々相替り候付為念申上置候、

伊藤内話に木戸又々苦情申出候由、此節ハ内閣顧問を是非被免度同人江尽力致呉候様、若尽力不相調候得ハ、辞表差出可申云々之趣ニ候由、未面会不致候付是非論破シ候積り之由承候付、夫テハ甚込り候次第に付是非尽力有之度、尤両大臣江ハ申上置候方可然と申入置候、自ら御立迄ニ同人より申上候事と存候得共序に申上置候、何様之原因より相生候事に可有之哉、御留守ニ相成候而ハ、条公御一人ニ而御心配之事と窃ニ杞憂仕候付、何とか御勘考被成置、条公江も御談置有之候ハ、可然かと奉存候、

右之趣奉申上度草々如此御座候、時下折角御保護被為在候様奉万祷候、謹白、

十一月廿七日　　利通

右府公

再伸、為御暇乞是非参上不仕候而不叶義ニ御座候処、昨日御高諭ニ任セ失敬仕候、不悪御汲量可被成遣候、本文木戸云々之義過日来御内話申上候通、実ニ此後御注意之第一と深ク懸念仕候也、

「封　禄税処分より木戸顧門辞退ノ事ニ及不」

○　**四三三**　岩倉具視宛書翰　④—599

「大納言岩倉殿　利通」

御書拝読仕候、然は今日就御不参被示聞候御箇条之趣承知仕候、ホリス之事は正三卿江御談可申上候得共、初発より　閣下大木江御談之末に有之、殊にか様之事件は手続区々に相成候而は不宜と奉存候間、今一日延引仕候而も不晩に付、明日御参朝之上何卒御取計被下候様奉願候、肥前兵隊之事は大限江承候様可仕、猶又両公よりも拝承仕候上御談合可申上候、何れ是は兵部江御談之上ならてハ、今日御沙汰と申訳にハ至り申ましくと奉存候、仙藩云々之事承知仕候、先尊酬迄早々如此御座候、謹言、

四月十三日　利通

岩亜(倉)相公

○　**四三四**　岩倉具視宛書翰　④—577

「岩倉右大臣殿　大久保利通
御請」

拝啓仕候、別紙任御沙汰相認試奉差上候、大意右之通にて余ハ尚以思食御執筆被下候様奉願候、別段くわしくなくてもよろしと奉存候、尤御口達に而西郷江御含被下度候、早々差上候含に御座候処、無拠来人引続鳥渡之間執筆甚疎略と奉存候へ共、右次第ニ御座候間よろしく奉願候、外ニ段々申上度心事御座候へ共、何れ明日中拝謁言上可仕候、此行要詞まて奉申上候、頓首々々、

○　**四三五**　岩倉具視宛書翰　④—517

「岩倉大納言殿　大久保利通
拝答」

御書拝見仕候、然は大久保一翁御暇願候一条承知仕候、内田より紙面参候付返答ハ仕置候、山岡も過日来両三度

参たる由候へ共、病中面会相断置申候、仍而内田江参候儀と相考候、何れ明日中ニ推而相尋、尚趣意も承、容体も見聞可仕、其上何分申上候様可仕候、実に病気に候へハ無致方事ニ御座候、此より拝復如此御座候、謹言、

九月廿五日　　利通

岩公

尚々来客中乱筆御容恕可被仰付候、

## ○　四三六　岩倉具視宛書翰　⑤—738

「岩倉右大臣殿　　大久保利通
親展　　」

尚々久光も被召呼候由、いかゝ之様子欤と案し申候、尊墨拝読仕候、北海道人体之事両省御達有之候ハ、、同省ニ而相撰可申候付、旨趣ハ卿江御申含有之可然奉存候、尤御沙汰之趣も其筋江相達候と之事ニ而候間、夫にて御宜クと奉存候○政府ヨリ出張之事ハ未黒田より承不申候乍去御差出候得ハ、内史辺に而ハ其詮有之ましく候○山県之義よほと六か舗由、伊藤より夜前可申上と咄承候、猶明日篤と示談可致申置候云々有之事ハ、兼而御承知被為在候通ニ而、若此ニ動キ相付候而ハ大変ト愚考仕候○献金御返云々之事は猶御直ニ可申上候、尤右辺之事ハ過日於御前御評議之結末に依り、如何様共決候事ニ御座候、根本之旨趣一定せす候而ハ、誠ニ困却之次第ニ御座候○明日横濱江御出云々奉畏候、自ら参朝候心得御座候付、可成相運候様可仕候○君側人撰之事御則答可申上候、

右無拠来人中にて御返詞延引仕候、拝復迄如此御座候、頓首、

十一月六日　　利通

具視公閣下

「北海人体ノ件、政府出張ノ事、
山県六ケ敷由、君側人選ノ件、
久光呼出ノ事酉十一月六日付」

○　四三七　岩倉具視宛書翰　③—482

「岩亜相公　　大久保利通
拝答至急　　」

御書奉敬読候、然は云々之事件ニ付明朝御出可被下趣奉拝承候、内実は此方より出頭可仕と奉存候処、御都合も可被為在候間奉待候様可仕候、格別之事も有之ましく候へ共、如
尊諭ヌカリ候ては実に御大事ニ候間、能々手廻シいたし一挙して可平定、目的は相立居不申候而ハ相済不申事ニ御座候、只々座論にて一片之書付ヲ以、天下始り候ものと相考候が真に間違にて、畢竟是迄之事統御之術ヲ失ひ候より此に至り、我輩之大罪と反省仕候外無御座候、會高等之如キも今形被召置候得ハ、いくらも盗賊を御拵へ相成候道理に御座候、寛急二字之違に御座候へ共、
皇国之興廃存亡ニ関係仕候間、克々御注意なくんハあるへからすと奉存候、已来ハ何卒諸生論ハ屹と御採用無之様、御居り有之度万祈仕候、何も拝謁可奉申上、御受而已、早々謹言、

七月十八夜　　利通
岩亜相公

尚々別冊御差廻被下慥に落手仕候、尚熟覧可仕候、

○　四三八　岩倉具視宛書翰　④—511

「岩倉大納言殿　　大久保利通
御請　　」

御書奉謹読候、
一昨日一翁（大久保）御尋ニ而今日御出向被為在候由、誠ニ大幸ニ奉存候、何卒御配慮伏而奉願上候、
一江東一紙落手仕候、建国始末十分見込言上仕候含ニ御座候、副島江ハ談シ可申候、明日中ニハ凡愚考丈ハ相付可申と奉存候、
右御請奉申上度早々如此ニ御座候、謹言、

九月十六日　　利通
岩倉公

○　**四三九**　㊟「岩倉公宛別啓書翰」　④—512

本文之如キ一条速ニ相決不申候而ハ、大人心にさはり可申と奉存候、畢竟折柄小臣も所労相発、生憎之御会と奉存候、何卒明日中にても御再会奉願候、若小臣不参候而手続不宜都合も御座候ハヽ、所労難渋ニハ御座候へ共、明日中にても推而参候様可仕欤と奉存候得共、何も是迄之事ハ本文ニ申上候通、別ニ承居候廉は無御座候、只々察スル処彼之情ヲ尽シテ咄候事も出来、内情厚ク察シテ呉レルと申賦ハ飽迄可有之と存申候、如今日ハ実ニ天下之大患ニ遭遇シ、大久保之如キニ私スル事ハ出来不申事御座候、此段再考之趣申上候、謹言、

○　**四四〇**　岩倉具視宛書翰　⑨—1618

「岩倉公閣下　　利通
御請
」

拝読仕候、明日條公御不参ニ付、御示諭之趣一々拝承仕候、明後日之御評議之件猶篤と勘考仕候処、漠然一同之御評議有之候而も纏り付兼候半と懸念、今日退出後より伊藤江差越愚考之次第示談仕候処、明日於御所大蔵卿江両人に而今一応内議ニ及、山縣江ハ伊藤より一先巨細之次第ヲ談シ、河村へハ下官より示談致候而其上公然御評議有之候方可然、諸省之内に而も陸海軍第一に而、此両省程克折合候得ハ、他ハ決而格別も有之ましくと、伊藤と申合候事に御座候、仍而山縣・河村へ談候都合も有之候付、時宜ニ依り表通御評議ハ卅一日比ニ相成候欤も難図、是ハ明日宮中ニ而三人談合之都合ニ而、猶々申上候付左様御承知可被下候、

別紙御賞詞之一条御見込も被為在候由御直ニ可奉伺候、

右拝復旁々草々如此御座候、拝具、

一月廿九日　　利通

右府公

○　**四四一**　岩倉具視宛書翰　③—446

「岩倉公閣下　　利通」

今日は弥八時御参朝相成候や、今朝林少輔(友幸)相見得今暁従須本報知之者着、凡之模様相分、今日中大略之御届ハ申出候由、就而は速ニ於政府御評議相成居候様無御座候而は不相済、如此事件ハ拙速を尊候間、昨夜御示諭之通例刻参朝可然と奉存候へ共、夜前条公御往返如何ニ候や一応奉伺候、不取敢条公江参昇可仕奉存候へ共、是非今朝之内阿知事面会被致度段承候間、少々遅刻仕候而廣澤・佐々木・齋藤等吹聴之都合も有之、此旨乍恐以書中奉伺候、早々頓首、敬白、

五月廿一日　　利通

亜相公閣下

○　**四四二**　岩倉具視宛書翰　④—577

二月十日

尚々ホリス之事ハ何卒奉申上候通之情実に御座候間御断決被下候趣呉々奉祈候、兎角物事例之因循に墜候様にてハ、迚も大事成功六かしくと苦慮仕候也、

「封

岩亜相公　　利通」

○　**四四三**　岩倉具視宛書翰　⑤—874

「岩倉殿　　利通

拝答」

拝読仕候、御示諭之趣奉畏候、大隈始之事委曲拝承、猶御直ニ可相伺候得共、其行御請如此御座候也、

五月廿二日　　利通

具視公閣下

猶々両日中御出会相願御評議有之度奉存候、

○　**四四四**　岩倉具視宛別啓書翰　④—504

「岩倉大納言殿　　大久保利通」

昨日は川村江来ル八日調練

叡覧御内定被為在候付内々相達置、表通御汰沙ハ今日可

有之趣ニ而達申候、立様都合ニ相掛り候事ハ取懸り可申候へ共、表通御達無之而不相済事柄も有之候付、是非今日中ニハ御達被成度と分而承申候、自ら今日ハ其通御達之趣ニ御咄ニ御座候へ共為念申上候、尤明後日ニ而候得ハ、是非今日ニハ彼是無手抜様有之度奉存候、早々再白、

十一月十日　　利通

右府公

再伸

皇后宮御西行御延引被仰出候処、既に賊魁も捕縛相成候付而ハ、無御構御発輿被為在、可然と愚考仕候、長々之御道中故、少ニ而も早目之方ニ無之而ハ、寒烈之気候ニも相向候付、御無理欤と奉存候、乍序心付奉申上候也、

## ○　四四五　岩倉具視宛書翰

㉗—1283

「岩倉右大臣殿
御請　　大久保利通」

謹読仕候、賊魁捕縛都合克相運、欣然之至に奉存候、扨今日内閣参集之義ニ付、御懇示之趣奉敬承候、昨日松田より相伺候裁判一条之事候得ハ、今朝伊藤江面会之筈に付、同人と示談可仕候間、別段御評議に列し不申候而も相済候事と奉存候間、今日迄は参集御免被仰付度奉願候、追々快方に付、参仕難調義ニハ無御座候得共、右通之次第故不参仕候付、不悪御汲量可被成下候、拝答迄草々如此御座候、謹白、

## ○　四四六　岩倉具視宛書翰

④—699

益御機嫌克恐悦奉存候、昨夕は高楮被成下、詳細被示聞候件々逐一拝承仕候、猶勘考之上御直に尊酬可仕候、第一大田黒代り之人物速ニ御見立無之而ハ、大ニ不都合相生可申候、三岡（由利公正）召之事ハよろしくと思食候ハヽ、早々御沙汰相成度、比人英雄ニ相違無之、今日ニ至候而ハよほと御用立可申、別紙同人見込書比内相達候付、備御内覧候、御覧後御返却可被下候、宜教使之事ハ昨日門脇も参、区々示談仕候、又小野も参、

是又厚承申候、何事も順序を立、是非運ばせねハならぬと、御取懸りにさへ相成候得ハ、一両日之間ニ片付可申と愚考にハ存申候、只あれを談しこれを論し、茶呑咄ニ而日々送り候事、実以気之毒千万ニ御座候、

右乍延引拝答奉申上度如此御座候、今朝参昇彼是奉伺度候得共、御参朝前御妨とも奉存候間、両日中尚参昇愚考丈は言上可仕候、誠惶々々、

六月七日　　利通

岩倉公閣下

尚々新貨幣之事、近日中大ニ御論もなくて不叶事件有之、是等ハ誠に御大事と奉存候、政体基則伊藤大ニ議論有之候、是も御直ニ可奉申上候、

## ※　四四七　岩倉具視宛書翰

「岩倉殿　　二紙入利通」

暫時御猶予願之旨復命、猶亦得能良介為使者出府、召ニ応セさる儀恐惶之由、情実懇ニ言上之条々、委曲及奏聞候、然処元々深キ

思召被為在、折角出府被為待候事ニ而、

御遺憾至極ニ候得共、何分所労難扶趣ニ就而は、不得止次第ニ而、先願之通被

聞食候、乍併精々保養を加へ、少ニ而も快気相成候ハヽ、勉強出府可有之、分而

御沙汰ニ候拙者共に至呉々御依頼申候次第ニ候間、即今不容易時体御洞察、且前条御旨趣御汲取、為

皇国御拝趨有之候様致希望候、云々

## ※　四四八　岩倉具視宛書翰

尚々為念別紙一応返上仕候、御不用に候ハヽ、又々御差廻被下候様奉願上候、

昨夕は　尊書、且一件一紙正ニ落手仕候、扨但書云々今朝九字迄に差上候様拝承仕候得共、右は兼而承知仕候朝鮮事件取調之儀、大限小子両人取調中ニ而、今一応相談不仕候而ハ、治定致兼候ニ付、今朝迄は申上兼候、仍而相考候ニ、但書丈ケは御除キ相成候而、衆議に御懸ケ相

成而可然と奉存候、又兼而両人江取調被仰付置候ニ付、見込書差出候上御取極め被成候旨、御示シ被成候而可然奉存候、尚御賢考可被成下候、此旨拝復旁以寸楮如此御座候、恐々頓首、

二月四日　　利通

具視公閣下

猶々全体今朝大隈江参筈ニ約置候処、昨日佐賀県云々之事申来、遽卒至急差出、且県令同断、鎮台兵云々之事ニ付、岩村江正院にて引合之事、今朝之内西郷内談之義も有之、其儀不相調候付、何れ今夕明朝ニ懸取極め可申候間、左様御承知可被下候、台湾一件は條公江差出置候、自ら御廻し之筈、何卒ばつとしたる事ニならさる様奉願上候也、

## ○　四四九　岩倉具視宛書翰　③—351

尊書奉謹読候、今朝差出候人撰一紙、早々　輔相卿江御廻し被下、　両公限りニテ明日は御裁決被為遊候御示談之趣、別而難有奉存候、紛々之衆議に渉り候テハ、万々いけ不申候、非常之御英断ハ則其処に可有御座奉存候間、此上御確定被遊候様再応奉願候、今日ハ暫時参朝仕、政体之事も会計之居合不相付候てハ、御発表難相成趣ニ、御沙汰御座候付、参与一同より存慮十分申上候、此度会計ノ人ハ御替へ相成候共、断然御施行之御決断さえ相付候得は、会計ニおひて異議ハ有之間舗事と奉存候、明日ハ是非御明断奉仰願候○府県人撰頗ル御大事ニ候間、民部室より調書ハ差出有之候得共、是又一応御持帰にて御参考被成下度、其上愚按は可奉申上候、○輔相卿より、今朝岩倉より其方差出候紙面、被差廻候と之御沙汰有之、評議之席にて甚当惑仕候得共、イタシ方無之候故、左様ニ御座候と御答申上候、シカシ人撰ノ紙面ト申事ハ、他ハ分り申マシク候、何も推出シ候テ可然事候得共、種々論ニ成り候得ハ、矢張り遷延ノ外無之候故、　思食ヲ以被仰出、若異論相立候節、御助ケ申上候得ハ、大ニ体裁も宜シク候間、右通奉願候、何卒明日ハ、程克輔相卿江御談被置可被下候、内実は大ニ込り入申候、

右御受、且乍序今日之形行奉申上度候、宜敷御推量被

仰付被下度奉拝祷候、謹言、

七月朔日　　大久保一藏

岩倉卿閣下

（貼紙）「三条岩倉両公英断政体発表云々之件、」

## ○　四五〇　岩倉具視宛書翰　④—523

謹啓仕候、益御機嫌能被為遊御座奉大慶候、然ハ昨朝ハ御来駕被成下奉恐縮候、今日木戸江面会致度懸合置候処、差支有之、明後十三日ニ延引仕候間、左様御承知可被下候、是非一日も差急候得共、倉卒之際にてハ十分尽兼候付、十三日ニハ終日寛話を遂、反覆ノ諍申度含に御座候、右に取懸候得ハ、あと之順序屹と相立、すら〳〵運歩出来候様、判然見込立置不申候而ハ、相済不申候故、昨夜大木江密行仕、極々機中之談話を遂候処、同人事固より間然する処無御座、実に　皇国之大幸無此上と満足之様子、左様ニ相運候得ハ、身ヲ粉にして励精可仕、如何しても今日之儘ニ而ハ、終ニ救匡すへからさる之大害を招き候ハ、明鏡に懸て瞭然たる事と、断然と申居候位に御座候、尤同僚といへとも、誰江も示談不致候付、其心得を以、密々順序を取調置呉候様にと、呉々相頼置申候、尤凡見込丈別紙之通相調、一覧に入置申候間、奉備御内覧申候間、尚御示教奉願候、御覧後明後日迄に御返却可被成下候、

○過日粗奉申上置候須坂（信濃）藩丸山某一条、尚又承候ニハ大参事より同人江致帰藩候様、頻に促し候様子に御座候、同人事、旧主人之事に付、伺置候事も有之、其結局承置不申候而ハ、帰藩難致と答候へ共、所労ニ而も申立、是非帰れと相迫り、甚困却仕候由ニ御座候、就而は何とか御内沙汰を以御留置被下候様、

御賢慮ハ被為在ましくヤ、最初より御関係も有之、実事何とか御返詞も無之候而は、不被為済訳に付、何卒御勘考奉願候、先当座之処、別而困却之様子に御座候間、追而表通之御達被成下、即今御内沙汰之御都合出来候得ハ、別而難有可奉存候、○旧藩耶蘇徒復士之事は、何卒願達候様、呉々奉拝願候、

右乍恐以寸楮奉願度、如此御座候、尚拝謁可奉申上候、早々謹言、

十月十一日　　利通

岩公閣下

○　**四五一**　岩倉具視宛書翰　④—562

「岩倉殿　　利通」

尊翰奉敬読候、然は今朝従三位江御逢被下候旨、態々御高論被仰付敬承仕候、必承伏仕儀と相察申候、誠に余計之御煩労奉懸候儀、何共恐入次第に奉存候、午後参　殿、御様子奉伺度所存御座候処、是より製鉄所江御出被下候由、西郷より承候様可仕事に依、今夕明朝ニ懸出頭可仕候○圖書儀（島津圖書）は申上兼候得共、御一新時分俗論を主張いたし候者ニ而、同人ハ格別之事も無之候へ共、矢張煽動いたし候一類有之、内実ハ只今にもとふやら面白からぬ都合ニ御座候、右様比段可被仰付候、就御尋有様殿下限申上置候、桂江（桂久武）は早々相通候様可仕、事に依而ハ明晩に御願申上候欤も難図、其段御承知可被下候、知事御逢之事ハ、西郷より可申上候、此旨御請のミ如此御座候、頓首、

十二月廿六日

「〆

岩亜相公閣下　　利通」

○　**四五二**　岩倉具視宛書翰　③—1740

「岩倉右大臣殿　　利通

拝答　　」

拝読仕候、別紙六通慥ニ落手仕候、以か条被示聞趣承知仕候、宮内省定額別段

思食云々之事、一応御止相成候事異存無御座候、何も明日退出懸参上旁可奉申上候、此旨拝答如此御座候、頓首、

正月七日　　利通

具視公閣下

○ **四五三** 岩倉具視宛書翰 ⑦—1370

「岩倉右大臣殿　　大久保利通
御請　　」

敬読仕候、別紙廃合書類并新潟県令一書慥ニ落掌仕候、扨就所労御懇命之趣、難有感銘仕候、明日之模様ニ依時宜次第ニハ、　任命御来賁奉願候様可仕、乍去最早快方ニ付、両日致候得ハ、必ス暫時之参仕は相調可申と存候、何分重而両様御願申上候様可仕候、余拝謁上ニ譲拝復迄、草々如此候、謹白、

八月十五日（一カ）　　利通

岩倉殿

「封　府県廃合書類并新潟県令一書受掌云々ノ件
八月十五日（一月カ）　」

○ **四五四** 岩倉具視宛書翰 ④—503

「九月六日　　利通」

益御機嫌能奉大慶候、然は過日来内々御談奉申上候一条、昨日退朝懸条公江参殿、巨細申上候処、格別に御同意と之御事ニ而、段々御旨趣も拝承仕候、就而参議中之処いかゝ可致やと御沙汰ニ付、思食相伺候上、廣澤・副島江談合可仕旨申上候処、左様なら其通致呉と之御事ニ付、副島ニハ今日より横濱江参と之事故、昨夜参候而、趣意巨細申含示談仕候処、段々異論にて小臣にも大ニ議論に及候次第ニ御座候、只今之朝廷にていけぬといふならハ、薩か出て大に人を切替ねハならぬ事に可相成なとゝ、意味違之事まて承り、且又薩か誠実に藩を差上ルと申た処が、迚も外より知藩事にても、御居ハ出来ル咄でないなとゝ、申事ニ御座候、仍而其辺も弁解ニ及候処、約りハ会得相成、しかし朝廷上ニ而、信義之立丈之事は、是非御確定相成候而、其運に相成候様、いたし度と之趣意にて、今朝参殿之上、愚存も申上候と之事故、自然出頭可相成奉存候、尤右之見込も有之事候得ハ、横濱之事は相延し候ても、此急務を相決シもらひ度旨、申入置候次第に御座候、再三相考候而も、朝廷にて立テ切る丈之事ハ、

固より立ねはならぬ訳に御座候へ共、如何しても理屈詰計にてハ、中々いけ不申と愚考仕候、尤朝廷がいけぬによつて、藩を雇ふて来ルと申様子、浅ましき心底にてハ、決而無御座事ハ御明察被下候通に御座候、右為御心得大略之次第申上候付、宜ク御洞察被下度、此段早々以寸楮奉申上候、い細は御直に言上可仕候、謹言、

九月六日　　利通

岩倉卿

○　**四五五**　岩倉具視宛書翰　⑥—974

益御安祥奉敬賀候、扨今日午後三時比　御入来可被下趣、拝承居候(仕脱カ)処、私にも今日迄ハ、就所労不参仕候間、御都合ニ依而ハ、午後一時比より尊宅江出頭仕候ても、宜ク御座候付、一応御伺申上候、尤二時比御都合宜ク候ハ、、同刻参上候而も宜ク御座候、此旨草々拝首、

二月廿三日　　利通

岩倉殿

○　**四五六**　岩倉具視宛書翰　⑦—1270

拝読仕候、扨

皇后宮　御発輿、暫時御延引被仰出候由、被　為示聞拝承仕候、少々は御見合之方可然と奉存候、萩表賊之模様も、先格別之事も無之、官軍愈兵気も相振ひ候趣、御同慶奉存候、最早不日に落去可仕候、所労之義毎々御懇問に預、難有奉存候、愈快方に相向申候間、御安心可被成下候、推而出仕ハ何時に而も相調候得共、先々保養仕居、此節柄別而恐懼仕候得共、用心仕居候付、今両三日何卒奉願度候、此旨拝答迄如此御座候、草々謹白、

十一月四日　　利通

右府公

○　**四五七**　黒田清隆宛書翰　⑨—1765

別紙画図面任御沙汰返上仕候、外ニ一通ヲ差上候付、甚御面働之至恐縮候得共、書入方御命シ被下候得ハ、別而大幸ニ御座候、此旨草々拝具、

八月十三日　　利通

黒田賢台

○　**四五八**　吉井友実宛書翰　⑨—1782

此模様ニ而は高輪迄はひどく候付、此方ニ而相催候付、御都合御出可被下候、木場ハ此辺江出懸候筈候ヤ、無左候ハヽ、可申遣候、若一泊共ニ而は無之候哉、草々拝白、

九月十七日　利通

吉井様

○　**四五九**　吉井友実宛書翰　⑨—1785

当分ハ御困りも可有之と拝察候付、持合候金子差上候、決而御酎酌ニハ及不申候間、必御受用被下候様奉万祈候、乍失敬草々拝首、

十二月十六日　利通

友実老台下

○　**四六〇**　吉井友実宛書翰　⑨—1778

今日五字より内田江入来申進候間、御退出より御立寄被下度、此段早々頓首、

六月廿八日

「〆

吉井幸輔様　大久保一蔵」

○　**四六一**　五代友厚宛書翰　⑦—1153

「五代友厚殿　極急　大久保利通」

昨日は御妨申上候、扨来ル十日米国博覧会行審査官一列発船之筈ニ有之、就而は製藍之義、此便より差出候方可然愚考いたし候、時日切迫候得共、此便相後候得ハ、廿日後ニ相成、大ニ時機ヲ失シ可申候、五月十四日審査官之初会ニ而、此度ハ澳国(オーストラリア)博覧会之節とは違ひ、審査官之規則一変、専ら公平ヲ旨とし、人撰ヲ主とし、従前之賞牌ハ実用ニ益ナキヲ以、此度廃物となし、審査官之所見状ヲ与へ候事ニ相決、其評論を則広告致候趣ニ有之、是

迄は広告も無之故、何様之訳ヲ以賞誉候も普ク不相分候由、仍而ハ此度ハ真ニ公論相行レ候ハ必然故、此賞誉ヲ受候得は、大ニ万国之名誉蒙り可申候、夫而已ならす、古来より発明者ハ、時人之信用を一時失ひ候例不少、況乎日本之如キ未開之国ハ、殊更ニ候故、此度之公評ニ賞誉ヲ得候得ハ、内外信用ヲ得万全之事と存候、此段草々拝首、

五月七日　　利通

五代君

猶々以御庇陰相調候建築供御一覧候付、御都合次第御来賁相願度候、若今日午後御差支無御座候ハヽ、三四字頃より御入来被下候得は仕合ニ候也、

## ○　四六二　三島通庸宛書翰　⑧—1485

「山形県
三島権令殿　　大久保利通
貴答」

貴墨敬読、暑気相向候処、愈以御安固被成御奉務之段奉敬賀候、西南之事も殊之外延引、未タ平定にいたらす、甚残心之至ニ候、乍去最早大勢ニおひてハ一定之事ニ付、此上賊焔を再起せしむる様之義ハ、決而無之と確信仕候、既ニ人吉も落去、追々薩境江進入之運に相成候、豊後路之方も一時は気遣も有之候得共、疾ニ海陸軍守備も相調、此方も不日ニ潰走相成候半と想像候付、何も御安心可有之候、

其県下之事も種々御配慮之筈、殊ニ当春ハ御病中、寒地江御踏込如何と甚御案申上候処、近来追々御快方之由承、大ニ安心仕候、乍去病を犯シ御高配之詮有之、当時ハ何も静謐之由、無此上次第ニ候、貴島子よりも巨細之実況承、尤も條公江も同人より及具申、大ニ御安心相成候、猶乍此上折角御勉強所仰候、

右御答迄草々如此、時下御自愛専要御注意有之度候、

拝具、

六月十日　　利通

三嶋通庸殿

尚々貴島子より委曲御聞取有之度候差急乱筆御推読

可被下候、

○　四六三　松方正義宛書翰　⑦—1201

「松方宛
大久保公」

尚々今日御菓子頂戴仕候付、乍些少入御覧候也、

愈御安固奉敬賀候、扨御腫物ニ而御悩ミ之由、如何之御事に候哉、嘸御難渋之筈親察仕候儀、老骨とハ違ひ壮年英気之御事故、最早御快気に候半と存候、小子ニハ未引籠残念千万ニ候、乍去日々快気今両日も致候ハヽ、暫時宛は随分出仕も相調可申存候、寸刻を争候今日ニ際シ、実ニ心ならさる事ニ候、最早御出仕御出来候ハヽ、段々御談申上候件も有之候故、御立寄被下候様御願申上候、此段御様子御尋旁草々如此、拝首、

八月十日　利通

松方雅丈
玉欄下

○　四六四　小松帯刀宛書翰　②—224

「小松帯刀宛
利通公親翰
奥羽戦争ニ付」

尚々別紙急達候様御頼申上候、

一翰拝啓一昨日木場直差下候付相達御□□而も御落手被下候筈と奉存候、今日表通

御承知に相成筈に御座候、就而は天気上り次第可成神速、御発駕相成度心配仕候得共、其御許より之御報知相達候上と折角御待申上居候、東海道筋も非常之洪水ニ而、則大津之処中々通行も出来候丈ニ無之、天気上り候而も四五日ハ不致候而は六か舗由に被聞申候、兎角廿五六日に相成不申候而ハ、現場差支可申候、金策如何之御都合ニ可有御座候也、是非調進無之而ハ相済不申候故、よろしく御尽力被成下候様奉依願候、当分之処丈ハ出来候丈御繰合セ被下候様奉頼候、奥羽之方内実ハ官軍敗走と申ニハ無之候へとも、仙臺・米澤其余十七藩位同意にて会討

止戦之儀申立、九條殿ハ仙臺江禁錮同様ニ而御警衛申上、沢殿ハ米沢江同断之由、就而薩長兵ヨリ無異儀両卿引渡候得ハ宜候へとも、相拒候ハヽ及戦争と之事ニ而候由、仍而死戦ヲ遂候にハ別条無之と相トシ申候、先ツ奥羽ハ賊徒に与シ候形に御座候、猶慥成報知有之候ハヽ、早々為御知可申上候、御大事ニは御座候へとも、返而朝廷御締り付候にハよろしく候半ト潜に相考申候、佐土原も今日同断被仰付御賦に御座候、何分ニも御国兵被取寄候事急務ニ御座候間、平運丸ハ仕舞相調居候様御頼申上候、通路明キ次第下り人数等差下シ可申候、頃日公私多用御推察可被下候、右申上度早々如此御座候、頓首、

五月十九日　　大久保一蔵

帯刀様
侍史

内用　　」

今日は如何被成候や、些遅方相成候間、一先御伺申上候、遠方ならハ明日ニ而もいたし可申候、以上、

五月二日

「　（御記名正助）

利通公書翰三通

所蔵　在中

堀家（伊知地）　譲受　相談中　」

○　**四六五**　伊地知貞馨宛書翰　③—1675

「〆

堀次郎様　　大久保一蔵

○　**四六六**　伊地知貞馨宛書翰　①—22

「〆

堀小太郎様
内用　　大久保一蔵

」

先刻は貴翰拝見、無拠故障有之得罷出不申、乍残念御断申上候、兵部様江ハ成立候様被仰上置被下度奉頼候、任

序此旨御断申上候、以上、

七月十日

○　**四六七**　伊地知貞馨宛書翰　①—13

「堀仲左衛門様　　大久保正助
別紙入」

両日は不能拝接候得共、愈御万福奉賀候、扨昨朝高崎子入来、別紙残置有之、白石一書入用之由ニ相見え候、就而は右一書は賢兄御方へさし上置たるやニ所そん申候間、御手元江御座候ハヽ、別紙之通乍御面倒御取計被成下度、もしや政府之方抔江御出も御座候ハヽ、形行を以何卒御早々被成置被下候義相叶申間舗や、何欤急用之趣ニ被察候、今朝御参旁御頼申上度奉存候へ共、些用向有之何れ明日も拝眉縷々可申上候、其内乍自由以書中奉願置候、以上、

六月十九日

○　**四六八**　高崎正風宛書翰　⑦—1145

益御安祥奉拝賀候、扨先日之書画捺印相済候付差上候間、乍御面倒可然御頼申上候、外ニ老山より小生へ送り候由ニ而別紙之通申来候付、其まゝ差出候間　御都合ニ而備天覧候ハヽ、別而難有奉存候、此旨草々拝首、

四月廿一日　　利通

高崎盟台下

猶々別紙老山小生へ之画ハ、強而奉頼候義ニ無御座候間、御都合次第ニ可被成下候、

○　**四六九**　土方久元宛書翰　⑦—1164

敬読、扨昨日華族住居云々之事御尋申上候処、態々被示聞趣承知仕候、只今岩公よりも御紙面到来、延引之次第相分申候、此旨拝復迄草々拝具、

五月十五日　　利通

土方大史殿

○　**四七〇**　松田道之宛書翰　⑥—1057

唯今御返書之趣承知仕候、島根県江返詞之趣ニ付、御退出懸御出被下候様被示聞、就而は鳥渡正院江御立寄、福岡江御返詞有之候電報御見合被下度、若退出後ニ而相分不申候得は宜ク候間、為念左様御頼申上候、又々別紙之電報到来、正院江開申イタシ呉と之趣故、至急上申返答相成候様仕度候、乍去今日は大臣方御退出後ニ而、今日之間ニ逢不申候得は無致方、是ハ差知たる事候得共、正院之御指令を受返詞致候方と愚考仕候、此旨草々拝首、

十一月九日　　利通

松田大丞殿

## ○　四七一　松田道之宛書翰　⑤—1620

「松田道之殿　　大久保利通

至急親斥　　」

別紙致返上候、昨日司法卿より院長江示談、大坂上等裁判所之裁決ヲ破毀、被告之申分ヲ正理と内定致候付、安心候様承候間為御心得申上置候、昨日廃官云々之事、地方官江御達之義ハ間違ニ而取消之筋相成候、今日は不参候付少輔へ御伝置可被下候、

右申上度草々如此候也、

二月三日　　利通

松田殿

猶民費取調之事ハ如何ニ候や、相調候ハヽ一応一覧致度候也、

## ○　四七二　松田道之宛書翰　⑦—1278

「松田大丞殿　　大久保利通

至急親斥　　」

別紙山口県より電報唯今到来候付、為御知申進候也、

十一月六日　　利通

松田殿

内務省　　山口県

コンキャウ、ロクジ、ハギニ、ウチイリ、カイリク、

ハサミ、ウチ、ゾクト、タチマチ、ツイヘ、アトカタナシ、ナヲ、ソウサクニ、チュウイス、

十一月六日午後七時三十分発

○ **四七三** 松田道之宛書翰 ⑧—1561

別封京都府知事電報御廻申上候、第一・第二大隊後備兵解隊、直ニ在所へ帰り候而は、伝染病患之恐有之候付御差留相成候様致度、過日電報到来西郷中将へ懸合置候処、猶又別紙催促申来候、今日西郷入来、返詞之趣ハ

第一・第二後備兵解隊ニ付其マ、在所へ帰候而は、流行病伝染之患有之、差留呉候様申来候得共、右ハ厳重遂検査少々病患有之候者直ニ病院江入、壮健之者ハ消毒を行ひ帰シ候事ニ、陸軍におひて治定致候付、此節ハ決而疎漏ハ無之候故、其段返詞致呉候様云々、

右之通承候付此上推而申入候事にも難相成候付、右大意ヲ以京都府へ返詞御取計有之度、此旨草々如此候也、

十月十八日　　利通

松田書記官殿

○ **四七四** 松田道之宛書翰 ⑦—1321

「松田書記官殿　　利通」

尚々別紙二通格別至急之事とも不相見得候共、序ニ差上候也、

別紙暗号電信、唯今林より到来候付御廻申上候、暗号ハ手元ニも有之候得共、今日治療いたし候処、少々相悩ミ引合セ方甚煩敷候付、御元ニ而御引合セ被下、若至急之事候ハヽ、御廻被下度、格別之義ニ無之候ハヽ、明朝ニ而宜ク御座候、多分鹿兒島事件欤と相察候、此旨草々如此候也、

十二月十一日　　利通

松田君

再伸乍平臥之乱筆御推読可被下候、

○ **四七五** 松田道之宛書翰 ⑦—1106

過日御談申上候外国人遊猟免状草案之取調之義如何之都合ニ候ヤ、外務卿より催促承候、一通り出来候ハヽ、外務卿江御廻有之度、追々返詞も有之明後日比ニは相揃可申と之事ニ候、猶精々差急取調方御取計可被下候、此旨早々拝首、

一月廿七日　　利通

松田殿

○　**四七六**　松田道之宛書翰　⑧—1592

別紙長崎・福岡県書記官より之電報御廻申上候、今日賞牌授与式不参候付、太政官江届書差出候様御出省之上、速ニ御取計被下候様御頼申上候、

右草々如此候也、

十一月廿日　　利通

松田大書記官殿

※　**四七七**　村田新八・高崎正風・岸良兼養宛書翰

各位弥御安康被成御座奉拝賀候、次ニ小子事今般帰朝之御沙汰承知、明廿八日晩当所発輙フランクホート江一日逗留、即夜汽車ニ而卅日朝御地之様到着之筈ニ御座候、不図再会相楽居申候、此段為御知迄如此、何も期面晤短章を呈候、匆々拝首、

三月廿七日　　大久保利通

録再より

村田新八様

高崎正風様

岸良兼養様

尚々卅日ニハ時刻等分兼候付、尚フランクホートヨリ池田書記官迄伝信差遣候筈御座候、

※　**四七八**　岸良兼養宛書翰

弥御安康被成御勤奉敬賀候、然ハ無拠御談申上候義有之候付、今日鳥渡御所迄御出頭被下候様奉願候、尤御身上ニ付而之事ニ御座候、御退出よりニ而も御出ニテ宜舗と存候へ共、時宜ニ依遅刻可相成も難図、乍御面倒御参

朝被下候様奉願候、此旨早々頓首、

三月十九日　　大久保

岸良様

※　**四七九**　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養殿　　大久保利通

親斥　　」

猶御安康奉敬賀候、扨再度自由之至ニ候得共、御談申上度義有之候付、鳥渡御入来被下候得は仕合奉存候、若今日御差支も候得ハ、明朝九時比ニ被成下度此旨草々、拝首、

一月十一日　　利通

兼養君

※　**四八〇**　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養殿　　大久保利通

親斥至急　　」

拝読、奈ら原一封一覧則返上候、唯今川路方より第二時両人参殿之趣注進有之、結局猶追而可申出と之事ニ有之候、折角今朝遠方迄御出御談被下、奈ら原も請合居何様之間違欤と存候処、別封之趣ニ而相分申候、此上は致方無之事ニ存候、御面会は幾度も御断相成候ニ強迫候義は、分外失敬之事ニ有之候、此旨御則答迄早々拝首、

十二月廿九日　　利通

兼養様

○　**四八一**　岩倉具視宛書翰　⑤—764

「岩倉右大臣殿　　大久保利通」

過刻は御妨奉申上候御内話申上候、鹿児島分営焼失之儀、情実之事ハ全ク

閣下限りニ申上置候事ニ付、其段御含可被下候、猶又一応御談申上候迄は、同席中へも御扣被下度奉願候、且又禄税等之事、実ニ今日迄延引歎息之至ニ御座候、此内より御内話も拝承、必御断決可被為在と存詰候処、今朝之

御咄ニ而は、無御余儀御訳に候半と心痛仕候、兎角参朝候上御評議も可有之と奉存候間、此儀厚御注意可被下候、従来如此事件云々情実にて延引、終に其味を失候事多々有之候事に御座候、此旨一応奉申上置候也、

十二月廿二日　利通

具視公閣下

## ※ 四八二　岸良兼養宛書翰

「大審院
岸良兼養殿
至急　大久保利通」

今朝ハ御面働奉存候、扨其節申上置候通、河野面会之義速なる方可然存候付、今夕外に約束有之候得共相断申候付、今夕六字比より拙宅江入来給候様、貴兄より御通被下ましくヤ、左候而若差支有之候ハヽ、早々為御知被下度、此旨乍自由奉頼候、拝首、

十月十四日　利通

兼養様

猶々三字迄出省致居候也、

## ※ 四八三　岸良兼養宛書翰

「検事長
岸良兼養殿
至急親斥　大久保利通」

御安然奉敬賀候、扨又々急々御面会申上度義致出来候付、明朝八字半御入来被下度奉拝願候、此旨早々拝首、

十月十二日　利通

兼養様

## ※ 四八四　岸良兼養宛書翰

「司法省
岸良兼養殿
至急　大久保利通」

猶々朝御都合次第ニハ、午後三字比より御立寄被下

而も宜ク候付為念申上置候、
愈御清安奉拝賀候、扨毎々御面倒之至奉存候へ共、今朝御出勤懸鳥渡御立寄被下候様奉願候、昨日河野も留主中ニ尋問有之由、就而猶御咄申承度事件有之、乍略義以寸楮早々拝首、

十月十三日　　利通

兼養様

「　和三郎ノ死タルヲ知ルト
封　好都合ニ可有之見込　」

## ※ 四八五　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養殿　大久保利通
至急　」

御面倒之至ニ候得共御談申上度義有之候間、今日御都合次第御入来被下度此旨早々頓首、

十二月三日　　利通

兼養様

## ※ 四八六　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養様　大久保利通
不及貴答　」

益御安固奉賀候、陳過日河野一条（河野敏鎌・元老院幹事）御内話之末同人江下官考慮之次第御通知有之候哉、明朝面会之筈ニ付少々都合も有之間一寸御尋申上候、若模様も有之候ハヽ、御直ニ承度候付、乍御面倒御退出懸御立寄被下候得ハ多幸ニ候、此旨早々拝白、

三月廿日　　利通

兼養君

尚々外ニ承知の事無之候ハヽ、態々御足労ニ及不申候、

## ※ 四八七　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養様　大久保利通

親斥至急　　」

愈御安祥被成御務奉拝賀候、扨過日御内話申上候一条如何之模様ニ御座候ヤ、若御都合相分候ハ、為御知被下度、乍去当分左印之方江張込ンテ尽力致候趣ニ被相察候付、突然御咄有之候而ハ疑惑も可有之奉存候付、先強而御咄無之方宜ク候半、仍而此段草々申上置候、拝具、

九月廿二日　　利通

兼養様

## ※ 四八八　岸良兼養宛書翰

御手紙之趣承知仕候、御答のミ、早々頓首、

三月廿五日

「メ　　大久保利通」

岸良君

## ※ 四八九　岸良兼養宛書翰

愈御壮固奉賀候、扨毎度自由之至ニ候得共、少々御談申上置度義有之候付、明朝九字より十字迄に御入来被下候得は、別而仕合ニ御座候、此旨早々拝具、

十月八日　　大久保利通」

「岸良兼養殿

## ※ 四九〇　岸良兼養宛書翰

「司法省　　大久保利通」

岸良兼養殿

益御安固奉賀候、陳今日御差支無之候ハ、、午後六時より御入来被下度、外ニ用向も有之候付、河野幹事江約束致置申候、此旨草々如此候也、

三月一日　　利通

岸良君

## ※ 四九一　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養殿
親斥　　大久保利通
」

尚御安静奉拝賀候、小子にも唯今帰宅仕候処河野子両度相見得候由、過日御内話承候辺之事ニ可有之候得共、如何様之趣ニ候ヤ、面会不致前ニ承置度候付、甚御面倒之至ニ御座候得共、御差支無御座候ハヽ、鳥渡今晩ニ而も御入来被成下候得は、別而仕合ニ御座候、明朝ニ而も入来も難図候付不顧自由、此段早々如此御座候、拝首、

九月廿八日　　利通

岸良様

## ※ 四九二　岸良兼養宛書翰

「大審院
岸良兼養殿
至急親斥　　大久保利通
」

拝読仕候、今朝は早速奈ら原江御足労被下、同人江御応答之次第逐一被示聞委細承知仕候、一先同人等より説得有之候ハヽ、何も子細無之と存候、且同人面会之儀は来春ニ相成都合次第申入、猶愚考之次第も有之候付遂示談候様可仕候、大ニ御面働懸上御厚礼申上候、小子にも一先安心仕候、余拝表ニ譲り御則答迄草々拝首、

十二月廿九日　　利通

兼養様

## ※ 四九三　岸良兼養宛書翰

「司法省
岸良兼養殿
至急　　大久保利通
」

愈御佳勝奉賀候、扨昨日は度々御面働成上申候、明朝御入来可被下旨承知仕候得共、高輪より直ニ出仕致候付、乍御面働御退出懸内務省へ御立寄被下候欤、又ハ三字後御入来被下候得ハ仕合、如何様共御都合次第可被成下候、若御細談ニ候ハヽ、宅之方静ニ而宜舗御座候、此旨形行申上度草々拝首、

十月十六日　　利通

兼養雅兄

## ※ 四九四　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養殿　至急　大久保利通」

御安固奉拝賀候、陳少々御談申上度義有之候付、今日午後三時より四時之間、又ハ明朝午前八時半比、御入来被下候得ハ大幸ニ御座候、此旨為見会草々如此候也、

二月廿二日　利通

岸良君

## ※ 四九五　岸良兼養宛書翰

「岸良兼養様　上置親斥　大久保利通」

愈御清安被成御勤奉敬賀候、扨河野子御同意御入来之御約束申上置、今日は何も差支無御座候間、午後五時比より御来駕被下度、此段為念得御意候、早々拝首、

六月二日　利通

兼養様

## ※ 四九六　岸良兼養宛書翰

「大審院　岸良兼養殿　至急　大久保利通」

拝読仕候、三好は早速御示談被下、愈御請いたし候旨、大ニ安心仕候、猶拝眉委曲可承候、大限ハ随分宜ク候由承居候、いかゝ御見込ニ候哉、若不都合ニ候得ハ、何とか勘考可致候、為御知可被下候、此旨早々拝首、

一月十九日　利通

兼養様

## ※ 四九七　岸良兼養宛書翰

拝見仕候、態々尊書奉厚謝候、探索事件ハ過日御咄申上

置候通、暫時御見合可被下候、日田県之事は吉井江被聞取可被下候、内実ハ松方より申出候へ共、弾台より頻ニ相拒ミ、先取止之筋に相成申候、兎角御気張不被成候而ハ相済不申候、此旨早々奉復而已頓首、

十一月廿八日

「封

岸良君　　大久保」

## ※ 四九八　岸良兼養宛書翰

「□崎出張
岸良大検事殿　　西京
親展　　大久保利通

」

愈御安固奉拝賀候、扨昨朝御内談申上候河野転任之事、愈相決可申立と存候、必両三日中ニハ相運可申候、就而其節に至、彼是と申事有之候而ハ不都合無申迄候得共、兼而御請合之事故其辺気遣無之と信用仕候、仍而為念此段申上置候、草々拝首、

十月十日　　利通

兼養様

## ※ 四九九　岸良兼養宛書翰

「大審院
岸良兼養殿　　大久保利通
至急

」

弥御安固被成御奉務奉敬賀候、過日来度々御入来被下候由、毎度留主中にて御気之毒ニ御座候、扨粗御咄申上置候河野子出会之事、今明日は差支無御座候間、午後五字比より御同道被下候得ハ仕合ニ御座候、此旨早々得貴意候、何分御回答可被下候、拝首、

五月十二日　　利通

兼養様

猶々若今日御差支有之候ハヽ、明日ニ而も宜ク御座候間、何分為御知可被下候、

## ㊙ 五〇〇 三ケ条政府大体の本

定大目的之事、

一皇国前途之事、今日廟謨大決確立不羈之体裁ヲ立ン事ヲ要ス、即今宇内各国ノ交際上ニ於テ、至重至難誠ニ言フベカラス、誰カ是ヲ慨歎切歯セサラン、旧幕府名分大義ヲ誤リ国体ヲ失スルニヨリ、人心離叛不可救ノ形勢トナリ、畢竟万民塗炭ノ苦ヲ済ヒ　皇国ヲ泰山ノ安キニ置キ、神威ヲ宇内ニ輝サレ度叡慮ヲ以、不被為得止干戈ヲ用ヒ王政一新ノ大業ヲ起サレシナリ、然ルニ従前政府ノ目的曖昧トシテ何クニ在ルヲ知ラス、小規則ニ拘泥シ寛ニアラス厳ニアラス、疑団ヲ抱ヒテ手ヲ下シ、其体些少モ立事能ハス、仰願クハ爾后確実寛大ノ本ヲ居ヘ、泰然トシテ恐怖スル処ナリ、快(快カ)然トシテ狐疑スルトコロナク、全国ヲ我カ方寸ノ内ニ容レ、英豪ヲ手足ノ如ク使令シ、既往ヲ不論親疎ヲ不撰、賢ハ賢ニ任シ、能ハ能ニ任シ、公平正大之御旨趣一貫シ、寸毫動揺スヘカラザラン事ヲ欲ス、

出政一本之事、

一廟謨前条ノ如ク一定之上ハ、要路在職之者各私見ヲ去リ一意ニ是ヲ奉スヘシ、廟議一定事ヲ施スニ至ツテハ、異議四方ニ起リ天下是ヲ非ナリト言トイヘトモ、屹然トシテ顧ルヘカラス、仮初ニモ表裏軽薄事ヲ他ニ譲ルノ弊ヲ去リ、戮力同心罪ヲ己ニ任スルヲ以至要トスヘシ、

要機事蜜(密)事、

一言路洞開ハ明政ノ本ニシテ、要路ノ人最可用心ノ肝要ナリ、然トイヘトモ、従前卑キヲ以テ高キヲ凌クノ大弊アツテ、一介ノ野士トイヘトモ、叩ニ尊顕ニ出入シ機事ヲ与リ聞キ、甚シキニ至ツテハ是カ為ニ廟議動クニ至ル、如此ニシテ何ヲ以テ廟堂ノ重ヲ示シ、基則ノ行ハルヽ事ヲ得ンヤ、実ニ歎息スルニ余リアリ、自今断然トシテ改之、政府要路之外公事ヲ談スル事ヲ厳禁セン事ヲ欲ス、

右三ケ条政府大体ノ本ヲ決定ナクンハ、今日奉務ノ目的ヲ立ル事不能、

## ※ 五〇一　極内覚

極内覚

一勅使被差立候
御趣意、第一条は
宸翰之通大隅守義贈権中納言之旨趣を継述し、為
皇国多年苦心尽力イタシ、其忠誠之貫徹する所以を以
今日
皇室復古之盛時ニ立至り候事と、別而
叡感被為
在、其功労を慰し賜り候云々、
一第二条東北平定天下昇平ニ及といえとも
皇国ノ大基礎不相立、前途之事ニおひて是迄兵馬之事
より一層之重事と深ク
御配慮被為
在候、就而は薩長両藩ニおひてハ、共ニ其基本ヲ開キ
天下属目する処ニ而、爾来弥以合力同心
皇国之肱股柱石と成、治平之功を致し候様鞠躬勉厲可
致、
御依頼被為　遊候云々
一第三条天下大小諸侯東京江被為
食、永世治安之大基本を立させられ度
御趣意ニ付、
御発輦前長門宰相共ニ
大隅守上京、厚遂示談確定之見込可致言上、尤
御親舗
御下問被遊候義も可有之候付、
勅使ニ従ひ上京候様云々
一修理太夫(島津忠義)義、兼而東京江被
食候付、固より速ニ参覲候様云々、

右御趣意之大略

私之覚

一大隅守(島津久光)就所労不得止御猶予奉願候ハ、、就
御下問愚考之趣意ハ長門宰相江打合、同侯より大綱之
次第言上仕候様可仕云々、
一前条ニ就而は大隅守ニ代り修理太夫
勅使江奉随従候様、乍去自然不得止御猶予奉願義有之

候ハヽ名代之者出京
御礼御受奉申上候事、
一修理太夫義、四月上旬迄ニ東京参
朝、長門守談合、各老主之旨趣を奉し其節条理判然、
巨細を尽し天下之基本相立、国内之方向ヲ確定する者
を建言仕候様云々、
但此建言深重御趣意被為在候事、

## ○ 五〇二 岩倉具視宛書翰 ④—621

謹上、昨夜来委曲申上候通今般之御改革、是迄之弊害一
洗仕候丈ケは御英断無御座候而ハ、其詮不相立而已なら
す、大ニ天下人心失望ニ至リ候事は顕然ニ候、仍而諸省
之冗員を沙し邪正黜陟之事は十分長官ニ被任、実行相挙
従前之三分一にも減省いたし、一定之規則取調可申出様
被仰付度、成程功を急候而も中々国家之政如此際に当り
而ハ、速に卒業ハ難求ハ勿論之事ニ有之、且大小之吏人
悉く純粋之人物と申事もまた出来候訳に無御座、其辺ハ
所謂賢者在位能者在職と申ことく、それ〳〵分に応して
御召仕相成候事、実ニ当然ニ御座候、乍去今日迄之弊害と
いへハ、畢竟人撰乱雑定則不相立処より、天下之笑を来
し候儀不少、一時弊を矯候にハ曖昧姑息に出候而ハ、中
々根株を鋤去る事出来不申候、況乎今日如此之大弊ニ至
而ハ無申迄事と奉存候、仰願くハ纔ニ眼前之官員中之物
議ニ無御抱(拘)、普ク全国人心之得失如何ンヲ御注意あらま
ほしく奉伏希候、西郷にも此条不被行候得ハ、御請難申
上と断然申居候、
一相良大丞以下免職之事、其後暫時不参にて承不申候、
いかゝ之御運に相成居候や、若未其まゝならハ明日免
職、藩江御預に而謹慎にても被仰付候方御都合可然と
奉存候、
一政府右大臣納言・参議両人と相成候得ハ、御調草稿と
ハ旨趣相替リ候付、猶御転削有之度、仍而今晩よりに
ても江東江御含メ被成候方可然と奉存候、諸省卿輔ハ
行政之権而已にてよろしく候半、
一諸省卿輔ハ一人宛ニ御定員相成候方可然奉存候、
一外務省ハ諸省之第一等に被居置候方可然、即今外国に

而も右之運に候由、尤仏も此度之新政府にて外務を頭に立候由承候、

一納言ハ彼是論も有之、猶此節之御据りニ相成候得ハ、矢張諸省卿に相成候方体裁よろしく候半と愚考仕候、実に外務会計（大蔵也）中務之如キハ、納言之内より卿に御居り之方よろしく候半、厚御勘考有御座度奉存候、

一是迄華族知事或は長官等之処ハ、姑息を御離れ断然免職不相成候而は相済申ましく、誠ニ恐縮之至ニ候得共、無忌諱申上候、

一外務之処は他省とハ違ひ候付、卿丈之免職に而宜舗ハ有御座ましくや、乍去一日置而神速に被仰付候得ハ、格別も有之ましく、此に不都合無之様奉祈念候、

一兵部省ハ山縣を太輔に被任御まかせ可然と奉存候、

右ハ僭越之次第恐惶至極ニ候得共、存付申上候付御見合之一端にも相成候得ハ幸甚不過之奉存候、頓首百拝、

六月廿四日　　利通

岩倉公

秘啓

一一身進退之事奉願も恐縮奉存候へ共、万々一諸省之内に御撰ニ預り候ハヽ、是非太輔之処にて被仰付候様神懸而祈願仕候、敢而謙遜辞譲而已に無御座、大ニ一省ニ手も延ひ可申旁御為に可然と奉存候、極内々大蔵云々之事拝承仕候得共、是のミハ真に目的相立兼候付、何卒御憐察ヲ蒙り、外に御任し被下度内願を申上候得ハ、中務太輔之辺ならハ十分尽し見度と奉存候、幾重にも奉歎願置候也、

「岩倉殿　　利通

封　　」

## ○　五〇三　㊨「岩倉公へ呈せし意見書」

②—171

去ル九日

朝廷大御変革

御発表以来之形体ヲ熟考するニ、既ニ二大事ヲ被失候而、

皇国之事十ニ七八ハ不可成と歎息涕泣いたし候折柄、将ニ三大事ヲ失セラレントス、三大事共ニ被失候ヘハ、皇国之事瓦解土崩、大御大変革も尽ク水泡画餅ト可相成ハ顕然明著トいふべし、

皇国を奉深憂之もの豈必死ヲ以尽サヽランヤ、抑一大事ヲ被失候トハ九日

御発表、尽ク御内評通断然

叡慮ヲ以徳川氏御処置、會・桑進退等

御達之御都合ニ運兼、衆評被聞食候御事と相成、徳川氏ヲシテ即夜参

朝、御評議席ニ可被召加ト之趣、越・土公或ハ後藤ナト必死ニ論シ、漸クニシテ是ヲ論破シ、尾・越之周旋御受と相成タル時宜合、是第二等ニ陥リタル基ニテ、畢竟衆評ニワタラス確断ニ出候得は、第一等之策ニ万々疑ナカリシニ被失候御大事ノ一也、第二ニハ徳川氏為鎮撫下坂ト申表面ニ而、内実ハ華城割拠ノ勢ヲ成シ、帰国セシムルノ御受ヲ成シタル會・桑ヲ滞坂セシメ、剰へ要所々々警衛公然申達シ、兵士ヲ差出シ　洛中同様之伏見・淀城迄多人数兵士繰り登セ、

朝廷之　御趣意ニ乖戻、不遜ナル紙面ヲ以外国ニ相達シ候次第、恭順反正ノ趣意ナラサルハ分明ト云フベシ、然ニ旧臘廿三日廿四日

朝議之節両事件確定之

叡慮通御紙面ヲ以テ被

仰出候処、眼目之御文字依願第四五等ノ策ニ堕在ス御改相成候儀必定、徳川氏ヲシテ上京セシメ、然シテ同意ノ藩ヲ語ラヒ、勢不可得止ノ機会ヲ拵へ

朝廷ヲ奉圧倒、意ノ儘ニ可遂之深策有之事候処、是ヲ見破シテ押ヘタモフ事不能、被失候御大事ノ二ナリ、将ニ失セラレントスル第三之御大事ハ、此儘徳川氏上京相成候得ハ、参朝ハ無申迄議定職被

命候事、合力同心ヲ以扶幕之徒必死ニ尽力イタシ候半、是迄サヘ二大事ヲ被失候次第ニ候得ハ、中々以

朝議不動ト申儀不為叶(被脱カ)ハ、鏡ニ懸テ明也ト云フベシ、若

御動揺被為　在ニおひてハ

朝廷上一之御変動アッテ、依然タル

御衰体ヲ見タモフ而已ナラス、
皇威豈地ニ不落ヲ得ンヤ、是三大事ヲ失セラレントスル
ノ危急ナリ、
右ニ就而是ヲ救ヒ返スニハ勤
王無二之藩決然干戈ヲ期シ、戮力合体非常ノ尽力ニ及ハ
ザレハ不能ト被存候、今在京列侯藩士因循苟且ノ徒而已、
就中議定職之御方下参与職之者具眼ノ士一人も無之、平
穏無事ヲ好ンテ諛言ヲ以雷同ノ公論ニナシ、周旋尽力ス
ルノ次第実ニ憤慨ニ不可堪、依之愚考スルニ干戈ヲ期ス
ル決定ニ至リ候得は公然明白
朝廷ニ尽シ奉ラズンハ万成ス可(衍カ)ベカス、(ラ脱カ)長藩ノ儀長・薩
ノ
朝廷タルヤフニテハ不相済トノ論、一通り当然トハ相考
候得共、如此
御急迫ニ臨ンテ左右顧念アルベキモノナルカ、戦ニ成ル
程ノ見定相付候上ハ、相与ニ参与ノ御受ヲイタサレ必死
ヲ尽シ度被存候、一藩ノ微力ヲ以迚モ衆多ニ不及、今日
ノ事不及候得ハ施スニ術ナカルベシ、
一外国江徳川氏示諭之紙面
君家之事ヲ挙ケテ悪事トシ、猶己之罪ヲ置テ他ヲ凶暴ト
唱ヘ候条、実ニ不可捨置之大事ト奉存候間、猶御評議ニ
御懸ケ被成候様有御座度愚考イタシ候、右は実ニ切迫之
御大事と相成候ニ付、幾重ニも粉骨砕身尽サスンハアル
ヘカラス愚考仕候、以上、

正月三日　　大久保百拝

## ○　五〇四　㊨「政府の威厳に関する建言書」　②—287

体立サレハ終始事ニ動揺スルハ必然ナリ、則チ今般ノ如
鎖々タル浮浪士ノ為彼是と狼狽シ、政府ノ体ヲ失シ候様
ニテハ益威権ノ衰フル所以なり、万死ノ中ニ今日ノ機会
ヲ被為得候得ハ、如此ノ小故ハ固ヨリ是レ有ヘキナリ、
西洋各国ノ開化ノ基ヲ建ル物議沸騰ハ勿論、国内ニ於テ
干戈ヲ動セシ事モアリト聞ケリ、然レトモ政府確実寛大
ニシテ条理至当之道ヲ尽シ、其断決スル事ハ屹然トシテ
是ヲ行ヒ、其旨趣ヲ貫キシ故終ニ成功ヲ遂ケ、今日ノ盛

時ヲ得タリ、我政府モ然ラサルヲ得ス、抑数百年ノ大幣ヲ突破シ天下ヲ開化スルニ及ンテ、四方ノ異論ヲ受サル可ラス、彼モ服スルヤフ是モ服スルヤフ人心ヲ計リ政ヲ施シ候得ハ、大創業ノ基本ヲ立ル事得ヘカラス、譬ヘハ寒暑ノ気候ナクシテ天地ノ造化ヲ得サルカ如シ、浮浪ノ徒ニ於ケル必ス

皇国ノ御不為ヲ存スルモノニハアルヘカラス、然レトモ其為ス所往々害アリ、是其識遠大ニ及スシテ固陋ナルト、或ハ御趣意ノ在ル所ヲ不識シテ疑ヲ容レ、又ハ其志ヲ得サル憤意ヨリ起ル箇条ニ止ルヘシ、天下ノ大勢ヲ視ル事不能ス(衍カ)シテ規模狭小、其及ハサルトコロハ可憐事ナレハ、其諭スヘキハ諭シ、善ニ遷リ候様ノ手段ナクンハアルヘカラス、然レトモ外国館ヲ放火スル等ノ確跡アラハ、猶預ナク数百ニ及トモ捕え厳科ニ処スルノ外ナシ、政府今其事上ニノミ注目セスシテ、如何ニモ御一新ノ政府タル所以ヲ尽シ、実蹟ヲ立ルノ根本ヲ急ニスヘシ、前ニ建言セシ府県或ハ官中局々末々ニ至リ候而ハ、旧幕ノ政ヨリ増シタル醜体モアル由頻ニ説ヲ起ス、政府ハ親シク視ル事ナケレハ、是ヲ思慮スル疎ナリトイヘ共、下ヨリ是ヲ見レハ目ヲ掩フニ至ルヘシ、少シク志アル者ハ是ヲ歎シ、忌ム者ハ是ヲ憤ル、況乎莽士ニ於ケルヲヤ、故ニ速ニ此ノ弊ヲ糺スノ手順ヲ下シ、正邪ヲ明カニシ、イカニモ御趣意ノ向フトコロハ至正明白ヲ好ミ玉フト、下方向ヲ改メ候様アリタシ、即今ノ儘ニテ捨置ラル、時ハ正邪混淆是非真ヲ乱ル、其令スルトコロハ公明盛大ヲ説キ、内其行ヲ外ニスルトキハ言行ノ相違スル所以ニテ虚文ニ属スル也、誰カ是ヲ信センヤ、小事ノヤフナレトモ人心ヲ此ニ失フハ可恐ノ第一也、伏而願クハ其恐ルヘカラサルヲ恐レス、其恐ルヘキヲ恐レ玉ハン事ヲ、

(印)
大久
三両
廣沢
岩下
副

## ○ 五〇五 ㊞「政府の体裁に関する建言書」 ③—290

一即今ノ緊要ナルハ政府ノ体裁ヲ得ルニアリ、本体立テ

百物挙リ万民其所ヲ得、一般ノ化育ヲ被リ、初テ堂々タル王者ノ政ヲ布ニイタルヘシ、蓋シ御一新后ノ幣ヲ観察スルニ其大害三アリ、体用顚倒シテ確実寛大ノ本不立、左思右顧動スレハ変移スル是一也、人材ヲ挙ルハ政ノ根本也、然ニ撰挙ノ法疎ニシテ進退須臾ニ変ス是二也、政アレハ制度規則アリ、百官有司心ヲ一本ニ尽シ、居ヲ異ニストイヘトモ趣ヲ一ニスル也、然ルニ其法則不立シテ各自ニ専恣シテ乱ル事如麻是三也、抑復古ノ大業僥倖ニシテ成リ、　皇国ノ盛時ヲ視ルニ似タリトイヘトモ、前途猶遠シテ未其中央ニ至ラス、或ハ云、兵馬匆卒ノ際全備ヲ尽サヽルハ止ヲ得スト、政府在官ノ人ニシテ不能言ノ遁詞ニアラスヤ、既ニ政府アレハ其政府タル職掌ヲ尽サヽルヲ得ス、去ナカラ既往ヲ咎メテ無益ナレハ、自今在職ノ人協心戮力憤発勉励、夜以テ日ニ継キ翼々トシテ不倦、各其職掌ヲ尽シテ其弊ヲ済ヒ、其基本ヲ立テ太平ヲ致スニアラサレハ、朝廷ノ罪人タルヲ免サルヘシ、横井氏横死ニ於ケル政府ノ威権ニ抱(拘)ハルトイヘトモ、不辱任ノ美ヲ見ルニ足ルヘシ、扨其三大弊ヲ済ノ法術他事アルニアラス、前条政府在官ノ人目任シテ其才力ヲ伸シ、私ヲ去リ公ニ就キ実行顯然タルニ至ツテ、政府ノ根軸其一端ヲ開クトイフヘシ、其一端開ケサレハ万機ノ事一モ挙ルノ理ナキ故、只此ニ着目シテ粉骨砕身スルニ止ルナリ、

一政府ノ実行顯然相立候得ハ目ヲ其体裁ヲ得、従テ不可抜ノ威権ヲ生スヘシ、然レハ体用ノ本末ヲ不失動揺ノ憂ナキ所以也、

一政府ノ政府タル実行挙リ候得ハ、人材選挙ノ法立スンハアルヘカラス、其法立候得ハ妄ニ人ヲ用、進退須臾変スルノ憂アルヘカラス、

一政府ノ政府タル実行相立候得ハ、制度規則従テ相立、且諸官ノ得失ヲ糺シ正邪ヲ黜陟ス、然ハ諸官ニ於テ政府ノ体ニ慣ヒ、法則ヲ守リ専恣スルノ憂アルヘカラス、

右本体ノ大略

一政府ハ万民ヲ保護スル本職ナレハ、確実寛大ニシテ狐疑ヲ抱カス、泰然トシテ恐怖スル処ナク、規模恢廓制度整斉内外守寧ナルヲ緊要トスヘシ、仮令ハ天地ノ化

育万物ニ私ナキカ如キ也、即今争乱初テ定リ人心危懼ヲ生スルノ時、上少シク疑ヲ容レハ下背クハ必然ノ理ナレハ、至公至平ヲ以テ心トシ、旧物ヲ改正幣ヲ除クヲ旨トシ、空論ニ馳セ新奇ヲ好ムヘカラス、且寛急順序ヲ弁別シ進歩ヲ急カス、其目的ノ達スヘキ条理ノ適スルニ至テハ、是ヲ施シテ断々然トシテ動ヘカラス、即今宇内各国全盛ノ政ヲ布、文明開化ノ教ヲ施シ一備ハラサルナシ、由テ是ニ慣ハサルヘカラス、然トイヘトモ其来ルヤ、漸次ノ功ヲ積今日ノ治ヲ成ニ至ル、我皇国革命ノ秋ニ当リ仮令ハ三尺ノ童子ノ如シ、慢ニ是ヲ墨守シテ其分ヲ計ラサレハ、虎ヲ画テ狗ニ類スルノ憂アルヲ免レス、故ニ先政府ノ体ヲ屹立スルヲ要シテ静ニ天下ノ大勢熟察シ、其枝葉ノ小事ニ拘泥セス大事ノ施スヘキヲ徐々ト手ヲ下スヘシ、故ニ先ツ無識文盲ノ民ヲ導クヲ以急務トスレハ、従前ノ俗ヲ失ハス、教化ノ道ヲ開キ学校ノ制ヲ設クヘシ、然テ其基ヲ立ル、速ニ公卿諸侯藩士ノ内情撰抜擢シテ政府是ヲ雇ヒ、其費用ヲ弁シ洋行遊学ノ法ヲ設、人材ヲ造ルヲ第一トス、

是其漸次ニ成ルノ基本ニシテ最可施ノ要条ナルヘシ、

一良朋アラレサレハ一身ヲ保事不能、良輔アラサレハ君道ヲ尽ス事不能、恐ナカラ

主上未壮年ニ至ラセ玉ハス、即今　御徳器御成修之肝要ナル時節ニ候得ハ、御精撰之上輔導ノ任ヲ置カセラル最要条ナルヘシ、

一政制ノ編集成功候ハヽ大評議ヲ以政体ノ増補ヲナシ、不抜ノ規則ヲ立ラルヘシトイヘトモ、其内府県ハ勿論各局ニ於テ弊害相見得候事ハ早急ニ之ヲ除、人物ノ当サルモノハ速ニ黜陟ナクンハアルヘカラス、此御処置尤御大事ニシテ、人心ヲ正シ風俗ヲ改ムルノ最要条ナルヘシ、

一既ニ待招局ヲ設ルノ議アリトイヘトモ其実行ハレス、人材撰挙ノ法立サル故交失体ヲ生スル也、　皇国未学校ヲ以人材ヲ出スノ道ナケレハ、是非待招局ノ類ヲ置議参或ハ弁事ノ内混ト専任ヲ命セラル、ヘシ、仮令ハ人撰ヲ誤ル時ハ其責ノ帰スル所ナクテハ必乱ル所以ニシテ、党ヲ引類ヲ求洽ク天下ノ賢ヲ得サセラル可カラ

ス、最要条ナルヘシ、

一弾正官ヲ設ルノ御布令アリトイヘトモ其実行ハレス、譬ヘハ要路ノ人不正ノ悪行ヲナストイヘトモ、譴責ヲ受ルノ恐ナケレハ忌憚スル所ナシ、然レハ廉恥日ニ廃シ侈靡風ヲ成シ振起スルノ謂レナシ、因テ其人ヲ撰其任ヲ置カレ候義最要条ナルヘシ、

右末用ノ大意

即今緊要ノ事件ヲ勘考シ、順序ヲ以見込申上候様御下問之旨謹承仕、浅見寡聞之小臣不堪恐懼候得共、苟モ要路ヲ汚重禄ヲ貪リ在列仕候上ハ、黙止居候而ハ本懐ニ非ス候故不憚忌諱妄言仕候、多罪々々、

正月　　大久保一蔵

## ※　五〇六　意見書

一廟堂上之目的一途ニ帰着シ、不抜ノ根軸ヲ確定シ、其浅深ヲ窺知ラシメサルノ注意肝要タル事、

一処韓之順序十分廟算ヲ尽シ方略ヲ一定シ、徐ロニ之ヲ謀リ厚ク之ヲ鑑ミ、敢テ衆説ニ拘ハラス勢ニ動セス、成功ヲ遠大ニ期スル事、

一陸海軍ノ方向ヲ一ニシ、士官以下兵士ニ至ルマテ政府之命令ヲ遵奉セシメ、上ヲ凌キ衆ヲ動シ疎暴ノ挙無之様速ニ処分ノ事、

一会計上ニ注意スルハ論ヲ待ス、政府非常節略ヲ施シ無用ヲ省キ冗員ヲ汰シ軍国ノ政ヲ施布シ、断然不可奪ノ旨趣ヲ貫徹セシムル事、

一御雇仏人フハソナート（ボアソナード）氏江公法上ヲ論窮シ詳細取調置キ、且各国公使江報知ノ順序ノ事、

一朝鮮支那派出等ノ順序、

一各国在留公使江報知ノ事、

但支那在留公使江云々ノ事、

一地方官江示諭ノ事、

外ニ

大目的　朝鮮ヲ開化ニ誘導スルノ旨趣、

朝鮮ヲ我有ニ属シ呑噬スルノ旨趣、

朝鮮ハ和好ヲ破リ交際ヲ絶チタルモノト見做スカ、

朝鮮ハ和好交際未接続スルモノト見做スカ、使節ノ談判ヲ要シ問罪ノ師ヲ差向ケラル、ハ此目的ヲ定ムルニ在リ、

## ○ 五〇七 ㊨「悪幣禁止に付き藩庁への建言書」 ③—334

近来金札之下落甚舗、就中於東京は正金半価ニも不至、実ニ万民之困苦無申計、愁声路傍ニ喧々不忍聞也、然るニ今形ニ而ハ諸色ハ益沸騰終ニ破壊ニ及候外無之、京摂ニおひても会計官等別而心配、種々之趣法ヲ以一時危急ヲ救はんとし姑息法ヲ立候得共、是以永世之事ニあらす、昇降日ニ変何之地ニ止るヲしらす候勢ニ而、殆ント術計尽候次第と相見得候、扨其金札之狂ひ候所以を推及するに、初メ引替なし之紙幣ニ而、固より 官庫空虚なる故其信無之、民心染付す候事顕然候得共、外ニ今一層之害ヲ成モノアリ、近来於諸藩悪幣ヲ製造し、阪地ニ輻湊して金札ニ売買ヲナシ、京阪庫ニ悪幣盈ル事十ノ七八ニ及、其藩ニハ加州・藝州・土州其余小藩思々に造り立、悪金之類凡十八種有之、是ハ何れの藩と申事委敷相分候由、中にも 御国之種多ク蔓延イタシ、悪幣之本ハ御国にて諸藩ハ皆陰ケニ成居候形ニ候事、

一日本ニ於テ悪幣ヲ製造イタシ候旨外国ニテ評判ト成リ今般英国ヨリコンヘニーイノ監察ナル某参リ、外国交際ハ其本相互ニ有無ヲ通シ貿易スルニアリ、貿易之本ハ貨幣ニアリ、此貨幣製造ニ付万国不通ノ悪金ヲ拵ヘ、外国人之損失と相成候而は誠ニ一大事之訳ニテ、難捨置処ヨリ参り候とて様々難題ヲ申出候由、外国ノ為ハ勿論国内人民之為ニ、彼ヨリ貨幣局ヲ立製造可致、或ハ悪幣丈ケ之償金ヲ取ナト、頻に申立当分談判中也、

一会計ノ目的ハ約り純粋ノ新貨幣ヲ製造スルノ議ニ決シ候(衍カ)候得共、其迄之間誠ニ六ケ舗、即今之急ヲ救ニハ、於諸藩製造之悪幣ヲ止サレハ、何等之策モ行ハレスト、少シク

朝廷ノ為ニ憂ル者ハ慨歎して長大息イタシ居候形也、

一皇国前途之事会計ノ立ト不立トニ於テ、安危興亡ノ分ル、所ナリ、況乎其事件ニ付既ニ外国人難題ヲ申出、

政府ロヲ開ク事得サルノ勢豈是ヲ大患セサランヤ、然ニ其悪幣ヲ製造スル根本ヲ、　御国ニ目的セラレ候テハ其罪小ナルヘキヤ、且臣子タルモ忍フヘキヤ、天下万世名義ノ上ニ於テ毫髪モ間然スルナキヤウニ、　君ヲ輔導奉ルヘキニアラスシテ他ニ道ハアルマシ、成程是迄之形勢ニテハ不得止之情アリ、強テ可論ニアラサレ共今日一新ノ上ハ断然止スンハアルヘカラス、仮令国家立サルニモセヨ顧サルコソ、初メ両公之天下ニ大義ヲ唱ヘ国家ヲ抛、復古ノ基本ヲ開玉ヒシ御本意ニ叶ハセラルベシ、

右我々共評議之形行也、

朝廷上ノ大基本立、不立ハ且ク置キ、会計一事ノ上ヲ以テ熟考仕候ニ、誠ニ天下ニ面皮ナキ心地ニテ、難忍至情ヨリ前条形行申上候、尚厚御勘考之上御同意ニ於テハ早々御果決所願也、

## ※　五〇八　覚書

六月三日

一鉄道高輪江引直シノ事、

一海軍所云々ノ事、

一會津開墾ノ事、

但内情云々、

一水戸ノ事、

一水戸人弾台登庸ノ事、

一赤松民部省江登

一兵部人撰ノ事、

一主上御基則ノ事、

但九字ヨリ十二字迄

表出御　三職拝

天顔

## ※　五〇九　覚書

長

薩　賞典

半方五万石ツ、

窮民之御救ニ被宛

政府重職月給

三ノ一

右奏授官迄

四ノ一

判授官迄

## ※ 五一〇 覚書

御領

拾五万石　半銀残り

功臣賞典

弐拾万石

## ※ 五一一 覚書

一西郷就帰藩尚談合之趣有之候事、

一谷元洋行之事、

一須坂藩始末

但丸山ノ事、

一折田等滞在入費ノ事、

## ※ 五一二 維新政府人事覚書

第一等

烏丸　宰相

小松　帶刀

兼而出府

西郷吉之助

門脇　少造

大村益次郎

小原仁兵衛

丹羽淳太郎

新田　三郎

山田一郎右衛門

陸原愼太郎

今度会計権判事被仰付賜位記

林（得能亜斯登）玖十郎

右本官ヲ以江戸府判事并

権判府事試輔兼帯

○

木村　三郎
船越洋之助
河田佐久馬
土方楠左衛門
清岡　岱作

右徴士ヲ以江戸府判事
片桐　正作

右徴士ヲ以江戸府権判事
江東　新平
小笠原唯八

右軍監ヲ以江戸府判事兼帯

○

江戸府判事権判事を以万機分課所置スヘキ事、其発令等根本ハ輔相及参与ヲ機軸トスヘシ、

弁事
知県事ニ可然
清岡　五位
○新田　三郎
○土方　大助
西尾遠江介
知県事ニ可然
縣　勇記
北川亥之作
山田一郎左衛門

会計
試補
両人
○長谷川仁右衛門
○江東　新平
○嶋團右衛門
○北島仙太郎
横川　源藏
中村　壯助
池田勝三郎

東京府
片桐　省介
山口　範藏
中井　弘蔵

## ※ 五一三 覚書

此書取ニ而見付は有之間敷候哉之事、

(印)
諸侯掛

## ※ 五一四 覚書

愚論

長州ハ非常処置無之、至今日猶定法ヲ守リ、其上詔諛ノ心離不申ト相考候、

薩ハ実天下ヲ憂ル心可感事勿論、挙三国御奉公相違無之候、

## ※ 五一五 覚書

一学校之事、

一邪蘇徒可動不可動之御治定之事、

一唐太之事、

右之件至急御評決被為在度、

## ※ 五一六 覚書

「　　佐倉藩
　　佐藤　舜海」

大転士

池邊・西村・吹田

奥羽会計取調として被差出候事、

## ※ 五一七 大久保利通神道碑文草稿

贈右大臣大久保公神道碑

参議兼内務卿正三位勲一等贈右大臣正二位大久保公神道碑

侍以下十二字刪省何如

趣旨非厳、先揭詔、以下四維、後面揭詔、為之飾、承修
叙井然、每段一断、閑服、長松幹
大文宇宜如此、敬、欽之碑、蘇之范碑、睿華欽之碑、故拙裏詔立碑、我邦勅作撰碑、大二公為之大如此撰碑木公括公之大郎華勅撰碑詔大公括公之大郎
偉烈、又敷幕所髄士之民外
為之経紀、澤士整
「四項、尤得体製之宜、
斉華族、特賜金三万円。邸其家。
浦安

参議兼内務卿正三位勲一等贈右大臣正二位大久保公神道碑

明治十一年五月十四日。参議兼内務卿正三位勲一等大久保公薨于官。天子震悼。遣侍臣臨弔。翌日詔贈右大臣正二位。賜賻。越数日。叙公嗣子利和従五位。班華族。特賜金三万円。邸其家。

首歌、明詔、貼之、如綱、在而下、以
素、何等、大手、綱、有、中村、正而直、本末二分
中興、四段、明明、提、出、而直、不
後分、四段、一、明、結、長、篇、而直、
以事、條、由、是、一作、糸、正、直、
股肱柱石字、一見于詔中、三見于銘、
二見于文中、是通篇眼目、正直、
此四字、是篇眼、開直、
叙起山一段、斉篇厳、
窓山一段、如武、
理窓見、久米邦武、
或作治者、撫、猶久有、
面忠純公乞高岡、別久有好字、
公遺公誠亦立冒、治体、
性度、下云、冒、恒、
而公之性度、云、再、安、
翼云何如、修、安、

遂　勅侍補臣吉井友實。考索公事実。編修官臣重野安繹紀文。刻神道之碑。臣安繹伏読　褒贈之詔。曰忠純許国。策鴻図於復古。公誠奉　君。費丕績於維新。剛毅不撓。外建殊勲。英明善断。内奏偉功。洵是股肱之良。実為柱石之臣。嗚乎尽之矣。凡公之蹇蹇為国致身。大節偉烈。有始有卒者。皆可按　明詔而知之。蓋　国家中興。始有幕府之難制。継有諸藩之難理。後又有士民之難諭。而外事之難処者。常雑于其間。苟非発大難決大疑。而其心出於忠純公誠者。何獲克済、而公之性度。適与之符。是殆天以公遺　陛下。　陛下明知善用。擢於陪隷之賤。置諸股肱柱石之任。終加以槐府之貴。　明良遭遇。成此丕丕之基。」臣奉勅昧死上公事曰。公諱利通。初名利済。

以西郷隆盛為陪客、實乎一篇、両対比、時亦帝木戸孝允、以此三傑鼎足、而定中興之大局也、正直

隆盛為於外、公贊於内、語簡而的当、安

通称正助。後改一藏。藤原姓。大久保氏。薩摩人。世仕藩主島津氏。其世系不可得而詳。考諱某。称次右衛門。妣皆吉氏。考以気節称于郷里。嘗座事流竄。遂家居不仕。公自少有異資。沈静好学。不喜少年遊遨事。同里有西郷隆盛。慷慨有大略。公与之親善。当此時。幕府失政。士之唱勤　王者競起。贈中納言島津齊彬。窃有匡済之志。公与隆盛。屢建白意見。稍被親近。而齊彬俄薨。藩論一変。隆盛亦触幕府嫌忌。流南島。公雖在微賤必欲成先君志業。会今正二位島津久光。以齊彬之弟。輔佐藩主忠義。将大有所為。擢公為近侍。参機務。公乃首請。召還隆盛。隆盛豪爽濶達。為士林所服。公則沈毅周密。為在上所信。隆盛為之於外。公贊之於内。遂俾薩藩達其所欲為。（文久二年）文久壬戌。

輔之作副之、何如、於事実当否、　四谷恒

幕府大窘四字刪何如　四谷恒

他人駭愕、而公則以為好機会、蓋乗機会、而不失其時古今英雄皆然、　正直

莊肇祺徳、近於一時遊戯、事之小者、此段終覚与前後諧大節不相副、猶愛何如、　小牧昌業

久光赴京師。公従焉。久光奏請。釋親王公侯獲譴幕府者。令一橋慶喜。松平慶永佐幕府。　朝廷納之。遣大原重徳。論旨幕府。久光輔之。是時幕府雖已衰。威権猶重。

朝命公議。動輒沮格。公承久光之意。関説幕僚。周旋甚力。幕府遂奉　朝旨。於是公之声誉始著。慶応乙丑（元年）。英佛諸国迫幕府。開兵庫港。　朝議未許。士論益喧騰。諸藩亦多咎幕府。幕府大窘。大将軍家茂奏請解政権。使能者代之。蓋要之也。挙朝駭愕。公則謂此好機会也。宜允其所請。召集侯伯。博採公議。内政外事。　朝廷自為之。就内大臣近衛忠房言之。議格而不行。時幕府再用師於長防。令諸侯出兵。公陳征討。無名拒之。一日幕老召公。懇諭其応命。公佯為　朝命討幕府者。愕曰。雖幕府

莊肇一事、専出於臆略、与全篇述忠純、許国不相似、公佯以下刪、以公弗肯等語括之、何如、　恩野恒

接済字当否　藤野正啓

有罪。弊藩以兵撃之。情誼所不忍。然已有命矣。敢不報寡君。幕老大声弁之。公竟為不聞者而退。薩兵已不出。諸藩多懐観望。幕府遂托喪罷兵。自征長師無功。幕府之威権始去。然守護所司二職。猶憑藉積威。凌公卿。制　朝旨。久光察其不可匡救。将資兵力。遣公於長藩通意。且請其接済。公貝長侯父子。与木戸孝允等定議。藝藩亦応之。三藩兵已指大坂。朝廷乃降　密勅於薩長二藩。緩急令待命。而大将軍慶喜上表。奉還政権。実丁卯十月十四日也。慶喜已還政権。而猶不解其職。擁大兵駐闕下。　朝廷未能挙総攬之実。而議者或欲緩以処之。公恐其誤事機。疏言此千歳一時。弗可失也。一議遂決。　詔廃摂関将軍守護所司諸職。新置総裁議定参与。忠義等列議定。公任参与。遂草

内諭二条。慶喜奉　命。初岩倉右大臣。嘗蒙譴幽居。公潛納交。相与図謀国事。以至此。其密算秘策。多世不及。知者。公知慶喜及會桑二藩之必生事。予疏応変事宜。至明年正月。果有伏見鳥羽之変。薩長兵邀撃敗之。征討大将軍嘉彰親王。請公為参謀。及慶喜東走罷之。太政官始設七科。以公参内国事務。又為総裁局顧問。公以謂一捷之後。人情偷安。恐終誤大事。　天子宜速幸八幡。移　蹕大坂。中外事皆於　行在処之。公発此言。尋上遷都議極言興利害。無幾下　詔親征。　幸大坂。遂至東遷者。公之議発之也。四月。公朝行在。上召見賜坐。藩士賜謁。此為始。廷議将封徳川氏為列侯。而難発之。公曰。封之滅之。決在于我。彼若不服。則大纛東指耳。何猶予之有。議乃決。

当時先以中山卿勤宮中、御門岩倉二卿助之、討幕密勅、出此数卿奏聞、中山卿算秘策字、下得恐実、安中御筆可点出、門不詔二卿不詳、安以至此三字、似可成中興之業、攷歟、散質、星野恒

参謀或有之、為参謀恐無之、乞再検、　幹

何猶予之有五字刪何如　依田百川　三浦安

今太政大臣三條公。往鎮関東。公自請東下。佐鎮将理庶務。関東大定。　明詔所謂忠純許国。策鴻図於復古者是也』。幕府既廃。世或疑勲功大藩。将代幕府。薩侯忠義上疏。請献封邑十万石。優旨不允。而諸藩納封之挙踵起。転待詔院学士。十余日任参議。是歳。大論賞復古功臣。叙公従三位。賜禄千八百石。公上表固辞。不允。会歳歉。請納禄充賑救。表再上。乃聴之。三年十一月。遣岩倉具視。　手詔召久光敬親。公与孝允従之。久光乃使隆盛代朝。敬親亦遣其子知事元徳。公与隆盛孝允赴土藩。伴其大参事板垣正形而還京。四年三月。請自降官一等。不允。於是隆盛孝允為参議。而公任大蔵卿。七月。詔廃藩為県。各藩知事悉免。是歳十月。岩倉右大臣為全権大使。赴欧米各国。

按上書文意、在宏張軍政、其情実如此、百少叙乖曲折、否則似与上書宜文意、則薩侯再考文、従原文、逗、納封之挙、首出於公之議、正直、則此一事其功尤大也、

伴字妥否　星野恒

如下加遇何如　星野垣

公与孝允副之。公等在外二年所。而朝鮮之議起乎内。乃召還公及孝允。遂任参議。初参議江藤新平等。以朝鮮無礼欲伐之。西郷隆盛時為陸軍大将。請奉使往諭。不服則用兵。公以為方今急務。在整頓内治。未遑及外事。与岩倉右大臣。力陳其不可。孝允亦同議。隆盛等以其説不行。皆解職去。公与隆盛情交極密。協心謀国。以成大業。至此其議遂不合矣。朝鮮之案。公自著其説。有云。我与朝鮮。鷸蚌相持。必有為漁父者。是可虞也。且我与各国立約。礼非対等。如英佛置兵我地。殆如属国。此之不恥。而独咎朝鮮。忍於大而不忍於小。察於遠而不。察於邇。愚未得其解焉。十一月。置内務省。以公兼卿。隆盛既去。公任国事益力。内外変乱。皆自当之不辞。七年二月。江藤新平等作乱於佐賀。公請往鎮撫之。上允之。許便宜従事。賊襲県庁。殺官吏。官軍進討。公自督戦。賊敗走。新平等尋被捕斬。自公発京。四十余日而事平。後数日。又有討台之挙。朝廷以臺灣生蕃屢殺掠我民。遣陸軍中将西郷従道。督軍討之。軍抵長崎。米英二公使主中立説。拒我傭用米艦米人。勅公往処分之。公至則購船艦。以供征役。罷用米人。軍遂発。已而蕃人伏罪。清国乃有違言。駐清公使柳原前光往復論弁。不決。公乃請往措弁之。八月。以公為全権弁理大臣。差遣清国。公抵清京。与其諸大臣会議。彼以生蕃為其版図。目我為侵越疆土。公反覆弁証其誣。彼不肯服。公以為此非口舌所能事。将罷帰。使告之曰。事理明白如是。而不翻然改図。是貴国自棄和好也。於是清廷

事刪何如　四谷恒

胸中有成算、而後応英公使之問、仮令佛外人之助、公之識知其情、偽以下数句、公安心事如見、叙得妙、安

諸臣請延帰期。遂認討蕃為義挙。許償弁銀両。公因草定条款三事。約乃成。公即日上途。抵臺灣。与都督従道。商議撤兵事。十一月還京。　上臨官庁。手詔慰労。越数日。　内旨賜金一万円。公上表固辞。不允。明年十月三十一日。当清京結約之日。　上念公勲労。勅賜酒肴銀盃。　明詔所謂剛毅不撓。外建殊勲者是也。清国既帰和好。明年朝廷以樺太島。与魯国久利留島交換。又明年有朝鮮修好之事。而英佛亦撤其護兵。『於是外事之難処者漸理矣』。外事既理。公将専修内政。是時木戸孝允在散職。適省郷。公欲起之以共事。使参議伊藤博文致意。往会于大坂。前参議板垣正形亦来会。八年三月。孝允正形復任参議。公奉　命。与二人及博文。議定政体。四月。兼地租改正局総裁。

前之図廟長一和、在困厄之時、孝允共事不得和、然後之、起是難、任公所不及、為此公所不可、故難事則其積神常在国家自担当、平時則推薦人安

私第臨幸、不与内政修挙相関、移置未帙以見公知遇之渥何如、或書論上下隔絶云云之下帯叙亦可、　星野恒

公又憂物産之不殖。国力之不旺。常欲振起之。於是上書。条陳其方法。因表請納賞禄。以充興産費用。　優詔聴之。後叛内国勧業博覧会。公奉命為総裁。九年三月。公又上書。論国力軽重之原由。反覆切至。四月十九日。　上幸公第。夫人諸子皆賜　謁。宴楽極歓而罷。五月。　車駕巡幸奥羽。公奉　命先発。歴諸県迎　蹕。遂抵函館。七月。併合諸県。定為三十一県。又定県官任期例。設考績法。於是地方之事以次修挙。而鹿兒島之変作。初隆盛之帰鹿兒島。少将桐野利秋・篠原國幹等。亦相従去。其徒興私校。意気結合。是非　朝政。勢漸不可制、因勧隆盛挙兵。時十年二月。　車駕在西京。公即草討撫方略上之。直赴　行在。公以為吾与隆盛。睽隔数年。然今以大義往説之。必有所合。

主帥作魁首何如、　四谷恒

詔上加尊、十二月廟何如、朝廷既有正史、公家有年譜、行状、碑、神道碑、必載年譜、不皇野恒月前曾做此、推婆鹿兒島之乱至公心也、関係詔、詞公明文中興之業一段、極有相承賞称下功之事、則与此稍渉重複、故鹿兒島之乱云、詳述於他文論愛、何如、星野恒

叙公之性度風采、深功允当無一過、褒虚称而見其人物自超群、為明治中興之第一人、敵知之深、叙之誠相公亦肯肯于地下、安

彼能制其徒。不使至叛乱。因請単身赴鹿兒島。台閣諸公皆止之。公固請不已。既而聞隆盛為主帥而止。遂奉　命駐大坂。与三條太政大臣及孝允博文。翼聖算。措弁征討機務。於是官軍海陸並進。賊勢日蹙。公乃還京。――隆盛等敗死乱平。十一月。叙勲一等。賜旭日大綬章。十二月。叙正三位。賜勲章年金。十一年五月十四日。公参朝。途歴清水谷。有兇人刺公車上。公薨。十七日。葬青山南町之塋。　天使蒞焉。儀杖兵護柩。令文武百官送葬。公以天保（天保元年）庚寅生。享年四十九歳。夫人早崎氏。公薨後数月。以疾歿。八男一女。長即利和。第二子是利。出継牧野氏。第三子利武。第五子雄熊。幼女名與志。皆夫人出。第四子達熊。第六子駿熊。第七子七熊。第八子利賢。皆側室杉浦氏

写出性情容貌、細入毫髮、而括生平大業、以結前段、所謂公之所以為大、一節大正直字、有千鈞之力、

出。公軀幹修頎。容貌端重。儼不可犯。而接人以至誠。外剛而内和。性善任事耐物。其所欲為之事。必達其志而後已。盤根錯節。煩難紛糾。人所不能堪。公則精神益鋭。把持益堅。処之而不擾、綽綽乎有余裕。其作事。主于持重。縝密安詳。必反覆熟慮而後発。大事不忙。小事不苟。至事機已発。則勇往直前。無復所顧疑。此其所以摧堅排難。而成就偉業。凡施設。言不必已出。意已可之。則自以為事。必欲達之。然衆議所不諧。理勢所不可。則亦不欲遂己意。平素推能進材。毫不以名位先後介懐。同列率皆其所汲引。公与之比肩共事。而怡怡然惟和。然一以非理犯之。雖先輩故旧。不少仮貫（借）。至于終身絶之。或以此短公。而不知公之執正不回。其本領乃在此也。自丁卯（慶応三年）冬為参与。居枢要

終身絶之、仮令有其事実、不免弊、改作断然絶之、其執務不明、取捨不公、此之所以為正也、汝下「文」衍、或以此情公然六字、何如、安

得字顧俗字並刪、模擬皮相四字作浮幕影擬以失国体何如、星野恒

濟世道言盛典録公語、一段尤見公文志宏遠、使人道惜之意無尽、其人自爾、故其文副之、安

末一段、所謂余波也、然此一事、具見公之大規模大本領、嗚呼使公生于三期之後、則其所成就、豈止于是哉、惜夫、

結末更進一歩、顧遷都初議揚公之忠純公誠、始以養君德固聖明知公念為本、亦応首陛下明知之深一句、一系弗浅、筆力万安用、

叙事尽尽之、故銘辞不繁亦審得其体、如典重簡古、如説話園公先碑銘、朝幹

参大政者十一年。朝之元勲宿老。或死或去。在位者亦無幾。而公巋然班参贊之上列。威望尤隆。以身繫　国家軽重。姦回不逞之徒。陰謀害之者数。人皆危之。請為之防備。公微笑不応。遂及難。或以此惜公。然其自信不疑。置死生膜外。此公之所以為大也欤。公常以為施政之本。在培養　君徳。因屢請選啓沃輔導之任。往年遷都之議。極言尊厳大過上下隔絶之弊。後又論奏政体云。天子当日　御政庁。以総万機。此公之忠純公誠。為　国家慮之尤遠且大者。聖明知公之深蓋已諒之矣。臣今詮次公事。遂又及此者。欲明公之志於天下後世焉爾。銘曰　天祐　皇室中興有淳公卿陳謨。侯伯効力。孰左右之。薩有二俊。殪彼将府。徹此藩翰。一俊跋扈。自殞厥躬。終始一節。維是俊雄。忠言

股肱柱石元首是輔大厦斯植句、総明詔結語為文、叙事中不載之者、恐与前語淆乱、故挿之銘詞、作者苦心細思処、安

嘉猷。日夕盈廷。豊功盛烈。策書旂銘。天子曰咨。股肱柱石。　元首是輔。大厦斯植。僉拝曰俞。公　帝者師。天乎天乎。何不慭遺。史臣奉　詔。勒文埏道。以勧百司。勿徒哀悼。維公不亡。猷為乖後。精爽奕奕侍　帝左右。

㊀通篇端重醇正、中寓規頌、深得奉勅撰文之体、真是中興第一流人物、真是中興第一流文辞、

七月二日　長松幹秋琴

典重荘雅、奉勅作碑之体当如是、而文又宏壮雄偉、与其人相副、勅賜碑銘、明治今日之挙為始、此篇亦第一大文字矣、

明治十四年六月五日　史館監事三浦安　始樹四柱、逐段分解、章法段落、整然具備、　依田百川

○典胆荘雅、直可与欧公大碑版方駕斉

駆、通篇以明詔為経、以幕府諸藩士
民外事四者為偉、叙事錯雑、千頭万
緒、而経緯秩然、伏読再四、毎遇警
策処、拍案不已、

小牧昌業（櫻泉）

二行 ㊁如此赫赫大事業、不可無如此煌煌大
文章、全篇典重粛穆、具有法度、而
銘詞古奥、接響雅頌、

辛巳七月下澣　中村正直（敬宇）

篇法之正大、章法之工妙、前評既尽
今不敢贅、聊拾一二以塞責、視作
孔門之仲由幸甚、　星野恒

二行 ㊂喬嶽雄峙巨海震盪使人悼慄而自失真
是一代偉観　島田篁村
質疑
就内大臣近衛忠房言之（第三葉右第二行）
就作因何如
大有所尽（第五葉左第二行）
尽字妥否
情交極密（第六葉左第七行）
情交作情好何如三国志諸葛亮伝先主
与亮情好日密
適省郷（第八葉左第一行）
省卿以不妥何如
取其製弾器云々（第九葉右第八行）
其下加所字何如
島田重禮妄評多罪